091277-000-5

特11-105

浜辺の荒涛

覚張　栄三郎／刊

M19

DBN-2136

明治十九年九月一日内務省文庫

989

○濱邊の荒濤序

逆臣佞討を逆らして主家を囮圖。倦せんと企て及ぶも離つて刑場の露と鮮る亡人となり忠臣時に精忠を貫徹するの千差万別なる其顛末を忽ち起し忽ち訖しぬるも稗史に倚らざるを得んや然れども漸次開化の道中に進む今の世の中へ古説を現はすは少し反對に思へど是れ將た彼の臨機應變古くを先頃文明の囃鼓に音添て濱邊の荒波の顛末を因む中島座が演ずたる活歴史の評判も弥高かり

建部兄妹
幼君之危
難を援圖

一實説を洩らして人に知らさぬの本意なき事と思ひつゝこの一冊の梓弓延へて諸君の御覧にと人より思ひも明三閣が利久富算略看客諸君も其お積りで何分永當々々御眷戀玉はらんとを紙書念ずる杯の言葉に似た節を冠せるはみんぞ怪しみ玉ふなかれ

丙戌の夏汐留街僑居中にて

春永情史のぶる

特11
105

○濱邊の荒濤

其一

人は道を行ふ何事か最も前なる只利義を辨ずるにあり夫れ義は天理の當然にして利は人慾の私なり日用の間一念の發る必ず利を棄て義を取り其利とする處特り富貴を求るも其利忿たる事者同じ故に義理分別の際に於て其機を失へは毫釐を差へて誤るに千里を以てし其害測るべからず豈懼れざるべけんや慎まざるべけんや茲に話説す一編の物語は文久年間の頃かとよ山陰道の其中に思ひたつ矢は石見潟濱邊の鄉の某諸侯は二豎の爲めに世を逝玉ひ幼年ながら一子富丸を以て家督相續の願を上しに速かに聞屆けの沙汰ありけるにぞ一藩の者は稍く愁眉を開きし中に先君左折將監の令妹花子と云へるを本妻に賜りてより其威權藩中に轟きし老臣岩崎肇と云へるが獨快々として之れを悦ぶの色なきは抑も如何なる所存ありての事かと討索に肇は妻花子と乃中に一男子を擧け名を幾之助と稱び當年四歳あり正是先君左近將監殿の孫なれば今富丸をさへ滅はし幾之助を以て當家の嫡子とあらば俺も榮利を娛まんものをと先君在世の時は忠臣義士よと稱へられく堅き精神の岩崎なれども子故の

闇よ迷ひそめ逆意の臍をかためしは寔よ古語よ云へる牝鶏の晨を告る花子が勤よ出でたるなるべし是よりして肇夫婦は窺に富丸を喪き者にせんと曾て金錢を與へて同意させし石戸目計海野金十郎槙田和三郎高木半藏等と謀合せ當主富丸を江戸表へ召されざる内を奇貨とし領分の濱邊に一の別殿を新築ま其庭園へ最と廣やかなる池を鑿り彼三河國にありしと聞し八ッ橋の古事を寫して富丸君が遊覽の當日よ樵碎け池中へ陷入り玉ふ時毒藥を池中よ投ぜ喪はんものをと甚恐ろしくも巧計ゐたる此惡謀を探げるや否亦是よりまて如何なる物語かある开は又次回よ解分べし

其二

再説姦臣岩崎肇い領ケ濱邊の地を選みて新よ土木の工事を起し爰へ別殿ま造築よ着手したり然れども其目的どそる處い廚園内に架渡ま たる八ッ橋破碎ゐ一事よあれば此工事を掌務職人は豫て已が謀計よ同意させすして之綜調ふま玄ど出入の棟梁の中甲乙と撰抜するに植木職六番組の取締なる鹿田屋忠五郎と云へるは自分か幼年の頃の乳母ありしお千代と云へる者の夫ゐして從來邸へ出入も繁く特よい妻の主人なりとて其勤め方も他の職夫とい異る

耳か氣象も頗る濶發なれば之をそ屈竟の味方なりと窃よ忠五郎を呼び寄せ如何説つゆしかも竟に同意をさせたるよぞ庭地の工事は渾て鹿田屋一手の負擔となし其他も夫々持場を割つけ頻りに工事を急きゐたり爾れは恁る謀計のある作事ゆゑ建築落成まてい諸人夫とも外出をとゝめ其自宅へ要向ある輩へ掛役へ申し出て掛役よりそれを執計ひ得さするの規則ゐれば出入其他とも嚴重なる事云ふばかりゐま遣い就れも工場よ來たりし後言渡さるゝ事よまて陰にネ平ゞ鳴そものもあれど所謂地頭と泣子の此喩また詮術をあらさる故工事の竣を他つ耳あり开此中よ彼の六番組ある鹿田屋の人夫よ限りては始よりして詰切乃受負仕事と云へる事を承知の上よて入場し只管勉勵ゐま居るよ予工事を追々捗取て最早彼八ッ橋中の機械乃場所よ及ひしが某日岩崎は海野主計の吩附鹿田屋の部屋を始め一同へ連日の勞を慰する爲ゐりとて酒肴を與へ此上共出精して速よ竣功致そべしと傳へま故一同當日は早職止とゐし頃日の勞を憩ひる中よ鹿田屋忠五郎い部居にある彌之助と云る植木職は年未だ二十四五よして渡世ゐ似合ぬ艶姿且又性質を温厚よて律義なれば同社會の者も贔ぬ者とてゐかりしよ本藩中ある河窪幸太夫の娘登代と云事が早晩彌之助よ眷戀ま私に胸は焦すと雖も原

來堅き作法なる武家の娘の事あれバ了得よ打つけて云ひ出しかねる忍ぶ色音を下女のれ作が敏くも其れと推まてや彌之助の來度毎に曉をよかまよ謎をかくれと更よ感する体ぞあきうち作事に用の人夫とあり小屋よ入たる其後と河窪方へも來たらざるゆゑお登代い思ひよ堪へかねて只鬱々として娛しまずお作はお登代れ心を量り或日お登代よ思ひのたけを認めさせて作事小屋なる彌之助が許よ赴きしが容易よ面會協ねば脚を空しく歸るのみ此事何時か掛役または社會の職人が聞き出たして機かなあらバ彌之助に告げ愚弄せんと思ふ折から今日の酒宴よ醉に乘まて一個が云へば直くに傍から口を添へ寔に彌之助い果報者よ艶治郎よと囃さるゝを正直一徹の彌之助なれバ顔を赧らめ迷惑氣よ其れい全く根もなへ事私い左右河窪様へ其様お噂さが知れてはならぬ何卒戯言い止して下さあと頻よ制めて居たりけり

其三

折から小家頭忠五郎が入り來たりしゆゑお登代の噂も其を限りよして止みいしたれど彌之助は最と心ならず私に肚乃裏よて思ふやう今仲間の者が右や左云つたを根もない事と云ひ消ては居るものゝ先頃からお作どのがお嬢さんからの言傳だと云つて度々訪ふ事も此たが

素より眞個と思いれず非除眞個の事よもせよ身分違ひお武家と職人萬一其様な噂が江湖へ立てゝ已が方よりも河窪様の御名よ係る事なれバと心を勞めて居る折から疾くも誰の口から出たやら前刻の様よ仲間の風聞此うへとれ作どのよ逢つて篤と實否を聞糺し先頃話した事が眞ならば孃様へ御意見申し世上の沙汰を取消さねバ此方の身分が卑いゆゑ誘ふた様よ思いれては親方へ對しても分疏あまと一徹よ思ひ立つたるより根が正直の心から片時も落居る事は出來ねど外へ出づるを堅く禁ぜま工作中の規則なれバ詮方なくも小家よ飯りて枕よ就けども此事が心に懸りて眠られずまた起あがつて小家を出て徐々門口の邊へ來しよ門番の侍士も宵よ饗應酒のあり〜と見え酩酊の狀よて臥まあたり彌之助は門を出づるよ好き首尾ありと思へど飯りの頃よ見咎られてい反て不都合を來たすべし其れよりい寧そ酩酊を幸ひ欺まて門を出づるよ如ずと傍へ立寄り搖起せバ門番は眼をこすりあがら彌之助の顔を打眺め是は〜好男子の彌之助か今時分に何の用だと云さへ口の巡らぬ様子に彌之介い低聲よて他の事ではありませぬが何を包しませよ私の母は當御普請の職夫仗參りませぬ其前から床よ就あたる大病よて一個の妹よ看病を托まて置きいまたもあの四五日跡から毎夜

の様ゑ悪ゐ夢見は心がゝりと思ふ矢先へ宵のほど便所の邊りゑ立つて居たは正まく母の你ゆゑ設や凶事ではあるまいかと何うも心に懸りますゆゑ一寸往つて病氣をば見舞て參り度御座りますが堅い御門の出入をバ潜と明けてはなりませぬゆゑ熟睡て御座るのを惡しますのゝ不遠慮と思ひながらも妨げました遲くも二時を經ゝ歸りますから一寸御遣りあすつて下さゐませ其代りゑゝ明日は緊度御謝儀は致しますると眞個しやかゑ頼む詳を正常正直律義なる彌之介なれば門番も偽りおりとゝ毫も思はず誰さも親は大切な若然ういゑ事あら今夜だけは私は大目ゑ見て置から努ずともに夜の明けぬうち戻らつしやれと仔細なく許して呉しは天の與と欣び勇で出て行きけり

其四

不題彌之助ゑ懇慕せさと云れ登代の父河窪孝太夫と云るは世々秩祿百五十石を賜り御勘定吟味役頭取を勤めたり當代の孝太夫い齢已ゑ知命ゑ近く先年同藩池田金八郎の娘を妻ゑ迎へ其間に出生したる女子は乃ちれ登代あり然るに妻は產後の腦み終に治療れ効もなく空しくなつたる其後と男の手ゑて女子の成育い覺束あしと親族の者等が勸めにより郡奉行笹間贊五郎が妹道乃と云へるを後妻ゑ娶りしに道乃は繼さき顔をもせで お登代を實子の如く寵愛しお登代もまた實母ゑ仕るが如く其中垣も隔なく最と睦まじく

暮しかたり孝太夫は性得潔白清廉の士なれバ巧言令色 辭きを以て本分とし近頃執政岩崎肇が君寵を誘りて上を蔑し下を虐げ我威を募るの風聲を聞と云へども渠ハ名よれふ古老の職なれバ輕卒なる諫言もなし難しと私ゑ心を痛めつゝ人なき節は時々に妻子の者ゑも語聞せ國の安危を憂ふる折から這回別殿を新築せんと乃結搆ゑて多くの人夫を傭入れ晝夜を分ず工事を急ぐは當主富丸君が御遊覽場と稱すれども其實已が別邸ともなさんの計畫ある故にや大工泥工ゑ至るまで殘らず自分れ手ゑて支配ゑ毫しも御勘定方へ干預させぬと甚ど不審に思ひはしたれど素より當主を害せんとまで逆謀ある事ハ夢ゑもしらねバ何卒して深い事實を探索んそのをと心を勞する折ゑ幸ひ娘お登代が何時のほどにか植木職彌之助へ懇慕なしし其文使ひを下女のれ作ゑ托する處を立聞きしゆゑ工事の樣子を聞き出だすゑは之れぞ屏竟の事なりけると一日竊ゑお作を喚び彌之助お登代の事を糺問した後恁々せよと吩附志にお作ハれ登代へ彌之助を媒妁せんとまたりし事の孝太夫乃耳ゑ入りしを駭くものからまた今更に詮方なく只管不埒を賠託入る乃を然れども恁々仕遂げたなゑバ罪を赦してやるべしとの辭もあれば承諾なし聽てれ登代より彌之助へ送る文を認めさせ日ハ暮るゝを待ち

て屋敷を出で普請場へと赴く途中往來途絶志練兵所の邊り近くまで來たりし折から向ふの方より四五人の仲間が朝れも酩酊志たり志と見え蹌踉ながらの出會頭お作を見るより嗤き合ひ傍へ立寄り袂を捉へ。夜眼では緊と分らあいが湛浮膏のあり想な當世面の中年增斯んあ淋しい往還を一人で何處へ出懸けるのだと一人が云へバ他の者もお作を中ゑ取卷て。徐醉機嫌ゑ何も彼も浮氣〳〵とまて堪らないが厭も情も中々剛さうな姐五人や六人引受ゑて も格別障ゑあるめへから己等の木刀を後生だ一本うけて呉んあと賠託るを肯ず四五人が手取足取り押へつけ既ゑ手込めゑせんとする最とも危き其折しも小屋を拔け出で河窪の邸へ行かんと來蒐りたる彼彌之助が測らずも通り會して夫れと見るより卒然に傍ある仲間が背後ゑ狹たる木刀扱き取りお作が上ゑ乘かゝらんと立躁ぎ居る一個れ男を擲りつくれば不意ゑ駭き惡棍輩ハ手向ひをせで西と東へ遁げ散つたり

其五

彌之助は仲間を追ッ散して傍に寄り未だ夜が更けたと云ふでいないが平常からまて寂寞路筋婦人の一人歩行を見込み强淫まうとは惡い奴等何處まて行きあさる乃か知らあいが此先

とても氣を注けて努す油斷をさつしやるなと云ふ聲所くより下女お作は然う云ふ郎公は彌之助さんかと問いれて此方もハッと駭きオ、其聲いお作どの無樣聲よて大膽な和女は何處へ行く氣だと云へバお作は低聲よなり何處へと云つて今貼分勝んな淋しい所を行くれも度々郎公よ話をしたれ孃さまの一件よて先おろかから七八度普請小家まで往つてハ見たれと親兄弟でも對面は許されぬとの屋敷い中ゆゑ據ところなく飯りハしたれどれ孃樣はまれが爲めお食もすゝまず床よ就きぶら〳〵病よ旦那樣やまた奥樣も深い樣子を御存じない乃て御心配妾も氣が氣でならないゆゑ如何なりとまて郎公に逢ひ一寸なりともお孃樣の傍まで來てさへ貰うたうへ氣慰め攻句を聞かせたゝら其首い未達女の事なれバ安堵をして病氣も癒り旦那樣や奥樣の御心配もあるまひと思つたので郎公を連れて參りまするとお孃樣へお話申てお庭口から密と御行で出かけて來たが測らず今の災難よ妾は御何なる事やらと氣も魂も消入る心地恰好郎公が通り懸つて救けて下さつたも主人を思ふ妾が忠義を神佛が守護て下さる事であらうが妾で逢ふたい丁度幸ひ直ぐよ是から荒れ邸へ一緒に往つて下さいと進へバ彌之助打點頭「其れい私まも望處トサ云ふ躊躇て先ころから卑〳〵い私へお孃さまから艶しい

文を下さるゝのハ嬉しいやうだが了簡違ひ素より武家よは堅い作法のあるとい常から聞いてもゐるゑ殊には一粒種のお孃樣が卑しい出入の職人と其樣な浮名が立つた時よは第一親公の御名の疵また私が身も旦那樣の御立腹をうけ芝居でやる御手討あどを喫つた時よは一人の母や妹の歎きと氣が注いて見りや怖くて堪らず今日も小屋よて仲間の者が雖云とおくお孃さまの噂で私を愚弄のハ諺ざよゐる人の口よ戸の建てらをぬ無實の浮名就中今度は大切なる職業を擔負稼ぎ中よ斯んな事が設御家老樣の耳よ入つては私バかりか河逕樣の御身の大事其れゆゑ今夜門番へ親の病氣と偽つて稍く小家を拔け出したはお邸へ行きお孃さまへ篤と御意見申さうと決心をして出かけて來たが和女も何卒此周旋は向後斷念止て下さいお孃さまが大切あら其親公の旦那樣やまた奥樣は特更大切和女の忠義と思ふのは筋違違ひな忠義だから今夜は私と俱々よお孃さまへ懇篤ゐ御意見申すが眞個の忠義今の樣に惡棍の手込めよ遭いうとまられたい遭あらぬ周旋をする是れも主人の罰だらうから能く分別をするがいゝと思ひがけなき彌之助の辭にお作も理の當然成ほど郎公のいふ通り恐い事とは知りおからッィ浮架〳〵と今日までは此お使を爲て居たれを向後ハ俱々よ御意見申すが却つて

忠義「其れでは得心ゐて下さるか斯いふうちも心が急くから直ぐよお前が案内よて「些度も早うと下女お作は前よ立つゝ元來し路へ脚を疾めて急ぎ行

其六

れ作とゝもに彌之助い蟾て河窪れ邸に來たり庭口の切扉より内に入れば座敷を離れし一室の障子に灯影ゆ撮るは娘お登代が人さつ居室よと れ作が辞よ彌之助は了得よ足慄れ進みかぬるをお作は手を採り甲夜は旦那は御番の御不在奥様はまた御不快よて毎の御居室よお臥ゆゑお嬢様の御居室とは離てゐるから大丈夫特には怪い譯でもなく供々御意見をとる事あるべ非除後日よ知たりとをお歡びこそなされ御立腹なさる筈ない切角技まて來ゐなが ら爾とてはまた度胸のないと勵されて彌之助も成ほど然うと微行よ障子の傍まで打連行くよお作はやをら障子よ手をかけお嬢様〳〵彼人がお臨ですから一寸とお逃を避べしませと披き障子れ其内よはお登代よあらて父孝太夫が最嚴ゑく座ゐたり辭の意外よお作よりも彌之助い仰天ゑて通るにも通られず顔色變り茫然と差俯べ孝太夫は刀片手よ膝立て直し「恁る事もあらんかと御番と唱へ家を出で其方ともよ油斷をさせ置き前刻歸宅なしたるうへ娘

を糺ゑ子細い听きぬ只憎きは彌之助なり汝先代の彌七以來吾邸へ出入ゑ親子ともよ白般仁慈を垂け置し其恩義をべ打忘れ主人よ齊一吾娘と密通あすとい言語道斷今夜忍んて參りゑあそ天罰なをと諦めて速かに首を渡すべしまた周旋の下女お作も俱よ免れぬ刀の情ゑ家の作法を忍ゑゝよい元來覺悟のうへなるべし不屈者メと以ての外なる主個の憤怒に彌之助は膝をすゝきせ聲ふるいせ「其れや旦那様侮無理て御座りますお嬢様と不義を致す位なら今夜慮しい門を脱けて態々御意見よは參りませぬ其仔細は私ゑより此お作どれが能く御存じ植木職人の卑しい身でも我等親子が旦那様に蒙し御恩い忘れませぬお心得違ゑお嬢様へ篤と御意見申さうと思ひ過ごして夜中よ來たゆゑ御疑惑を招いたも無理ならぬと不義密通をした抔とは此身に覺え乃ない濡衣お嬢さまもまた只の一度出會ゑ中でもない私と不義をした抔と仰ゑやるのは衍來度々下さつたお文の返翰を爲ゑいのを怨みよ思つての虚言かコレお作どの私が彼是いふまでもなゑ詳細事を知つてゐる和女の口から旦那様へ此分疏として下さいと道へべお作も手を突いて只今彌之助が申ゑまする通り實い先頃よりお嬢様か彌之助へれ文を賜りし事はあをと手よだよ觸ず差戻し今晩もまた妾がお文遣ひれ途中よてと

是れより前ゑ記したる綜の体驚を述べ了り恁る次第ゆゑ彌之助に於てい毫ほども不義の行爲は御座りませぬバ何卒今夜の儀は只管ゑ御容赦なされて下さりませとあそる〳〵に述たりけり

其七

登時河窪孝太夫はお作の勤解る仔細を聞くより打點頭て容体を正し「幼年の頃より吾邸に出入りし父彌七ゑ似て篤實なる性根の者とは存ぜまかど等思の外と云ふ諺肖特ゑは若き身の上ゆゑと乃吾想像より不義者と思ひ詰まは過りなり實は娘も其如く道ゑ背きて艶書い送をど一度を返事をした事なき堅固の性に彌まして父母ゑ心を勞さする病氣とまではなりたるありと賠詫る辭は虛言ならねど尙も實否を探り見ん爲め汝の來たるを待ちわしなり今お作より遂一ゑ聽いて疑念い全く散れ堅固の性根を見拔く上い今更めて孝太夫が養子とおし迫ては娘と配偶べー假ゑ父子の盞せんれ作准備と吩咐け遣り其場を斥け此へ〳〵と以前ゑ變りし孝太夫の辭ゑ彌之助いよ〳〵惑れ冥加ゑ餘る仰せなれども謹承知の通り私まゑは母と妹か御座りますれバ一應相談を致した後に其御返事をと道ふをも峻たず否々其儀あらバ

心配致すお母い勿論妹にも承諾する樣小可より說諭キベ主安神せよと云ふ折からゑ作が運ぶ銚子十器熨斗昆布兩人が中ゑ列べつゝ其身い次へ立つて行く跡に彌之助もぢ〳〵と如何して宜いか吾身で吾身の心一ッを定めかね只茫然たる景狀を孝太夫は打眺遣りて「本彌之助杯盞せんと十器把つて自分ゑ飲み干し三寶ゑ載せ差出だされ今い辭もなり難けれバ後日ゑ如何とか拒絕の術もあらんと震慄ながらも稍く之れを手ゑ受けて假の儀式を濟ましゝは宛から夢乃心地せり軈て幸太夫は銚子十器を取片づけて聲を低め斯く父子の葬を濟ましたうへは渾ての事ゑ遠慮は入らず何事にまを包み藏さず互ひゑ語合ふあそよけれ其れゑ就き旦差當り尋問ひ度は淫別殿れ工事あり聞く處よれバ人夫の者い假令何なる事故ありても場外へ出づるを禁したるよまを开は亦何ある仔細よりてか其方の殿頭と聞きし彼鹿田屋忠五郎い老職岩崎生が出入の者とか定めて事實は存じてをるべし他言は致さぬ此孝太夫ゑ包まず語聞かせよかしと問いれてギックリ彌之助い再い父子の盞を强て侑めし所存の底は工事の次第を聞き出ださんとの深き巧削でありたる事か爾れバとて親兄弟へも他言せまじと誓ま工事ゑ恁々なりと告らをもせず告ずバ飯れぬ此場の仕誼進退維ゑ谷りまかと正

直一徹は彌之助は須臾途方に暮るしが心を決せし事やありけむ稍くよして顏を仰げ「親妻子よも語ま玄と神文書た工事の模樣道へバ忽ち血を吐いて奈落地獄へ墮るか知らぬど蓋をした舅樣へ婿かゆ覽よ入れる品あり之を閲玉へと差出すは新築中なる別殿の繪圖へ微細よ符牒を以て彼ゐ入ッ橘の砕碎器械を示ゑ丶品よてありけれバ孝太夫は餘りは事よ只吐息繼ぐバのりなり

其八

岩崎肇が逆謀を始めて識つたる幸太夫ハ駭く色目を故と藏て此企圖のある事は先頃竊ふ聞出せ丶

ものから容易ならざる一大事と今日まで猶豫致ゑたるが其方の誠忠よより此逆謀は確証を得たるは諄々も滿足なり其方もまた一旦は忠五郎等の爲めよ脅迫され此ゆ普請よ係りしとい云ハ今繪圖面を差出したる其功よめて這回ハ罪は吾等が佶度執成得させん尙此後よも心注きし事あらバ密々申し聞かせよかしと道ふ折からに床の室の時辰と丑刻を報玄ゑよぞ彌之助は小家ハの飯り心に懸れバ暇を告げ躰て河羅の邸を出て去い之れ乎互よ一生の別とゐそは知れたれ抑も甲夜の事は渾て幸太夫が計畫にて昔時小家の内情を聞き出ださん爲めなりしが其機謀曠しからて奸臣岩崎が逆意の底を搜り出だしたれど元來他聞を憚る儀なれバ彌之助に尋問の間は家族の者を別室よ斥け置ゑゆゑ工事の密謀を彌之助より聞識りしは主個幸太夫一人なれバ彌之助を返した跡よて一個熟々思惟

みるに斯る逆意を企つるうへからい豈夫肇一人の計畫あらず多少の同類ありての事と覺ゆれば親族縁者たりとも此一條い洩らされず如かず江戸邸よ赴きて富丸君の御後見たる鳩翁公(分地某の領主)へ密告し同邸詰なる老職松倉丹　殿とも協議を悪人輩の根を斷つあそよけれ今彌之助が物語よてい工事の落成は遠くを未だ三が月を經ぬべーとあれば只速かよ江戸表へ注進なすあそ上策ならめと忠義に凝つたる幸太夫は深き思慮なき妻子の者とまた妻の兄なる笹間贊五郎へ至急よ思れ事ありて京坂筋へ起くとばかりの遺書を認め旅裝もそあ〳〵よ妻子の來らぬ其うちと切扉口より立退きしを家族は更に知らざりけり恁て河窪は路を急ぎて城下盡頭なる鯉の松れ傍よ來たりを頃い稍寅刻よも近かりしが今四五丁も走みあば蕊を屋ふよ便なるべしとあやあき夜をば冒して行く鯉の松の碑の側より各々頭巾よ面を包みし三個の監尤兒顯はを出て帯せし刀を拔くより速く敬をも云いて幸太夫へ切つてかゝりし狼藉よい不憲をうたれて駭くものから碑を小楯よ取り左右に氣配同ぢく刀を拔きあはせつゝ寄らば切らんと体を構ぬ(因曰此鯉の松と云るは往時天正年間當城の外壕へ其長丈よ近き大鯉の屍体泛しを里人獲得て此地よ埋めしが其側らよ樹し松れ僅一年よして

巨大の幹となりをゆを某好事家が此事を聞き當時一基の碑を建て鯉の松と號しなりとか」

其九

登時河窪幸太夫い憤れる聲をふり立て「何者あれば理不尽よ行途を妨げ狼藉あすを必定盜賊追剝なるべし命知らずの奴們かあと云いせも果ず監尤兒くから〳〵と打笑ひ「ヤア盜賊呼はり不禮あり吾々は汝と同藩而も御吟味方に在る村瀬傳藏「前田左右七「また一人は御普請方高木判藏を知ざるかと道ふよ河窪いよ〳〵驚き「原來い奸盜岩崎の徒黨の者よてあり志よな此に待受け居しがらよは吾を切害あさんず所存か「云ふよや追ぶ吾々が謀計を知つたる汝なをば大望成就の血祭に旦其の首を申し受くると云ふうちよ早伴藏い問答無益と切つて蒐れば必得たりと幸太夫は丁と受とめ火花を散し暫時ハほとい三個を相手に屈せず撓まず戰ひ居たり元來幸太夫は一刀流の奥義を極め一藩中に聞こゆる達人斯る鼠輩の三個四個はものゝ數とも思はぬば太刀すゑ亂れず前よ顯れ後よ隱るゝ出沒自在三人ともよ薄傷を負ひ今い危ふくなつたる折しを何處よりかい轟と音して飛び來る彈丸幸太夫が胸板射貫き剩れる丸い鯉の松の幹よそ趾まりぬる憾べし河窪い宛も忠憤義膽の士なれど奸賊輩が毒

刀は下に斃さるまた惜しき事ありかし折から樹木の蔭よりして右手より鉄砲左手より合鎗携へ徐々と立出る岩崎肇を見るより三個は磨齊一「思ひがけなや御家老よは再び後より此所へ「如何にも甲夜各位を招き遂一申上たる如く仲間共が途中より放て酒興よ乗じ婦人を捉へ戯れし折拾ひし文は正しく河筌の娘より忠五郎の部屋よ在る植木職人彌之助へ送る艶書なり察する處密通あし往來すると推せ志ゆゑ他の職人等と異りて彼一大事の建築を明して委志忠五郎乃下方なれば捨置れず早速小屋を探索さまゝに果して彌之助の行方知ず小家門番の申し立てを聞き直に母の病氣と偽りて脱け出だしたるもれあらんと具よ動靜を索りまものから綜あら立ては世俗よ云ふ毛を吹き疵をもとむる愛ひと竊よ各々ト謀志合せ河筌方を窺はしゝに案の如く彌之助ありて幸太夫と密談れうへ屋敷を出てし其跡より旅裝を調へ幸太夫が出立志かるは彼の彌之助が普請の密事を告たるゆゑ江戸御在番の鳩翁公へ注進なさん爲なるべゝと思ハば猶豫はなり難く各位へい幸太夫暗殺の儀を御依頼申し吾はまた彌之助を直よ召捕り忠五郎へ詮議の事を委ね置けど但心安からぬは暗殺の一條にして河筌みそ當藩にて人よ知られし劍客なれば設仕損なば臍を噛むとも追ばぬ大事と存ずるゆゑ後より參り樹蔭よありて臆ながらも月の光りよ晒ひを見定め射つて發ちし只一發よて了得の武士も脆くも往生是れよて心よ撫ろ実なし各位勞をかけ申したと遂ひつゝ手よ持つ合鎗よて幸太夫が死骸を見瞰り撃と心地よげに微笑志ゐたり

其十

有恐べしどい努知らぬ河筌方よては妻と娘が彌之助を密間なすうちい決して座敷へ來る事無用と堅く禁められし事なれば幸太夫が裏口より抜け出て志事を更よ知らず左右するうち東天紅と曉告る雞の音よ家内の者は不審み吃らるゝかは知らぬども密と御勤靜を窺ひ見よと母の辭よ娘お登代は徐々座字へ來て覗くよ内よは二人の姿だに見えねば遂い心得ずと隔の襖を押披て四邊を見るよ父が机れ上にある該遺書を見認めしゆゑ打驚く事大方ならず聲高よ母を喚び様子を告げ母子俱々諦下しく早速兄貧五郎を迎へ何にもせよ深き仔細のある事なるべ志明けなば病氣の趣きに屆けを出すべ志と雀間は頓て歸宅したる折もあそれれ以前同家乃若黨なりし星野幸藏と云へる者忠を切つて斃け來り鯉の松乃邊よ殷て何者い爲所にか幸太夫を切害し有志を城内より捕亡方か人夫を連來り死骸を昇ぎ飯り志旨を告げた

るゝ子母子は夢ゝ夢見し心地餘りの事ゝ涙も出でず茫然とまて居たりしが幸藏は涙を拭ひ吾儕い一應御城内へ參り越志篤と實否を問き合しゝうへ復度御注進をゆゝぐべしと引返ま行折俄頃ゝ外面ゝ人足繁く上使とまて用人國富角太郎案内もなく打通ぎゝ思ひがけなき上の使ゝ泣きゝらしたる眼を拭ひながら孝太夫の未亡人道乃い恭々しく是を迎へて上座ゝ就かせ作法案さず禮をあせゝ國富ハ已が名を田臂張て嚴しく「慈傷の樣子い幸太夫の定て知りたるあらんが河瀬幸太夫事御文庫金五百兩を盜み逐電の途中鯉の松の邊ゝ於て何者の爲ゝか切害されしい爾ゝ出てゝ爾ゝ仮るゝれ天罪と謂まくれみ就ては家族の者ゝも取調入筋あれゝ追て御沙汰あるまで門戸を閉ぢ謹慎罷り居るべしとの上意なりと寂非ゝ水の盜賊沙汰乾かぬ袖ゝまた重なる涙の種の濡れ衣ゝ道乃は須臾返答だゝなくより外れ事なきは過珍切て哀れあり

其十一

話頭轉頭植木屋彌之助は義理ゝ蔓まれ只得も普請の密事を河瀬へ明して給國まで渡しゝい死を決たる心の覺悟爾れ共一旦母と妹に暇乞をと小屋へい仮らず已が住家へ赴かんとゆる途中に於て岩崎の配下の武士に捕られ縄ゝかけられ小屋横梁なる鹿田屋忠五郎へ引渡まとあり志が有態べしとい思ひがけぬゝ有繋に心安からで如何なる事ゝなるやらんと胸騒けど詮術あけれゝ引るゝ儘ゝ工事小屋ある材木置場の内へ繋がれ居たり嬲て全く夜も明けく就業を報ずる析の音ゝ職夫們は持場持場へ出向て各組の小屋の内にも人影あけれゝ忠五郎は九郎藏と云ふ乾兒を連れ此所へ入り來る姿を見るより彌之助は差俯向辭もなくて居たりしが忠五郎い九郎藏に戸締させて傍に寄り「ヤイ彌之助汝い今度の御普請中ゝ他出を禁められた事ま た御普請ゝ模樣をゝ他言はせぬと誓文へ血判したのを忘れたか汝は親父が死んで以來職業が閑ゝて母親や妹の手前も氣兼がちだと歎いて居たのを聞いたゆえ過分ゝ工手間で傭ひあげ正直ものだと思いゝことそ御家老から御頼みありし大事の場所を委してある人夫の内へ加て置き者尾能御普請成就のうへゝて母子樂々世を送れるやう御家老からは御褒美を下さると云ふ御内意は詳細話て置たるに重る御恩を打忘れ規則を破つて門を放出て那の河瀬のお嬢樣と不義をいたらき剩さい大事ゝ普請を幸太夫へ明告たであろうがお人讐るゝいと思つても御家老にい疾御存玄吟味をしろと吾が方へ直ぐ引渡まゝなつたのだゞ彌之

助昨夜小屋をバ脱け出した後河羅の郎へ云つて何を饒舌た明白ス云つてまへ強情張と汝計りか親や妹の爲めにもなるまい何うせ犯た罪ある身体苦痛せぬうち速く云へ　九「コレ彌之助今乾盆が云つた通り御家老の方ヨやァ探索が行屆いてゐる此詮議知らぬと云つても濟ぬエから其れよりやァ眞直ス斯いふ譯で斯ですと云つてまめへバ乾盆から御家老樣へ御賠詫をまくお前の罪も輕くあり母親や妹も安心素直ス仔細を話すがいゝぜと猫撫聲ス て問ひかけたり

其十二

死ぬる覺悟も今更ス胸轟きヨ彌之助は大事を明した其人は奸徒の爲ス鯉の松の露と消ぬ主事を知らねバ設卒爾ス陳述てば假ス も親子ハ 蓋を酌替したる幸太郎が忽ら髮目に遭ふ事あらん所詮死ると決し身あれバ責殺さるゝを何條厭ふべきと稍ヤ顏をふりあげて御思になつた乾盆へ濟まない事とは知りながら頗ス母が戀しくなり規則を破つて出かけし途中河羅穆の召婢れさゞどのが惡漢等ス手込ス さるゝ難義の場見かねて飛込み惡漢等を追散したうへ樣子を聽けバれ嬢さまから云々だと思ひがけない話ゆゑ堅く拒絶御意見を申して其

ろと云ひながら同家の御門までは送つて行きましたれど御邸の内へとく通入ぬ私が何んで御普請の事などを申しませう御法を破つた罪は覺悟縛られて此通り乾盆ス まで知れましたからハ何卒御存分ス あされく下さりませ決して御怨ごとい存じませぬと道へバ九郎藏眼ス角立て「コレサ彌之助其樣な白化くれた事を云ハず斯々した譯がわつてッヒ怨々ス申ましたと云つてしまめへば濟む事だ我やァ乾盆はしめ此丸郎藏を馬鹿に爲て瞞着氣か「如何して我が乾盆や兄貴を馬鹿ス 爲ませうぞ「馬鹿ス 爲なけりや痛苦せず實は斯だと吐かえて爲まへ夫かぢやと云つて其事を「云ずバ斯して吐かせて見せると傍ス あり合ふ天秤棒ス で骨も碎けと打すゆれバ苦と叫ひて苦む体を忠五郎は暫度瞰遣り「ヤイ彌之助其痛苦をさせぬ樣と優しく云へバ宜事ス して佛性なる吾等を涙にかけて狀かふとは血に似合ぬ太い野郎だ吐かさにや飽まで吐かす樣ス 器械ス かけて云はせて見せると新ぬりあげて彌之助が額の邊を丁ど打バ忽ち四五寸斜ス 切れ血は迸しつて宛然に顏も衣類も時あらぬ韓 血 を顯せり恁る責苦も覺悟の彌之助打れ擲れ辱らるれど知らぬ知らぬと道ふ聲も辛くにまて吐くのみなれバ元來短慮の忠五郎九郎藏ス 眼配して到底生ては置ぬ奴直ぐス 吐かさぬ腹癪ス

那處の渠へ吊おろし弄殺しにしてくれんと惨忍猛悪極りなき辭の尾よ付く腹の九郎藏オヽ合點と立寄て苦痛よ息も絶々なる彌之助の次類を剝取り裸體とし慈悲用捨もわら縄將て弁々縛り小屋れ梁へグッと吊上々吊下せバ忠五郎は佩たる一刀すらりと引抜き右手に携へ徐々傍へ歩みより是れでも云いぬかサア扳かせと所厭いず滅多切り苦しき中よも彌之助い雨の眼を赫と開き刃体おくも殿様を殺さんとする大悪人此已等ゆえに慈悲を知らぬは素より覺悟を爲て居たれと餘りと云バ非道な責め苦人よ怨のある者かない者かおぼいてゐろと宛も恐ろしく云ふが此世の餘波よて終には弄り殺されしは無惨と

いふも恐あり

其十三

濱邊の城下を四五丁離れて神谷村と云へる所あり當村盡頭よ軒傾き壁破れたる荒屋は彼の植木師彌之助が住居あるが母のわらくは去年の暮より重きといふよはわられねどと病床に臥

て起もあがらず睦月の末たり彌之助は御用普請の爲め御別殿の建築小家に雇食志吾家へとては飯ぬば妹お辰が病人の看護よ如才なきものから元來石で手詰し如き貧苦暮を乃れうへよ醫師への謝禮藥の價何くれとあき入費勝にて彌之助が工料の内なりとて鹿田屋より廻し來たる賃錢耳よとては兩個此口を糊するよも足らねばお辰ハ病人を介抱の片手間よ洗濯物や縫針に聊かの賃を得活計の足まとなし居たり今日も終日母親の看護を勤め夜仕事も了て母が寐所の蒲團の端よ脚を伸し暫し勞を憩んとすれど頻よ胸騒ぎまて眠れず母の病兄ハ事あど思次けし枕下きる行燈の灯は窓洩る風の吹入る度消なんとしてまた明を射す破れ屏風の陰よ誰やら居る氣息よ駭きあがら枕を擡げ熟々見れば思ひきや兄彌之助が何時乃程よか立飯り來て座す体あれバヤヤ兄さんかと逆はんとすれど宛然口を閉ぢられし如く物いふ事もならざれば起まちんとするに身動きあらず切ては母よ知さんと焦れど五體いすくみて自由を得ず此時兄は潸然たる涙の顔を稍うあけ父が死あれた其後ハ私よ腕があいたためよ母親いじめ妹よまで苦勞を掛々た不孝者今度の御普請が成就したあら兩個に安心させませうと思ふた事も奈麻與美の甲斐あき別れとありましたが何後い吾よ代つて和女は母へ孝養頼む斯

る憂目も殿樣の御身よ係る大事と知りつゝ母公を安心させやうと思ひしより心煩ひの天罰が忽ち酬ゆる地獄の責其苦も厭ひはなけれども母公の事心よ懸れバ和女に諄々頼むヤやと云ひつゝ再も泣沈む兄の動靜を見聞よつけた辰よ彌よ心ならねば思きつて聲をわげ其ど何ゆえ如何云ふ譯てと身を焦りつゝ起上り兄ハ傍へ行かんとすれバ是れ元南柯の一夢よーく其身い依然母の傍に臥して身體びつしよりと汗に咽海の單衣二重よまはせし細帶も解るべかりよ胸轟きぬ

其十四

眼は覺めながら夢としも思えぬまてよわり〳〵と兄の姿 看るのみか聞よし事さへ忘れもやらねばお辰は心安からず夜明けなバ鹿田屋許赴きて樣子を聞かんと稍くに復寢枕よ就きば爲たれど寐られぬ耳へ早晩よ聞こゆる鷄の聲よ驚きも上りて朝餉の准備母が眼覺めよなつたあら夢の顚末を詳細告げ城下へ行んと庵の下へ火を焚つけて居る處へ彌之助と同じ植木職の卯太郎と云るが息急來りお辰どの宿よ居らるかヤア大變だ〳〵と聲かけながら内よ入バ爾あきだよ左思右思案玄續けを折あらゆえハッと思ひて立ち出るお辰の姿を看るより

も卯太郎は眼を渾ひながら「コレ辰坊必ず喫驚はせまいだが兄彌之助は昨夜普請小屋よ
殺て切られて死んだサ、、、、其仰天は道理だが且心を鎮めて聞くがよい爲て御前も知る
通り此度御別殿の御普請よ私も職業に行苦てあつたが生憎持病の癇癪が起り所詮働きを出
來ない事ゆゑ拒把云つて宅よゐ居たれど此節は本癖したので人夫の御用を頼み度と昨夜鹿
田屋乾盆の宅へ往つたよ忠五郎樣ゐ浮不在ゆゑ那の九郎藏へ委細を頼み土產の印と菓子代
よ袂よ入れたる露金の目方ゐ僅少な愛想てあつたが重い効能よ巡つたものか平常は腹の九
郎藏から竊よ聞いた彌之助の事虛か實か知らないが何時の程にか河窪のお嬢樣と通じ合御
普請中は親子でさへ對面出來ず門外へゐ堅く出られぬ規則を破り其れ嬢樣に逢ひよ往つた
事か御家老樣の御耳よ入つたとやらにて他の職人への懲戒よ重き罪科よ處る樣よと嚴しい
沙汰よ詮方なく今朝乾分と吾が手よて憫然だが殺したうへ死骸は小屋よ三日間曝して他
の職人へ嚴い規則を見せてあるが聞けば彌之介の母親ゐ長い病氣で居るとの事斯んな非業
に死んだと聞いたら病癇の障よなるてあらう然し到底ゐ知れる事ゆゑ徐があつたらお前か
ら報知てやつて諦めさせよまた其跡へは乾分へ說玄お前を加へる事にしやうと信切らしう

話したゆゑ肝潰れるまで黙いて顏を見るさへ恐ろしく暇乞さへ疎卒に宅へ歸つて直ぐに此
事知らせよ來樣と思つたあれ共何んだか夜道は薄氣味惡く其れゆゑ鶏のカアを聞と其まゝ
駈出し飛んで來たア、好人であつたのよ心からとは云ひながら非業な最期を爲たと涙
よ鼻をつまらせて飽迫あげたる卯太郎が話よおたつゐ心消沉絶入る計り泣倒るゝ屏風の陰
よも先刻より樣子を聞きしか母おらくと病苦を忘れワッと聲あげ正体更よおかりあれば遂起
愛てぞ哀れなり

其十五

話頭復讐單表 河窪幸太夫の妻道乃ゐ良人が非業の最期を聞き胸旦潰るゝ折もとそあれ上
使として國富角太郎が入來り良人幸太夫が御文庫金五百兩を奪ひ逐電したるに付家族の者
にも追て沙汰あるまでゐ謹慎を仰附らるゝ云々との嚴命なるお子母も娘も今更よ只伏沈
み居たりしが上意を傳へて角太郎が歸城なしたる其跡へ實否を聞んと城中へ赴きた星野幸
藏が立歸りて道る樣百般探索致しゝなれど何分事實と謂兼爾れとも素より潔白ある旦那樣
が平生の沙汰質御文庫金を盜抔とは全く讒者の所爲あるべし然すれば旦那を暗殺たるも

全く其奸徒の同類よて近時風聲ある如き御家を横領せんとする者の悪謀ならん此上い逆反の輩を探索まて旦那様が盗賊の汚名を雪ぎ玉ふか専一成べしと勇きに暮て正体なき遺乃お登代を勇り慰め再てあるべきにあらざれ外影引取りの儀を臣藩へ願出てしる格別の御憐愍を以て死骸と妻子へ引渡さるゝと雖も恐然葬送を営む儀は相成ずとの沙汰なりしゆゑ謹んで拝受を申し智五郎に死骸を引添ひ歸邸せしるそ一日看るより妻と子い嘆り果たる死骸よ縋り他助も取す勇き居たり賛五郎に両人を慰諭し其夜假ゝ香華院へ送り埋葬し翌日より い上の御沙汰を如何有んと待つ折から其八日目に至り案内を乞ふて入り来たるい家老岩崎 聖きれ ば妻子に影さ一室に請じ客座ブ方ならざりしに岩崎は席を更め偖ハ内密運回は幸太 夫殿ブ庸の次第慈尊お察し申すなり平生御手篤き の聞ゆある河窪生が意外の挙動ありたる ゝ如何よもブ審千万なれ ば察する處き太夫殿よ類趣ある者の所為ならんと小刑疾くも推せ しものから何分諸説紛々よて其家名を勝者させ家族へ遅延を仰付けらるゝが至当ならんと 申し出づる者の多き為め り可か議論更よ立たずイ日ば沙汰あるべし重々の不幸よく寛よ當 惑もあるならんが何事も時節と諦め旦く歎きを禁められよと巳が悪事を色にも出さず陽よ

飾る仁慈の辭大姦忠よ似たるの古語は斯る比をいふなるべ き

其十六

己が逆意を洩れ聞いたる河窪なれ ば活てい置か岩と同志とゝもよ斬殺なしゝ幸太夫の許よ 來て何故肇が其く懇切よ勇くかと索るよ未ブ岩鶴が先君左近將監の妹花子と婚儀整はざる 前笹間賛五郎の妹なる道乃よ深き眷恋し何卒して宿の妻よ迎へ取らんと既よ某人へ媒妁の 事まで も伊嘱置き折から亡君の命よより花子を降して其身の妻と定められ太く一藩の面目 を施しい爲たるとゝ右よ道乃か事い忘れやらでありーうち縁あつて河窪幸太夫の後妻い嫁 ーとの事を聞き宛然掌中の珠を奪はれ去心地したれど亦今更よ只得と念諦らめ其後は花子 との中睦まし く讐反の原なる幾之助と云ふ男子をさへ設けしほどなるが幸太夫を切害しと より未亡人道乃を慕ふの念復興起り盛ハ少し過ぎたれど色香の失せぬ晩稔手折つて眺よせ んものをと初イ日の結つを誘ち吊慰を御托信切らしくも入り來りしなるが爾る所存ありて の事とい猶乃は素より知るべき様ゝく況てや現在亡夫の敵なりとは努思はぬ今岩崎が仁 慈ある辭を聞き亡父が汚名を雪ぎ復讐の志願を遂せんにい此人よ寄るの外いあるべからず

と女心よ深くも依頼し亡夫が寃罪を訴へて何卒老職の汚仁恤を請く幸太夫が身よ降かゝる悪名を攘き河窪の家名相續あるやうに汚執成を願ひ奉ると涙とゝもよ接口説ば華ゝ點頭進乃ゑ慰め就れ明日出仕の上寛典の汚沙沙あるやう盡力すべしと當日は佛室よ回向あと志飽まで仁義の假聲よて歸邸せ志が其れより之日々同家へ赴き昨日の評

義は箇樣〳〵なり今日の汚沙汰は恁々なりしなど已が心の欲するまゝよ陳べ渾て吾一言によりて河窪の興廢に于る如く説示すに不了婦人の思慮淺く只管岩崎を信ゝも當今國政を左右するかとまで威權高き名よ負ふ執政の岩崎と思へば奇るべき肇と充分道乃よ望みを屬さまめて最早手に入るゝよ難き事はあらじと一日の黄昏酒氣を帶しを奇貨に同家に趣き坐敷へ通れば お登代い下女のお民を遣れ謹慎中なれば竊よ香華院へ參詣して家に在らず道乃一個が家の事を案じ顔ある折からゆえ慎こそよけれと岩崎は遠くかけたる懸の謎も解かねば家の大事よも係る如く袖を捉へて口説き立

てたる肇の擧動よ道乃は太く驚くものから今愁ひにふり散てい雌よ縋りて亡夫の汚名を雪ん者もなき事ゆゑ操を破つて操を立つる常盤い前の故事を倣ふにあらねど吾身一ッを案ずれば家名も恙がなう相續の沙汰あるに至らば繼子お登代の身も安穩爾すをば前妻への義理も欠けずと不義と知りつゝ家と子を思ふ意乃迷ひより竟よ肇が曳く袖とはらひもやらで轉寐よ怪しき夢を結びしい最と淺間しき事なりき恁る折から香華院より立歸りたる娘れ登代が坐敷の次まで來て聞けい母と肇が私語体ゆゑ折惡かりきと足を禁めて測す動靜を立聞くよりハッと計りに胸轟きし後の話說い次回よ記さん

其十七

春の夜の朧おがらよ照る月の影を棄よ蹌踉と二の丸外の濠よ沿ひ來蒐る兩個の醉客い兆れも兩刀帶したる年壯からぬ武士おるが頼みある中の酒宴かあと綱の諧り呂律は廻らず千鳥脚よて歩み來る折しも向の方よりして路を急いて駈來る娘が思はず磯と突當り心ば焦まゝ迂架〳〵と思いぬ彼無禮を致しました其平彼免下さりませと賠詫ど肯ず眼よ角立て如何よ夜路ど申しおがら大の男が兩個連よて歩行を心注かぬとは以て乃外なる慮外者と道へば一

個も辭の尾よ屬き必竟吾儕兩人を輕蔑致せし擧動なり其分よてい了簡ならぬ何處の者か夫を吐かせと云ひつゝ顏を瞥々瞰遣り雌かと思へば雄こそ河窪の息女お登代どのでは御座らぬかと道ふに一個も打眺め成る程是れい河窪の衣桐娘此の夜頃よ供をも連れず特よは遠だしい其の体よて何處へば臨なさるゝぞと問はれてれ登代はハッと思へど故と辭も慇懃よ雖殿かと存じますれば大貫様よ角田様ば游歩歸りてば慮りまするか今晩母が暴乃病氣生憎下女も居ませねば只今ば殿醫三住様をお迎ひまよ參る處失禮の段は幾重よもば宥恕なされて下さりませ心も焦けばば免をと云捨行かんとする袖を右左よ引緊と捉へば母公の病氣ならば醫者を招いて診察より老職岩崎肇殿の針を願ひが早療治また雄には吾儕が所持する針を一二本進らせるから俱よ來玉へと酒氣よ乘ぜて戲れかゝれを花登代い驚き振拂ひば申戲も時よこそよれ母の病氣よ心配中は様な淫猥を聞耳なし無禮お事をば仰ゑやるおと腹立しさよ聲さへ荒く行過んとするを復引禁め然う堅造よ云たこて現仆母は良人の忌日の七々日さへ經ぬうち情夫を引入れ淫樂するを見て見ぬ振の雄が心は植木師彌之助か殺されし後彼よ代つた好情夫と俱よ密會するゆゑてあらう爾すれば到底淫行娘の汚名は免れぬ雄ゆゑ

一個あるも二個あるも密男は替りはなき面へ至つて醜男なれども婦人は懸けては信切者一針うつも可愛と云はせて見せると兩個がしあだれかゝるを右は除け左りは避けて通んとすれ共軟弱女の悲さい大八男は押へられ嗟咄蕾の初花も此狂風は散らんとする最も危ふき其處へ滿蒐りし一個の力士が迫は其れと見るよりも韋駄天乃如く走り來りお登代が帶は手なかけたる角田軍次が頂を掴み曳と聲かけ投つくれば是れはと駭く大漢猛が刀の鐺りを緊と把り力を極めて捻倒せば投つけられし角田軍次が已と云ひつゝ起上り看れば力士が仁王立に寄らば投んと身を構へ志其勢ひに辟易して脱だる草履を拾ひもあへず雲を霞と遁去けり

其十八

登時力士は亂されし姿をつくらう於登代は向ひ更たと思ふには有らぬ其夜路を行は若い女中れ一個は大膽千萬れ怡好吾が通り掛り過ちのなかつたゝ卿の僥倖復度亂暴者の來ないうちは速く行のが宜からうと道へばお登代ゝ嬉しさは力士へ諄々禮を述べ立起らんとする折しも雲退く月は思いずも互は顔を見合して句ヨゝ卿ゝ河窪のれ嬢様か句其は其方はれ辰の

兄駒勇闘句然うまてマアお前様はゝ今頃何處へれ臨の積り句サア是には深い様子があつて實ゝ邸を脱出しまーた句其は飛んでもない次第其譯をば承まはり不肖おがらお協議にとなりませう併し何をいふも此首ゝ往來何處で緩々お話說をと打連れ立つて前に立ち嬬で郭外なる丁子屋と云へる酒樓は誘ひ最と奥まりたる一室へ請じ再く仔細はと尋られお登代は堰來る涙を拭ひ家の噪ぎはれ辰から定て聞いてお出であらうが父様の横死より引續いて家内の者へも嫌疑かゝりて閉門中如何なる天魔が魅入しか母様は御家老の岩崎肇と密曾の淺ましい塲を見認しゆゑ他事はまてお諫申ゝ其れが御意に逆ひ志やら居るは堪ぬ者打擲お辰が禁むをば俱々は其方ゝ娘と肚を合せ縊ゑき母と見くびつて根もなき事を自觸し竟は母を當夜から退出す積か爾りあくゝ自滅をさせる了簡であらうとお意辟みし無理難題強ては云へぬ義理の母樣只あつて家の爲めなれば案ては置きぬ不義乱行特は相人ゝ一藩の上に立べき御身分みて最と淺間しき擧動と思ひ次けて食事さへ咽へ通らぬ憂苦勞甲夜も染々お諫めしゝは然う小蒼蠅言れては生て居るより死ぬのが増と裏へ駈出し井戸の裡へ身を沈めんとなさゝゆゑ威しと知れども抱き留め最う此後は申しませぬと賠詫て稍う辟は爲た

れど所詮直らぬ御行跡人に指示笑いれんより冥途より浮座る父様の御傍へ行ひて分疏とたつよりも知らせず邸を脱出ち來る途より今の様より家中の者が捉て淫ふ事より及ぶもやつぱり母様と御家老様の噂を知つたゆゑてあらうと思へば一層死が急がれ石川の水屑となる妾の覺悟であるなれば死んだ跡より其方からたつへも能きよ傳てたも遺書さへもせぬ事ゆゑ淫奔事より身を投たかと思はるゝのも遺憾く諄々其方へ頼みまするとと跡丈さして泣沈めば駒勇は打駭き初て聞いた後室様乃御亂行特より平生の御氣質より似もせて卿を打擲折檻何うも合點がまいりませぬ吾等は素より何んよも知らねども家老様との不義密會は深い勦靜のわる事でせう親公と家の爲を思ひ死なうと思召したのも無理ではないが死ぬのは早いマア左右も吾等乃家までお隨なされませ母とも談合至したうへ如何とも御安心の方へつきませう夜の更ぬうち是から直ぐにと勦り慰め駒勇へ人目を厭へば駕を傭ひて是よお登代を乘遷らせ國府町なる吾家を投て急がす途中札の辻の原の蔭より顯れ出て去兩個の男は駕の前より立塞かりて大音より此駕やらぬと呼かゝたり

駕を遣ら玄と立塞りし兩個の漢を駒勇が何者ぞるかと看てあれば城下より名高き破落戸野晒熊次と其乾兒猩々德といふ者ゆゑ駒勇は不審に思ひ。何用あつて和郎衆は吾の行途を禁めさつしやとる道ば熊次へせゝら笑ひて。何用とは駒勇餘んまりしらを切過るお詳細譯へ丁子屋の裏から潜んで隨子越より悪曾種はあげて畳た繼子苛めて逃出した駕の娘の那のお登代詩の語の道はずより已より渡せと無法な辭より駒勇と駕を圍ふて身搦なし仔細も云へず理不盡より お孃樣をば渡せと云ふのは再は汝等は伊室樣からオ、知れたあッた今夜娘が云々だから行方を探して連て來よと未亡人より頼まれ出蒐けた路にて大貫角田乃兩旦那より行逢つて所きやア馬勇が其娘をば伴て云つたと樣子を知つて突留た儲けの花の丁子屋より母の悋妬の私語まで知つたうへよは許されぬ娘は此方へ貰つて行乃だと兩個齊一棒鼻を押戻さんと立寄より子駒勇は冷笑ひ。然う所ぢうへ尙の事汝等に渡して堪るものか夫れ共逃れて行氣なら已の體を連れて行けと云ひつゝ前に進んだる猩々德の胸の當りを右手よく突ば兵兵ながら四五間向へ尻餅搗て轉れたり是を見るより野晒熊次は邪广な汝からしまつてやらうと腰より帶たる强刀を拔く手も見せず切つて蒐れば駒勇も心得たりと拔合えて丁と受留め四五合計闘

ふたり此時月はまだ雲に蔽れて闇とありけらし舁夫等も心を冷せばお登代い怖さ恐ろしさ今更其場へ出られもせず聲を立てんも如何かと駒勇の身を案じ居たり兩個は互ゑ遠し見れど駕ゑ添へたる提灯さへ消て四下も分ざるゑぞ只手下をば氣遣ふばかり折から晴るゝ雲に再度刀を打合せしか駒勇い舁夫に向ひ此首搆はねば其駕は少しも疾く吾が宅へと道ふゑ得行かんとするを投つけられたる猩々徳が稍く起て殺棒の帶際把つて引戻し頻ゑ爭そひ居たりけり

其二十

不題植木師彌之助の母妹い卯太郎の報知ゑより測らず聞いたる彌之助が横死ゑ兩個ども更ゑ正氣ハなき入るばかりを卯太郎が勸り慰めて涙は亡者の爲めでもあいからマア氣を靜めて佛前へ香華ゑても手向けるがよいと屬す辭に母娘い稍く顏を仰げは爲たれど木から落たる猿同然當惑限なき体を卯太郎も道理と思へば百般介抱なしたるが翌日ゑ至りて母たらくい俄頃ゑ重症ゑ劇變して沒去ぢめゑお辰はいよいよ歎きを增し母の死骸ゑ取縋り降り棄てられぢ身一ッも俱ゑ死なんと嘶ち泣くを卯太郎が精悍しく立ち廻り村の甲乙を喚聚へ老母の葬送を營みしが斯く交々ゑ憂事の起るゑつけて向後も如何なる難儀に遭はんかと安き思ひもあき折から某日卯太郎は遽だしく來りて道やう今朝鹿田屋のも郎藏どのが來て内々ながらと話說をするゑは御家老岩崎樣ゑは未だ立腹が竭ます彌之助母妹ともゑ引致來よとの吩咐があつたが聞けば母親も死んだとやら親と兄とゑ死別れて居る妹を連れて歸るのも無慈悲ゑ譯ゆゑ乾盆が稍く勸解ては置たれど可憐や妹が引致ゑあらねば宜がと聞いては私も氣が氣でなく其首で熟々思考ゑ所詮和女が當地ゑ居ては目を注けられてみちめを見やう其れよりは大坂ゑ居る老母ゑ弟嘉作の許へ遁げて行のが身の爲めであらう然し女公の一人旅特にい若い身乃上ゆゑ路次の事など案玄られぢ恰好吾もまた大坂へ出懸る用事のあるなれば女房ゑも話し彼地まで吾が送つてやるほとゑ明日の夜當地を出けなーゑ街道い御家老が領分地内が多いから伯州路を往と去て成たけ人目ゑかゝぬやう吾が宅から駕ゑ乘り御領地堺まて行が宜と殘る方なき信切にお辰ハ嬉しく卯太郎が辭ゑ屬ひ三個四個の家財を沽て母と兄ハ位牌を肌ゑ身准備をーゑ躺て翌日卯太郎方に來たり此より駕ゑ乘られて卯太郎が附添ひ黄昏に家を出で夜路を辛ひ伯州路の追分と云ふ札の辻へ投かゝりしは駒勇と彼野晒

が扳合せお登代を渡せ渡さぬと挑み逢ふたる最中あるが是より如何なる話説やある所と旦繡絵よ顯すものから次回を讀みて知りよまへ

其廿一

折ふも空は雨もよひ月は全く雲よ蔽はれ星も光りを失ふ中よ光るは熊次と駒勇が闘ふ刀の火花のみ猩々徳い鵜を遣らずと立ち塞りて妨げ居たる此へ舁き來るまた一挺の駕はれ辰を乘せたるなれど其れと知られぬ猩々徳は之れをお登代が乘つたる駕よと思ひ違へて引留むるにそ籠夫は駭き突放し脚を速めて行かんとする此時お登代を乘せたる駕夫は稍く隙を發たりし故走り出すを最前より窺ひたる野晒がソレ遣てはと退趕る駒勇はまた猩々徳の禁むる籠をそお登代乃乘りたる籠なんめりと思ふまゝ闇がりながら手探りよ徳が首筋引摑み曳と聲して投げせば逼回と濛れ中央へ水音高く陷入つたり籠夫と邪魔の擾さし間にと逃目散に走り行くを馬勇いお辰と知ねば道が違ふアオイ籠夫と呼はりながら其籠の跡よ馬ひ遁掛たり恁る噪ぎはありぞと知らず一足後れよ來蒐りたる郡の卯太郎ば出會頭よばつたり横次よ突當れバエゝ面倒なと頬の邊を嚴しく擲れて苦と駭き轉るゝ間よ野晒はお登代乃乘つ

たる駕を慕ふて何處までもと追行きたり思ひがけぬき亂暴者に卯太郎は喫驚して起上らんとする手先よ何やら觸し物のあり志を拾ひあげつゝさぐり見るよ煙管を添へし懐中持ちの煙草入よであるなれば何かの証よなりもやせんと懐中よ志て之れもまた籠の跡をば追つ蒐け行きし此段落い如何る旦く玆に説明さず話頭轉題河鎮孝太夫の未亡人道乃は通よ背き志事とは知つゝ岩崎肇の心よ欲ひしは家の爲めまた二ツよは亡夫が仇と捜り出し盜賊の汚名を雪との所存成どお登代は其と測知らねば屋ゝ母へ諫めの辭を耳答蠅とて嬶子苛めは疾く當家を逃げよかしと口よ道てねど心の謎开め此故を如何よといふ!!肇い道乃と口説落し志望と遂げしものなをど左右よ娘お登代のありては恥娛しからぬ事のみゆゑ早晩お登代を失いんと竊に道乃へ寢物語をせ志事あるよぞ道乃は深く駭くものから陽は最とも同意の体に志青殺さんか毒害せんかなど怖ろしき料根なる如く岩崎とは語ひ居たれど口と意は裏表道げ出だせよ疾く走るべしと辛く當りて有しうちは竟にお登代は中奔をせ志かば稍く胸と落あれど故と其失てざり志と潰憾氣よ岩崎へ語また下女ふさくへいお登代の行方を知て居やう左おくば何處よあるか捜し來よと難題を言かけ耶よはをられざるやう爲懸れともお作い

また深き所存もあるべし下らずは居たり所反閑年中旬を過ぎ一日岩崎は河窪方へ來り扨當家限分の儀よ就ては段々吾より歎願を入

近々吉も俱よ誘ひ事と聞連れたきし後譯と筆癖あがら次回に記さん

其廿二

稍く家族よは御咎あく河窪ハ家名無事の御沙汰有事よ決たれバ就報ハ有ハ必定なり今日ば久々石上山の花觀事を思ひ起つたれバ卿同伴べし花も開き家名も開幸先の好遊歩あればかりに勧められ虚實は知ど案たる家名ハ無からに毫は心歡まれて岩崎と共よ打ち石上山よ向ふたゝ花見の茶屋へ趣の話說と繪樣の

夫れ石上山ハ櫻花は往古毛利大膳太夫大江朝臣輝元卿が當地を領しわりたる頃大和國吉野山より數樹の櫻を遷し植させ之れを培養して年々歳々土地を開いて公衆の觀場と志竟に小吉野の字あるよ至りたるが道は該本反覇の詠ぜられたる數原のやま

とおゝろを人問へゞ朝日よゝほふ山櫻花と云へるよ齊一勤王愛國の精神を表さるゝの意なりと聞えぬ恁りしほどよ文久年間に至りても花咲時は城下は勿論遠近人々群聚りて興を盡れ居るまで多く當山よ沿ふ一朶の流れを石上川と稱し點綠の支流ありて末ハ石見の海に入ぬ爾る程よ岩崎肇は道乃を伴ひ此川岸よ在る臨花亭と云る料理亭よ上り潛びの遊興あれと故と供人等ハ城下内よ待たせ置き其身は道乃と只兩人なれど兀然人目を厭ふ身ゆゑ城と興まりたる座敷よ入り花を眺望て須臾は酒酌し居たりまが肇は太く酩酊して其場よ絶ぬほどよなり恁る体にて飯宅ゑ如何一睡して醉醒せんと枕を取り寄せ横になるゞモシ轉寐ハ御身の毒と道乃ハ傍よ脱き棄てゐる外套を取つて腰の方よ被せ掛る間に早高鼾正体もなく寐入し容子を篤と見すまし密とまわかり床に置れる金囊の中より把り出す肇の懷靈彈き鎖の金物を外す手さへ慄々ふるひながらも心を鎮め裡より出ぢを一通の書翰を被き讀下し打駭きたる面色にて復採返まを畳み直す此時まで熟睡せま肇く不圖眼覺して看るゞ道乃が此体あるよ不之れも駭き起わがり卒然よ道乃が讀み入る書翰を奪ひ取らんと立かゝれゞ婦人ハ目認られしと思へゞ書翰を持つて遁げんとするを逐さず襟髪無手と把り膝下よ引据動がせねゞ道乃ハ故と聲震はま。探を破り身を棄て仇し枕を替まゝからハ妾よ遠慮は入りませまい面白さうな記文と思つたゆゑよ讀んて居るを貴郎は何んでも留め遊ゞす再ては御心變りにて他よ增す花が御座りまするかと道へは肇ハ冷笑ひ。一時の眺めに手折し花素より油斷致さぬ其の方吾懷中の密書を奪ひ遁げんとあそ不敵なれ此一大事を知るうへは悶然ながらも生ま置かれず覺悟致せと云ひ放し傍の刀を抜くより早く切つて苑れゞ道乃も屈せず云ふにや及ぶ此密書よ飽せ〜如く若殿を害め奉らんとする大惡人特よハ其夫孝太夫の仇と知れゞあはの身勝負は此方も望む所と准備の懷劍拔んとするを小癪な婦人と脚よて蹴倒し肩先一太刀切下れゞ苦とハ云へど屈せぬ道乃川岸に沿ふたる樣よ倚り手よ持つ密書を押戴だき神明佛陀や加護あらゞ此書忠義の人々の手よ授させたび玉へと心に念じ川中へ投棄てる時吹き起る風は忽ち彩文を卷あげまたハ吹れろま飛び行く折しも川筋を下り來たり〜樵船の中よは船子一人と齡を知命を過ぎしかと思ふ法師の乘りてありしが今風よ連れ舞ひくだりし文は行脚の旅僧の笠傍りへ落たりけり

町續きとは云へゞ仮に野面よ近き城下盛昭萱葺屋根の軒を傳ふ夕新柳の下涼み男はてゝら
女い二布の其れよはあらねど是もまた雛よ遠慮い内緒話し親子は膝を合せながら駒勇は腕
又さ尊思の顔を稍く仰げ妹ふ作よ對ひて道やう句旦那様が横死おされ其儀さへ知るぬうち
御心からとい云ながら後室様はまた岩崎様の御手に罹つて果敢ない御最期御嬢様い先々月
の末の夜測らず途よて御出逢申志連て皎らうとした折柄野酒機次が後室様の頼みを受たと
途中の乱暴支へられるうち來合した籠い當時御嬢様を乗たる籠と思ふゆゑ者家へ連て帰つ
たうへ裏より出せゞ御嬢様よはあらで植木師彌之助八妹のお辰如何えた詳かと仔細を聞く
よ兄は恁々の事よりして忠五郎乾分よ責殺されまた母親も沒なつたが遺つた此身を御家老
から召捕よ來と乃噂を聞き卯太郎殿とやらが保切よ大坂よ居る伯父の嘉作の家まで送つて
行く處と委細は聞れたがれ嬢様い權次の方へ擦はれたかと心ならねゞ直よ飛出し捜索爲た
をど暫暮れ行方の分らあいのい何處迚くへ往つた事かと考だんだ踏でも跡の祭り設まだお
辰どのを送つて來た卯太郎殿が間違て籠よ引添ひ往かれたか夫れなら御身の恙へあー就よ
えても四五日を經たら動靜が知れるで有うと只肉お辰どのを吾家よ止め二日三日と過えゝ

うち持病い瘧よ腦まされ起居も不自由よあつたゆゑ慈母やお辰どのゝ介抱うけて辛うと快
癒た日よ和女が來て詳細聞たお家乃噪ぎ正直一微の旦那様い竟よ盜賊の汚名を帯び未だ其
れ耳か後室様は発狂故よ手討よしたと御家老の御屋敷て河筵の御家は全く斷絶同然潭て乃
事を支配おさるゝ笹淵様い那乃大病已の父は孝太夫様を命の親と存命中は口癖よ云ひ續け
しゆゑ父よ代つて其萬分の御恩報玄と和女をゞ御事公よ遣り已もまたお邸の方へ向けては
臆さへ出さず御家内安全長久と祈るよ甲斐ない遣回の一件双方四方の話を聞き熟々沈吟を
すれゞするほど疑惑いしい御家老よて假令規則を破りしよもせよ偽植木師一人を責殺せ
とと苛酷成敗また現在盜賊の汚名よて評慎を命玄てゐる河筵の後室と密通し何が心よ背た
かは知らねど慈狂人と云傲て場所もあらうよ石上の臨花亭よく手討とい何程先殿の御妹公
を奥様よ貶おされた威光と云へ御藩中の棟梁とも仰がき玉ふ御家老の御擧動とは思はど
ず察する處後室様か操を破つたなさを方も深き仔細のありたならんが今とあつてい死人に
口なく是非もおしとと云ひながら後室様の儀は御家老爲と動靜ゞ捜つたうへては其儘よし
ては置れまいが何かよつけて肝腎のお嬢様の御行方が知れぬよ故てい御家乃爲よもなるま

いから其れが第一心懸りと兄の辭よお作お辰と顔見合し後の話説い次回讀亞ぐべし

其廿四

兄の辭よ妹れさくは涙を揮ひ道へるやう今更追ふても飯られぬと开も河筌の御家が斯まで噪ぎよ至るといふ其娘未を質せ時はお孃樣が彌之助殿へ戀慕をなされ其をが爲めよお孃も鬱陶て苦世〳〵と物思いしき顔色ゆゑ設もの事はあつてはと思ひ過した心から道ならぬとし知りあがら其お周旋をせんとしたのを早晩旦那樣よ見認められ恁々して彌之助を呼出し來よと乃仰をうけ普請小屋へと行途よて測らず醉酊の仲間衆よ据られて難儀の折から彌之助どのはれ孃樣へ暇乞をせんと小家を脱出し迫かゝつて妾を扶け供よお邸へ戻りい爲たれど當時お孃樣から彌之助殿へ宛たる浮狀を取落した其をが証據で彌之助殿い遂々翌日浮家老樣の吩咐をうけて鹿田屋が責殺したと後の評判また旦那樣は彌之助どのへ何やら密よお沿ありて奥樣は玄めれ孃樣へお知らせもなく其夜のうちにお邸を浮立なされたる跡よ遣りた御書翰よてい至急よ思起つ事ありて京坂勤へ赴くとのみ他よ事故さへ知れぬうち思ひがけなや鯉の松の頭よ於て横死なされ剩つさへ御用金を竊んでお遣おさをた抔と御上の疑ひは

れやらず御家は閉門謹慎の歎重なる折も折後室樣は何時のほどよか岩崎樣とれ御密會を御諫めあされたお孃樣を綱子苛の責折監卑妾も供よ御叱ありて二百目よい飯れ下れと以前の御動靜よ引換て人目も愧ぬ御不行跡其れ等を愛に思召してかれ孃樣は家出ありし其翌日より妾を責め登代の行方を知つて居やう知らずば早く搜ーて來よと無理難題を仰しやれど何首やら鬱々して御座るれはれ孃樣の身をお案事なさるゝお心の裏と曉りしゆゑ假令何樣よ仰しやても卑妾はお邸より下りませぬとお辭を返して耐忍して居ても後室樣が御心底また御家老れ御擧動が如何も不審と思ふゆえお孃樣の事も心に懸れど五日七日と經過しゝうち御悼しや後室樣は御家老の手よ敢あい御最期竟よい御家も斷絶同然卑妾も只得家へは復れど片時忘ぬ御家乃事今兄さんの云んす通餘りと云ぞ御家老が我儘氣隨の御返置沒去玉ひし旦那樣また奥樣八汚名を雪ぎ大きお聲でい云いれぬが特よ寄つたら謀反人とやらを見顯はす事乃あらうも知れぬバ那の御家老の心底を開き出す尋思いあるまいか夫れよ就いて思ふよい今から卑妾とお辰どのゝ亡御主人の菩提の爲めまた彌之助どのゝ後世愛樂と祈りの爲めよ西國の札所を巡り一ッよはお孃樣を索出だを御伴をて歸り度實は兩人で謀合せ貴兄よ

願み母様の許可をうけくと思ひますから何卒此願を聽屆けてと婦人ながらも忠義よ義つたるれさくの志望を駒勇と母が得心するが否挿給ふ推察ハあるべけれど且次回の分解を聞け

其廿五

駒勇と妹とお辰が思ひ起つたる所存を聽き寔ふ道理ある其辭吾は得心ままたが何時飯るとも限りなき旅路ふ出づる事なれバ母の心が酌かねてと遠へバ老母ハ首を掉り婦女ながらも武家奉公をさせて置のハ斯いふ時ふ御用ふ立つる亡夫の所存お嬢様の所在をは索てから西國するとは此上もなき宜い覺悟常々香華院へ參詣して說法の際聽いて居る慈航は渡ざる衆生もなく慈雲ハ掩はざる邦國もなき苦を拔き樂を與ふるは佛の慈悲とあるおれバ長旅とは云へ兩人の身ふ恙あるべき樣もなし跡ふは駒勇が居るなれば心殘さず旅立してお嬢様をお供まて伴ひ皈るべし哀別離苦ハ浮世の常必ず忠義を忘るゝなと宛も潔よき母の辭ふ駒勇は歡びて許可の出でしうへからと日柄を選みて啓行をせよと嬉て准備を整あはせ左右するうちまた一月餘を過ぎ秋の初めふ靈祭る子闌盆の時とそなりふけゝ大悲の誓仰なる門途ふハよき日ありけりとお作れ辰ハ兩人は同行三人と認めし笈摺脊ふ白鼠半杖と杓と、仕込

みし短刃精悍しく も身准備の姿を見るより母親は山川お氣を注々て兩風の日ば祭更ふ大警をして惱ふなと云ふも暮りまて泣顏を咳ふ紛らす氣丈の母親駒勇は諄々も設道中ふて病病ふ糧ちが別人を立て報知て來よお嬢さまと索出だそまては努々短慮な事をすゝと言含めて門送り兩人も宛然堰來る涙を禁めながらに暇乞去らバさらバの聲を殘し引分れ行く親兄弟之れ乃一世の別れとは後にぞ思ひ知られける話頭分顯岩崎肇は曾て反逆の一味者たる江戸邸詰の用人浦壁重藏へ宛て八橋割書の一條よりして彌之助れ事及び孝太 夫 を晴殺まゝ顛末を文認め近日腹臣の者が出府の砌持たせやらんと思ひ居まを折柄石上川の踏花亭ふ於て河窪の未亡人猪乃ふ見認められ只得真塩ふ於て道乃を斬殺い爲たれど道乃が該密書を川へ投げ棄てし爲め最と心安からず股肱ハ臣ハ命玄則下を捜索させしが更ふ分らず潮れども名ふ負ふ急樣ゆ為所詮止りあらざるは必定と聊か安堵はあせしもの、萬一ハ事もやと思ふの餘り俄頃ふ忠五郎へ內意を含め工事を一層急がせてまた同盟中の一人なる海野主計ふ江戸表出張を命玄浦壁重藏を謀り御後見たる鳥翁公また根岸倉男下等を失ふべしとの計略を授け立出させ尙ふ惡事ハ根を堅め居たる心の裡こそ怖しけれ

其廿六

夫れ人は定夢不定業非業不非業のほかゝ出ず小笹の露の露逆ゝ消ゆる命あり樂入の詩ゝ曰く行路の難は水ゝ在らず山ゝ在らず只人情反覆の間にありと宜なる哉駒勇次郎吉が父次郎兵衛が孝太夫ゝ享し恩儀のあるなれゞと妹おさくを同家ゝ奉公住させ其身と母ゝ家ゝ在りても同家の無事を祈し甲斐あく奸臣岩崎肇が爲めゝ孝太夫は盜賊の汚名を秘り横死を遂げ道乃は貞操を破りたる深き苦肉の巧計も曉しき耳か剩さへ狂人此名を負ひ乳乃の下ゝ斃れ娘れ登代ゝ繼母が所存を知らねゞ自ら家を奔り竟ゝ河窪の家名斷絶の沙汰ゝ追びしは寔ゝ古人は云ひし如く生死ゝ賢愚邪正ゝよらず顛回は短命にして盜蹠ゝ命長きの道理亦是非もなき事なるが妹お乞ゝまかせつゝお辰とゝもゝ目的あき旅に出しやりまも踪跡知れざるお登代を索ん爲めなれゞ駒勇も折々は城下に至りて彼野晒權次等が立飯り來しか如何と穿鑿せまに渠は猩々偽と共ゝ江戸へ出立するとて當春出立せまゝ未だ飯らずとの風聲なれゞ再ゝ彌よお嬢様を奪て逃しものならん此趣きを母ゝも告また岩崎が動靜を探偵するゝ近時は倍ん奔移ゝ耽り一家中の者も當主富丸君の許へ勤仕するゝ先立ち旦岩崎の邸へ伺候

するが如き景狀ありて甚だ去きゞ岩崎の邸へ耳出仕するを務とするの意をわるにど志ある者は竊に之を憂ふと雖も河窪家の体爲くを見て懼れを懷く者多きが爲め陽ゝ諷諫をそる程ゝ志士もあけれゞ我輩は漸次に猖長したるを見聞よつけて駒勇ゝ國家れ奸賊主家の雖散吾一身ゝてあるおれゞ突掛渠を屠つて其宍肉を喫はんものをと腕を扼して憤怒はすれども古稀近き母親ゝ憂を見せんも不孝の至りと胸を撫つて居たりしが一日次郎吉ゝ近邊ある朋輩の家ゝ招かれ日の暮るまで雜談し立歸り見ると母のをらねゞ頻ゝ嘆べと答もあく只看れゞ側の經机に珠數ゝ添へたる一通の手紙のあり一を不審に思ひ手ゝ把りあげく上書を看るゝ正しく母が筆の跡ゝて「撰書乃事」ヨ、と駭き駒勇は逆ゝ卷たる文おし拔き讀文体は次回に記さん

其廿七

駒勇は胸躍きながら手ゝ把りあげ志水莖の跡もおぼろの散走書讀下し看る文言は

必いそがれ候まゝあら〳〵書殘し申候治郎兵衛どの死去の後とれ作を河窪の伊家へ奉公ゝ差出してよりい萬事ゝ和子一個が必勞ひ老耄ー此母へ孝行を盡され殊さら河窪

の
家騒
動の
以降
は一
層心
配も
弾き
た候
事と
思ひ
つゞ
け此

世よ
用な
き老

の身わらずは和子が心のまゝよ忠義も立ち亡父は勿論御主人方にも御喜びと推し候ゆゑ度々死あんとい存ぜ候へども恩愛の情斷ち難く生甲斐もなき身を存命をり候とあろ此節人々の風聲によれば御家老れ我威尊横倍々募り民百姓を凌虐歴制の所爲拙からず人々難澁致た候へども誰とて其惡行を諫むる人なきは實よ御國の爲めに歎かはしき事に存じい素より邪にして樂えむは麻売の火の如く一旦は熾なるもきゆるよ早くまた心ざま正しくして苦しむは泥砂よ濁る水の如く日を經なば原の清きよなると申せば非除岩崎殿の權勢あるとも不義の榮利と浮雲の俚諺いつしか亡ひ失玉ん事い目前なるべけれど一日延ぶれば一日の國の爰をまも耳あらんと婦人ながらも絶がたき思ひをり候よ速も和子い此事を思ひ起されいと昨夜窃よ獨ぢ言を立聽き嬉しさの限りなくいれをども萬一毋への心殘りありてはと思ひいまゝ惜からぬ命を棄て和子の忠義ある委細へ

冥途の夫に告げ悦バせんと其れを樂しみゝ今夜井戸に身を投げ相果申し只不便あるは娘れさくゝて野を過ぎ山をうち踰て露ゝ宿り風ゝ梳づり狎も習はぬ草枕旅寝の憂の不在の間ゝ母と兄とゝ別れあばゝ登代様を伴戻り候と嘸遺憾に思ひ歎き悲まゝんと是耳未來の障ゝ和子ハ御國の爲めまた二ッゝは御主人方と母の仇と思ひ衆多ゝ代つて身を棄て禍災の根を斷ちあさるべく候申し殘し度事は山々ゝへども本望遂げ遂げざるゝ係らず跡より來る和子の身と存ぜゝまゝ妾が所存のみを記つけ置ゝ諄々も未練の舉動ありて嘲笑をうけぬやう潔よく本望を遂げあさるべゝ涙に墨のゝちり勝ゝ候まゝよろしゝ判じなされ度ゝ〳〵

母ゟ

次郎吉どの

謂訖りて駒勇ハ思ハゞッと男泣雲時は顔を得あげさりしが稍うゝ涙を揮ひ再は昨夜の綱り言を察し玉ひて身を棄られ此次郎吉が忠義をバ立てさせて下さりますかコレ母人嬶て岩崎の首を取り其場を去らず腹を切り直ぐゝ冥途へ參りまする故また爲損じ捕られても決ゝて未練な舉動なく潔よく最期を遂げませうとゝ云へ非業の御身の果是も正ゝく岩崎の爲ず

業今ゝ念慮をはらして呉んと怒氣は忽ち髪を衝き向ふを白眼立つたるは物凄くこそ思はれけれ軈て心を取直し母の死骸を井戸より引揚げ近隣の人々をも喚集め法の如く葬送を濟せしが一七日間ハ我家ゝ引籠り八日目を竢ち佛室ゝ備へ位牌ゝ添へ諸道具は殘らず香華院へ預け妹が飯り來し日ゝ渡し呉れよと依頼置き其身ハ近國の興行ゝ出掛けると云做し吾家を立ち出でゝ岩崎を覘ふ便宜を窺ひまゝ八朔の賀に登城の歸りを追手門の邊ゝ埋伏して討取んと其日ゝ竢ちて槊舉ゝ迫ぶ其の趣きは繪樣ゝあれど且く次回の分解を聴くべゝ

其廿八

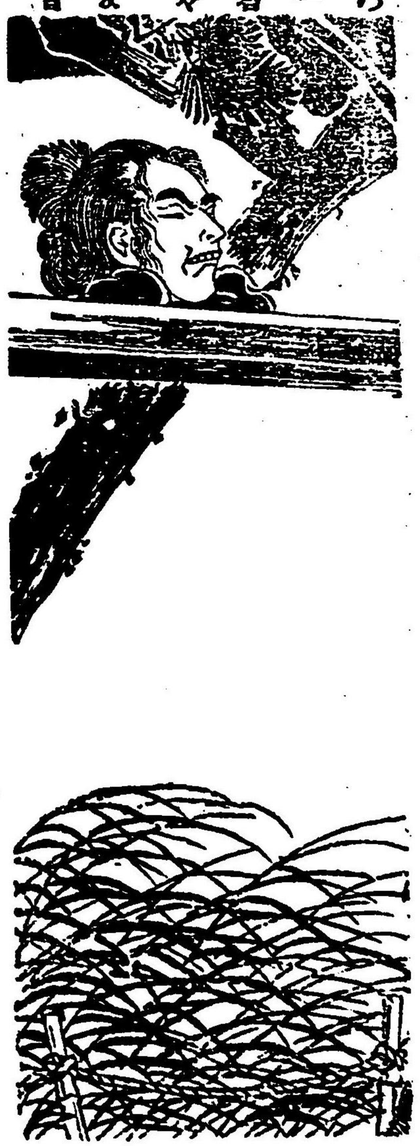
思ひ立矢の石見潟濱邊の浪やうたかたの泡と消ゆく覺悟の狀夫忠義ゝ凝たる意の駒勇手綱の其れあらで浴衣ハうへに繩襷角力の身ゆゑ刀物よりはと家ゝ有ふ六尺餘り五寸經の杉丸太を右手ゝ携へ城山ある追手の門に最近き日暮と稱ぶ土堤の頭に岩崎遇しと待居たり頃及文久三年八月朔日城中の御櫓に於て報する卯刻の太鼓に連れ諸士ハ追々登城なゝ巳の刻の太鼓を信號ゝ孰れも下城あしたるが當主富丸殿は先つ頃より二竪に罹らせ玉ひしゆゑ本日の御式ハい臨ませられず執權岩崎殿公ゝ代つて一家中の拜賀を享け式濟はりあく相濟し

よ付例規よりて在江戸なる御外家鳥翁君へ祝賀乃御狀を認せもる岩崎是れを檢閲急報て御病床よ觀き此旨を具陳し下城なせしい御機まて米刻の太鼓を打出す頃なり恁て轎子の左右よい三人の壯士扈從し追手門を出ゝ二三丁と來り日暮の土堤へ投蒐らんとする折から待設けたる駒勇は該杉丸太を眞向よ振翳し奸賊岩崎承まれれ天よ代つて駒勇か汝を此首に誅戮なそなりと云ひつゝ駕脇の武士を横に薙ぎたる必死の力キャッと叫びて鼻口より出血なして倒るれば鵜破浪藉よと殘る兩個が刃を抜いて切て蒐るを駒勇い杉丸太よて丁と受留め闘へど目的相人の岩崎を取逃してはと思ふものから小便が速くも注進せしよど卒其浪藉者を討留んと岩崎徒黨の姦臣等が追々該場へ駈着來る恁る中よも岩崎は轎子の戸を開きえ耳よて外へも出ず泰然と刀の反打寄らバ切んと身構あしたる容子を看るより駒勇は假令此場よ切斃さるゝ共渠を逃がして協ふべきかと數ヶ所の負傷よ血は滝津瀬浴衣を染むる韓血の苦痛よ撓まず數人を敵手に奮撃突戰なまたるゆゑ此棒先よ觸る者い一人とまて起る者なし爾を共敵は大勢なり殊よは新手は入り替い立替り得物〳〵を携へて立ち向ひ來る事なれば暴よ暴たる駒勇を漸次よ力盡り行し此段落は如何ならん

夫れ日暮乃土堤と云へるは前城主松平周防守が別館を設け其結構好を盡し美を飾りこれを眺望者日の暮るを忘るゝと云へよるより斯は稱びまとかや然るを當城主入國ありて該館を破毀されしゆゑ今は只其名耳遺れり閑話休題駒勇次郎吉は立向ひ來る武士の刃を奪ひ取りこれを左手よ持ち添へて武藝は知らねど死よ物狂ひ一刃なりとも岩崎よ切り附けんとれを思ふものから周圍を取卷人數の爲めよ進退維ゝ谷りまが元來氣丈の駒勇流るゝ鮮血を踏荒て大喝一聲前よ立つたる一個乃壯士を薙倒し拳が乘つたる鵜を目蒐て跳りかゝらんとする析から後走に駈つけ來りし海野主計が斯と看るより鎗をしおひて飛蒐つて右手の腋腹骨も徹と刺貫く主計は聞ゑし鎗術の名人宛も豪氣の次郎吉なれども此一鎗よ屬り果て哄と其場へ倒るれバッンと云ふより大勢が寄り蒐つて鎗の如く切さいなみて命を斷しは無惨といふも餘りあり嗚駒勇い一の匹夫なれど其の精神は鉄石乃如く忠義の爲ゆには命を塵挨よりも輕くし今日日暮乃土堤ゝ露と消て果敢なく成り行きしは寔よ痛惜べき壯者なり鵜て亂暴者は打果たる旨岩崎へ通ぜ开も此者は如何なる者かと取調見しよ全く河内平太夫の家婢さ

くの兄駒勇と云へる角力なりと言立まるで岩崎い意の憂と再い吾野心を洩れ聞き此擧動に及びしならん斯る奴さへ知ると識りては容易と油斷はなり難きと私に怖れを懷くものから故と憤怒の体を顯し重々憎くき涙籍かを以後恁る暴卒者の懲戒の爲めあれば楽が首を切つて梟不せ

よと鶴乃一聲雄一人否む者おく唯々諾々竟と駒勇の首を野と晒し執權岩崎肇へ對し乱暴と及びし科に依り斯の如く梟首せしむる者也との捨札をさへ添れど志ある者は駒勇が擧を近き櫻田の義徒よも劣らぬ迚れ日本魂のなと驚と賞讃あを居たり不題同國津和野の町に西林寺と云へる梵刹あり此れ住持敬眞は元濱邊なる岩崎氏が父主殿の弟おれど幼年より武道を嫌ひ深く佛門に飯依し十一才の春西林寺の前住敬阿和尚れ徒弟とおり其れより道心堅固よして鶴の林の茂きをもき雲の嶺の高きを仰ぎて出離生死の西の道を修する事最と切おるゆゑ遂よは同寺の後住となり道德の擧は陪々高りけ



り近時乙津和野を立つて近國近郷を行脚し此ほどより故郷濱邊に滯留まて村々の民を教化
ー居たりしが今日しも神谷村ゑ赴き其飯途城下盤頭の刑場ゑ投かゝり後の話說は次回ゑ記
さん

其三十

再戰敎眞和尙は近時濱邊の城下ゑ出て專ら人の評判を聽くゑ自身が爲めゑは甥ありける岩
崎肇が先君の妹花子を妻ゑ賜りしより其威勢漸次に高く驕者の意を生じ君家を輕蔑して恐
制專橫到らざる所なく志士い腐ゑ之を憤怒るど雖も亦奈何ともあす術を知らず偶ま諫言を
容るゝ者あれば忽ち苛酷の罪科ゑ處し其家を絕ち之れゑ反して阿諛仕ふる者い食祿を與へ
金錢を領ち妻子富貴ゑ處り春鳳衣食に飽くの榮あり爾れバ淺季の人心減岩崎が門に翻て完
然一國の主ゑ異らずと喋々するを見聞につけ敎眞和尙は只管ゑ嘆ぜ吾岩崎家は當主の祖先
左近將監殿より數代を侍士して君寵も啻ならず況て兄主殿が精勤の功ゑより榮華へ忝け
くも妹子を降嫁させ玉ひし其高恩はまた莫大あり然るゑ當主の幼稚ゑ在すを奇貨ゑ斯く人
口ゑ膾炙するまでも我威に驕り專橫を恣まゝするこそ辯事あれ吾今慾界の俗塵を離るゝ身

ありと雖も御當家の爲め岩崎の爲め捨置べきゑあらざれバ肇を逆ふて肯ぜざるまでも說諭
さんと敎眞は有繋血筋の情誼も深く稍く其所存を決せしなれど敎化に進あらざるゆゑ一日
二日と經過しゝゑ此時月は山の端を出て雲をあざむく秋の夜の風ゑ戰ぎし芒原の中央ゑ蟲
を設け梟し首を看るより敎眞歎息し如何なる者かは知らざれど偶得難き人界に生じながら
身首を異し斯踐ましくも野面に曝され一族の名を汚し未來い地獄の苛責に遭ひ浮む瀨とて
はあらざるべき歟もまた如何なる者なるかと傍へ立寄り携へ持ちし小提燈の明りゑ透し案
札を下し見るゑ這い什生岩崎肇を討んとして斯る梟首ゑ處せられしと稍くゑ讀得たりーか
バ敎眞い太く駭き是れ素一個の忠義の徒にして必竟肇が惡逆を憤怒のあまり擊殺せんと綜
の此ゑ至しあらんが不幸ゑして其志望を得ず反て梟卒亂臣此名を被りしこそ悼しけれ亡者
い宙宇ゑ迷ふあらんが今此敎眞が道ふを聞け岩崎肇が汝を斯る刑ゑ處せしも蓋て其身も此
刑場乃露と消長く醜名を世ゑ痕めん其時はまた汝こそ眞個の忠義顯れて千載の下ゑ美名を
遺さん盛者必衰會者定離因われバ必ず果あり努々心殘さゞに成佛せよと懇切ゑ首ゑ向ひて
回向しつ涙を揮ひ立去りた後乃話說は次回ゑ記さん

有恁て程よ教真和尚は翌日を竢ちて急ぎ岩崎の屋敷に到りて面會致し度旨を申入れまよ折よくも主個肇は在館よて斯と聞くより玄關まで立出て通い伯父公よは能くこそ來ませし誘とゞかりよ前よ立ち案内をすれゞ教真は衣の袖を揉みぢながら背後に屬く打通れば且此方へと請玄入し座敷は綱代天井よ屋の裏を裏みて長押床間は風流なる唐木將て造り出し調度また俗ならずして文珍房具盆栽い勿論琴棋書畫所狹まで飾り立しい恁る遊興の席と見ゆたり庭前を眺望ゞ常盤木の間に初紅葉を顯し假山い究て高からねど芝耆丸が須彌山をうつし秋挑い稍く紅ゐして西王母が三千歳を羨ます其他渾ての物好臻れり竭せる壯觀美麗看るよつけても教真と人の風聲の虛ならざるを漫よ歎玄ゐる折から衣服を更め岩崎肇い其座へ立出て兩掌を突き伯父公よは先頃より津和野を立つて當城下へ杖を曳かせ玉ひま趣きい當家より御附屬として西林寺へ遣ま置たる近藤勘助の許より報知來り早速御伺公も仕つるべき筈なれど御旅宿とても判然からねゞ意外の無禮い幾重よもゆ容赦の程願ひ奉ると賠詫は教真容体を正し俗塵の火宅を離れ三界よ家あしとする沙門の俺へ無沙汰の詫よ及ふべきか

は其よりは其方こそ改心あして先君と亡父主殿の兩墓前へ御賠詫を申えて切腹せよと思ひがけあき伯父教真の辞ゐ肇は心憤り。仔細も告ず切腹せよとい伯父公の仰とも覺申ず不肖あがらも一藩の執權職たる岩崎肇君家の御爲あらざる外は容易よ命は棄難まと道ふ頑熱々教真は打諦視て落涙あし君恩の高きを思へゞ冠山も敷ならず御仁慈の深きを思へい石見の海も比がたし然るよ其方花子の方を降し賜り妻となし郁之助を出生なまてより此陣幼主當丸君を蔑ろよし容易あらざる企謀ある事人い識らじと思へども遠も低上よ流布なして聞もうたてき事ども多り熟々其方の行爲を觀察すると浮める雲の危きを知らで人を看ると芥の如く快樂を淫酒の穢れたるよ耽らかして窩藏の火坑よ陷る事を知らず古人謂る事ゐり邪智よ志て禁り且捐むものは隣れる家の貨を算て燈火よ寄る虫の如く狼馬を不及の慾よ勞忠て五慾の海底よ沈む事をおもいずと其方が今の一身君家の御爲なりせゞ命を棄るなるべけれ也其の命を棄當國安穩の道を謀るべし昨日急き駒勇とやらんが暴舉よ及びし其起因も非除他人は知らじとするも此教真い疾よも知る石上川乃臨花亭よ散らせし落花流藕の密書は吾掌よ入つたるゆと云はれて駭く岩崎肇須臾辞もあかりけり

登時敎眞復度道ふやう。當春津和野より富國へ杖を曳き郡中を經歷そるうち石上の川上より樵夫共舳艫に便を憑み花を眺望て下る折から彼臨花亭とか呼びなせる酒樓の頭へ來たりま時迫に看仰る高樓より飛散りて吾頂きし笠へとゞまる一通の書翰は世にも恐ろしき逆謀の件を認めたる主は確に岩崎肇イヤサ云ばぬ前あそ左も右も伯父の口から明白に此の趣きを申し出てあゞ忽ち滅そる岩崎の家名其れゆえ速かに切腹せよと今勤るは伯父の慈悲爾れども件の密書に對し分疏の道あらば說明そべし汝の所存に一點の疑だになくは非除世人の惡評ありとも伯父が代て辨解せんまた分疏立難くゞ切腹なして君父乃墓前へ海悟の意を表するあそ眞個の武士といふべけれ返答如何に敎眞が銳き言詞に岩崎は默念として居たりしが元來奸佞邪智の肇信と尋思を決せしか宛然と首を仰げ。密書御掌に入しとあれゞ今更右左に陳ずるい甚だ卑怯に候へゞ只仰を拜受し父の墓前に於て潔よく切腹仕つるべし伯父公には死後の儀を宜敷御執計ひ下さるべしまた今生の御乞暇旁々登城なき富丸君へ拜顏を願ひ不忠の御賠詫申し上げ奉つらんと如何にも既往を懺悔なしたる動靜に見ゆれゞ敎眞は

嘗悅あし其心底を決せしい國家の爲めに賀すべきなり岩崎家の儀い敎眞が身に負擔して相續に恙なきやう哀訴せん努々所存を變ずる勿れと涙とゝもに說き諭し切腹の日を定めなゞ城下本町なる吾旅宿百足屋金助方へ報知來よと其期を約して立あがれゞ玄關前なる式臺まで見送る肇い太息吐き軈て座敷に歸り來たる眞夫の動靜を伺ひて次の間に在りま妻花子は其の場へ立ち出て傍へすり寄り。思ひかけなき伯父公が密書を拾ひ玉ひしとい眞個の事にて候ふかと道へゞ肇い打頷點句如何にも容易ならざる密書を當春石上へ花見乃際流れの川へ落ちたる其仔細といふは愧かしながら箇樣〳〵云々なりと河筋に未亡人御乃をゞ斬殺したる彼の体爲を物語れば花子を太く駭きて然る大切の密書を所持しゞ意見ありまは道理あがら其御說諭に伏し郎君には御切腹あるる御所存なるか句迚は愚なる疑問かお斯まで企謀し我本望引絲伯父公の諫言あるとも容易に聽心なすべきか句其れでも只今父君の墓前に於て相果るを潔く御返詞ありしにあらずや句夫れを苦肉の謀計を施すべき吾所存なるゆえ伯父を欺き飯せしなり句而てまた郎君の御所存は句アナ君高し靜に〳〵と制しながらも閣下を看廻し花子の耳に口さ寄せ零時囁き居たりけり

其三十三

有恁しほどよ岩崎の妻花子い聖より何事か密意を言含られ翌朝疾く起て從者一人を召連れ微行よ敵眞が旅宿なる百足屋金助方よ赴き竊よ對面の儀を言入れまよ敵眞は何事やらんと法衣に着替坐室よ請ー今は甥肇の妻とは云へ正しく前君左近將監殿の令妹なりと思へバ其礼遇を厚かりしが花子い稍く聲を低め妾今日御旅宿へ推參せしは伯父の公へ密々聞えわげ願度事ありてなり刃は縮更しく禀さずとそ知食す如く能當主富丸君よい未だ御幼少よて在ます爲め公儀向け事は御分家たる鳩翁公か御代理遊バされまた本國の事は所天肇が不肖ながらも御名代を仕つりありたるが御聞及びありしかは知らねども富丸君よい先頃より御不例よ渡らせ玉ふゆゑ諸士け心勞大方ならず典藥の銘々も晝夜詰切り御用藥を勸め進らすれど今日よ至るまでも更に効なく白すも如何の事なれど御性來聰明よ在そと申しあぐる程なられバ太く妾も頼遣き く其れと申しも血縁の恩愛一日も速く餌本腹に趣かせ進らせんと思ふより此ほど御容体を窺ひよ昇殿致せしよ親しく御座へ召させられ熟々ほ容子を看奉つるよ如何にも餘ほどの御衰弱なれど御所爲は更に平常に異り玉いす爾れどと夜よ入るとは必ず

御惱烈ーくして甚だしき時は物に狂いせ玉ふかと思ふバかりと御侍女衆の噂を聽き妾倩々察するよ這い全く物怪ハ祟ならんと然る擧動の有るや無しやと取調ふよ先つ頃御庭前を御遊歩ハ折ふー最と年經たる一疋の蟇蛙が御園ハ池に飛入らんとするを見認め玉ひアレを射よとの君命よて扈從奉りし戸塚民彌が御殿よあり去半弓を將て蛙の眞中を射たりー故蛙は其場よ落命なきゝが不思議や蛙の疵口より一條ハ白氣立昇りしが忽ち富丸公の御身よ纏しと見るや直よ君には物よ怖ち玉ふほ景色よて直に御寢所へ入玉ひ其よりしての御不例なりと承きはつて考ふるよ全く其蛙こそ口碑よ傳る彼御園の池の主にして數百年を經たるならんよ君が益なき御一言にて命を落せし處より祟りをなすと存ずるなれバ所詮藥餌ハ力にて い御快方ある樣もなし只道德堅固の賢僧が行力修法によりて物怪を退散なすに如いなしと思惟する折から伯父の公の當地よ杖を曳き玉ひしと聽いて嬉去く御旅宿を窺ひ知りて參りしなり何卒君の御爲めに御修法ありて惡魔退散の祈禱を願ひ申すなりと胸の刃を押かくし宛も眞個しやかに述べ立てし此段落の譯い次の行よ記載すべき

其三十四

夫れ君子をバ欺むくべし誣ゆべからずと賢者れいひけん寔よ然り岩崎肇は妻花子よ謀略をさづけ當主富丸君ハ病氣い物怪の祟りなりと教兵へ告げさせ此の障碍退散の祈禱を言入れまよ教兵は肝の裏よて思ふやう吾嚮よ甥肇か反逆い其子郁之助を當家の嗣子とま權政を恣まいにす

べしとの所存より出てしと思へバ花子よも同腹ならんと推せしよ昨日肇へ說諭せし切腹の事をも知らざると見ゆ故々當主の御病氣御恢復の祈禱を依頼に來られしあそ全く二心なきよ極つたを斯知るうへい富丸君の御病氣平癒の修法を行ひ其効驗曠きからで御全快あつたる後甥肇が助命を願ひ退隱させんと有繁は血縁の愛着よ渠等夫婦が奸計よ陷いれらるゝとと知ふず竟よ花子の辭を信玄異儀なく依頼を承諾なし濱邊の城の御園内なる池よ年經る蛙の棲みまは最も口碑に云ひ傳ふる處と雖も當國の領主へ對し爾る祟を爲すとい以の外あり元來何程ハ怪蛙ありとも奚ぞ正法に敵する事のなるべきかい仰

の如く退散の修法をなさバ忽地に御平癒あると必定あり賜りまがら吾本寺より於て執行なすは易けど路を距し事あれバまた三日四日を費さん其れよりは貴家の一室を拝借なして修法すべし憚りながら飯邸のうへ肇殿へも其子細を御語ありて御准備ありたし善は急げと申すなれバ明日より祈禱の檀より一週間を以て滿願とすべし努々貴家よも御慎とありて血を看る事を忌み玉へかしと尚百般よ修法の用心を說き聞かせゝゆゑ仕濟たりと花子は心よ歡こぶものから色よも顯さず軈て歸邸をなしたるうへ此趣きを肇へ語り籌策充分よなれりと敎眞が指示の如く檀を築き准備萬端整ひし折から翌日より至り敎眞は法衣を正しく入來たれバ肇夫婦は出向ひ設けの一室へ請ぜ入るゝバ敎眞は更め肇に向ひ昨日花子まで降し如く一七日八祈禱訖るまでは堅く血を見る事を忌なれバ足下も克々身を慎み必ず短慮あるべからずと其れと云いねど切腹を禁むる伯父が仁慈の辭も肇は心よ冷笑へど面よも見せず拜承の樣子をなして居たりけり恁て敎眞が一室に入り檀より上るを竢ち濟て吩咐置たるよか鹿田屋の乾分九郎藏をは玄め四五人乃乾分等は此一室を悉皆く釘づけにして怡も瘋癲人を拘禁ぜが如く出づる事さへ慥はずしたる肇夫婦が所存乃裏い若殿の病氣平癒の修法を云ひ立て

一室よ入れ終よ敎慎を餓死させて惡事露顯の根を絶んとなしたるよて寔よ恐ろしき所存なるが宛も堅固にして道德賢じき敎慎あれど斯く姦策の術中よ陷れられぜは甚と痛むべき事あらずや

其三十五

單表西林寺の侍士よ近藤勘助と云ふ者あり元い岩崎主殿(肇乃父)の用人たり志近藤勘右衛門の一子なるが幼年の頃より多病にまて所詮武家奉公い成り難きと父い出家を遂させん望よて當時主殿の舍弟敎慎が西林寺の後住となりしを幸ひ同寺へ委ね遣つたるい勘助が十八歳の頃なるが然るよ勘助は性質正直なれども左右よ輕躁よして學よ就けども記憶に乏しき自己より年少なる雛僧們が除よ進み昇ると雖もまた之を遺憾とも思はず師に督責るゝも更よ意とせず恁てと僧侶の勤行い覺束なしと恰好侍士の暇を乞て下し者有たるを將て其後役となし召使居たるか勘助は却て之れを甘玄ひ働く事も精悍しけれバ遂に其まゝ下男們の取締をぞさせたりける有恁き後住職敎慎が濱邊地方へ杖を曳きし後二月餘經ちたる頃岩崎方より尺牘を以て敎慎和尚の身上に付き申談ずべき事あるバ汝早々出張せべきと告げ來た

り走ゆる何事やらんと勘助は早速濱邊に來り岩崎の邸へ赴きしよ花子は夫れと聞くよりも
軈て一室へ招き入れ聲を低めて遣へる樣。其方を故々呼寄せたる用事と云は伯父敎愼どの
は先頃より若殿の御病氣浄平癒祈禱の爲め當邸内の一室に於て浄修法中なるが既よ一ヶ月
餘を經ると雖も一滴の水一粒の飯だよ食し玉はず齋食あるとて擅上を下玉はねど其氣丈ハ常
ふ替らぬ誦經の聲然れども折々勘助を呼べよと沙汰爲玉ふよ不俄よ其方を呼び寄せしなり
夜よ入りなバ一室の襖よ穿ちし穴よりより其方は機嫌を伺ふべしまた此藥と若殿より下し賜
る神藥なれバ水よ混ぜて差あぐべき是等の事は家内よて取扱かふ者も多くあるあれども浄修
法にかゝらせ玉ふ以前よ決して他人の來るを禁ずと堅く戒め置玉ひし事なるゆゑ故々其方
を呼びしなり如何よ浄氣丈よもせよ一月餘りの御齋食無浄疲勞あるべし此浄藥をさ
へ進せなバ假令一年二年の斷食ありとも浄身よ障る事ハあし去りながら此浄藥を若殿より
下し賜ひしと云ひては平生の浄氣質恐れありとて浄服用なきかも測られねバ遣は其方が津
和野より持來りしと申あげ是非とも浄用あるやうよ申進めるあそ浄爲めならめと云ひつ
ゝ差出す紙包を渡せバ勘助ハ志戴き若殿樣の浄病氣浄平癒の浄修法ある迄きは先つ頃の御

報知よて疾く知りたが浄斷食とは思ひかゝず仰の如く今夜御伺ひ申し上より賜る此浄藥を
其れとは云はず進せんと欺かるゝとて露知らず正直一途の勘助が軈く自己が休息所へ立歸
りたる後の話說は如何ならん

其三十六

再說近藤勘助は花子ハ手より受取し該紙包の一藥を水に混じて器に入れ日沒なバ敎愼よ飲
ましめんと待居たりしが其時忽卒の男ゆえ該藥の入た器を過つて取落せしに水ハ流れて樣
を遞ひ咲乱れたる秋草の花よ濺れバ遲は什生忽ち萎み枯果てあるし綜の不思議よ駭く勘助
合點ゆかずと器を把りあげ彼此檢るに白菊の花に濺れば是も同玄く葱變じて枯しぼみ色を
失ふ体あるよぞ正しく毒の含みし藥と覺りしものから不審を起し爾るあても何が故よ斯る
物をバ飲ませよかしと御新造樣の吩咐なりしか何よもせよ必然りは主人の身の上と思へバ
其日の怒るを誤ち聞き置たる與の一室の修法の檀へ近づき見るよ蹴の如く一穿の穴ありし
故維あんめりと内を覗けど護摩の煙りの朦朧たるのみ裡ある敎愼の有無さへ定かならね
バ聲をかけんとする折から一室ハ内より勘助〳〵と呼バ試るよぞ嬉しや御無事で在せしか

と穴の邊へ身をよすれば再度敬愼の聲音よて否とよ吾い肇夫婦が惡逆無道の奸計よ陷り終
よ命い斷つたをど國を念ひ君を愛ふる其一念の鬼となつて汝の來る日を竢ちぞ此守靈の
裡よい國家の大事よ係るべき甚と大切の密書なれば今より汝此家を拔出て江戸表よ赴き仕
勤の家老松倉丹下に手渡ちもべき甲夜汝に藥を與へて吾を殺さんと謀し肇夫婦は國家と
密にんとすゝ逆臣あり吾一念の冥鬼となつて此よあるを故生居ると心得て汝を呼びしも自
から吾等が惡事を顯はさせんと神明佛陀の妙智力所謂天の配劑なを吾が肇が謀計よ罹
ぶし事を聞りたるい當邸へ望み來て修法よ就きち其日にわれど最早助かるべうゝなきを悟
り吾等失婦か天誅よ加はる日まで當殿の息災無事を祈ん爲め身を犧牲に一七日の修法を竢
り舌を斷ち絶命なせど此密書を松倉丹下へ渡さん爲め未だ存命居る体よ冥鬼となつて故ら
よ汝を此へ呼び寄せしは此儀を告げん爲なるぞや諄々吾意よ背くなく忠義の道を忘るゝな
かとばかりよ穴より差出ちたる守靈を勘助手疾受取りく偖い貴殿は然る森に懼り
玉ひ最早此世に亡御身よく候ふか始めて知り志當家の旦那なたは新造の惡逆謀貴殿よ毒を
進せんと思ふが爲めよ私を遙々呼なされたい他人の手にてい水一滴貴殿かは飲なさらぬ

ゆゑ死んで呉坐るを呉存命と思ひ詰ての計略が反て其身を亡滅玉ふ原とありしも天罰なら
め主人筋とは申ちあがら御國の爲にい恭難ければ是よ直よ江戸へ赴き此守靈を持參なし
松倉へ訴へ出で貴殿の怨みはらし申さんとは云あがら悼しいと歎けば歎愼聲荒く不覺
八嘆きに遲々なちて見認められなば一大事疾々せずやと云ふうちも漸次〳〵よ聲細りばつ
と燃立つ陰火の光りよ思はず裡を覗き看れば血よ染む顏よは瞋りをふくみ合掌のまゝ榻上
へ哄と倒れし景狀は今と全く呼吸を閉ぢ闇浮久しくなりしなるべし勘助は稍うよ涙を禁め
身准備ちし精悍しくも塀を乘り踰ゑ同家を脫出ち江戸屋敷を志投て孑趣きける

其三十七

武藏國と下總の間を流るゝ隅田川と稱ち昔はいざ知らず架たる橋よ兩國と名のみ存して今
いーも江戸第一の繁華の地西と東へ往來の絶間隙あき彌生け空人の出盛る未刻下り廣小路
ある見世物小屋の屏風より年未だ若き女の順礼甲乙看廻し立出でゝ物珍らしさよ迂濶〳〵
するうちお作さんを見失ふたが國とは違ふて大層ち此賑しい人中ゆゑ何程搜しても身當ら
ずコリヤ奈何したら宜からうと彷徨折から元柳橋の方より一歩は高く一歩は低く脚元さへ

も定まらず兵兵あがら來蒐る武士に思はず碓と衝突ば酒に醉たる癖とまて肱に角立て目を瞋し看れば乞食は分際で兩刀挾む身共に對し無禮をなすは憎くい奴と威丈高なる權藝に彼順禮は大地に手を突連れの者を見失ひましたる故索探すに心を奪れ旦那樣の御跡を努にも存ぜずッイ疎忽を致ましたる眞平御免下さりませと道ども武士は餓な肯す否々堪忍は相成ぬ察する處其方は此雜沓の中を働く那の掏盜とか申す者であらう婦女と思ひ油斷をさせ梁町人の眼を瞑ますかは知らねども兩刀帶せし身共の品を奪んなどとは大膽千萬誌人の爲めあれば手討に致すと刀の柄に手を掛れば女ハいよ〳〵駭きて衝突まは身女が如何にも恐うゆ座りまそれど決まて貴官の品物を盜まうと致す者ではゆ座りませぬゆ覽の如く此笠に記せし身女の國所は州濱邊の城下在父母に別れて姉妹が西國路から廻々と順禮をして菩提を吊ふ者昨日當地へ來はしたまど西も東も分りませぬゆゑ知己の者が兩國に居るのを便りに索て來る道此賑しい往來の中に何時の程にか伴の姉を見失うての當惑に心配をしてをりまする折柄なれば盜とやらでハゆ座りませぬ情願ゆ免し下さりませと賠詫と更に肯入れずかさに掛つて罵りあがら咄嗟刀を拔かんとする此時武士の背後より人押分けて立出し

は姿風俗も人目立つ華美ハあれど華美あらで縹致も年も二九からぬ今柳橋の歌妓に聲價高き志女吉と云ふ娘者あるが手討にすると立噪ぐ件の武士を押禁め離かと思へば伊東さん此兒を切るとハ紫痴らしい其樣な申譏は廢にして妾と一緒に青柳さんへハテ人立がして見つ共よくないコレ順禮の嬢様は妾が引受るから此場はずと早くお出と地獄で佛の仲裁に女は歡ひ志女吉を伏拜みつゝ立ち去りし後の話說は次回に記さん

其三十八

氣にいらぬ風もあらうに柳かあ其系筋の柳橋同朋町の中央に表へ掲けし提燈は小粹代と記せし藝妓屋の内ハい毋ども思しき者が火鉢の傍に差俯向き去藝妓に對ひ聲角立て。コレ小登代先刻から此樣に口を酸ばくして饒舌て居るに返事の無のハ不承知なのかへ、餘んまう不承知なあぞと大きな口ハ利かれまい今更云はずともの事だけれど和女が忘れて居るかを知れないから云つて聞かせるが全体和女は田舍者然も江戸からハ二百里餘の石州とか云ふクヤ〳〵育ち以前妾が津和野樣のお邸奉公の頃懇意にした野晒熊次と云ふ男が吉原へ連れて行き娼妓に賣ると話た玉の和女を見るに縹致あり姿なり廓へ嵌るハ殺生と聞の志女吉

さんの母さんと相談して野晒の方を金で仕切り宅へは連れて歸つたものゝ旦ても泣いてばかり樣子を听けば那の人に欺されたと云つて碌々と妾の眼もうけぬゆゑ果は妾さへ業が熱へ蟲廓へと思つたのを志女吉さんが禁めた後和女と意見をして呉たので稍ゝ生氣へ出と爲たをど厭な訛言を八釜敷釜に稍う此ごろ一人前の江戸藝妓らしくあつたのゝ証の肥護だ志女吉姉さんの引立てと此母が苦勞ちやゼヨ疲れも是れも宜旦那持たせて妾も不剛樂をしやうと思へばあそ那の志女吉さんの旦那松倉秀雄樣の親旦那丹下樣は濱邊のお邸の傍家老株其秀雄樣と御朋輩の伊東甚之助樣が世話をしくやらうと仰しやるものゝ酢の甚嫌れと得心せぬは餘んまり氣儘が過ぎやうぜ和女も石州生れだから伊東さんのお氣に入さへ慥つたなら米だ獨身の若旦那御新造なり奥樣なをるは和女の腕次第故郷へ飯りも出來やうから應と云つてお心を隨ひなコレ泣て居ちやァ判らあい眞個を地烈たい強情者だヨと煙管で疊を叩き立て眼に角立て罵るゝ何處も同玄藝妓屋の熊婆婆と知られけり此時障子一重を隔し奥より一個武士が獨酌をしてゐりけるが嬲て其場へ立ち出でゝ小登代の傍に坐を占めながら。コリヤ小登代如何致たものダ去年梅川より不圖面會した砌好女だと思つたゆ

ゑ松倉生の愛妓ある志女吉を尋問へば妹分の小登代と云つて石州生れと聞いて一層念が增し是非とも吾と周旋せよと度々志女吉へ頼めども風と柳の其日送り只得養母へ直ゞと此相談を爲のけたれど今も老母がいふ通り不肖ながらも濱邊家の用人頭伊東猛が長男甚坐勤めの此甚之助和女が應といふ時は母俱伯に安樂と暮させやうといふ所存十二や十三の未開女ではあるしコリヤ慾を知慾を知と一なだれ應ば顏を仰げ母さんなり貴官なり御深切あれ言詞ですが妾は如何も其をばかと句フムスリヤ是れほどと申しても何伊東樣のお心とは靡かぬと云ふのか何死んでも卑妾は厭で御座んす何ェ、いけしぶとい然う吐かしやモウ了簡かと立ちかゝる折から表の格子を披け何母さんまだ十八番かチ何オヤ志女吉姐さんサァマァ此方へ

其三十九

東兩國と名を高き青柳樓の供部家と仲間体の一個八男と對ひ合ふたる破落戸体の男い煙草を燻らしながら「何殘で奈何逢ふかい知れねェから悪い事は出來無ェと云が實にれ前に江戸の地でば會さうとは思はなかつた然して今い岩崎の邸とお前い居無ェのか「深い樣子

を知ら無ェから然う思ふめも無理ぢやァ無ェが實はお前が河窪の娘お登代を野酒の權次と丶もよ攫つて往つた跡で惘然や那の道乃い岩崎れ旦那の手に罹り敢ない最期を遂げたゆゑ河窪れ家も斷絶同様また駒勇い旦那が登城の飯りよ亂暴しかけたなれど討留められて獄門となり吾はまた旦那から内意をうけて江戸邸へ仲間奉公に住み込んだい自然旦那ハ暇かあつたら直ぐに知らせる隱密方者尾よく邸へ抱込られたうへ今ちやァ松倉丹下と云ふ岩崎様とは抵抗お旦那の家よ仲間奉公耳を追つ立て探ぐつて居れど未だ金儲けよ成さうお注進口も目つから無ェが今日も此へ來てゐる若旦那の秀雄と云ふと親父と逢ひ原かあつたら遊興が好て柳橋の志女吉と云ふ藝妓よ馴染屬々と通つて來る處から偶よい吾が供よ立ち親父の○○つをば合せてやるのて近頃は大信仰サ此勘靜なら何んでも今よ宜儲け口を聞くてゐらう殊よれ國からはまた近頃岩崎の旦那の同志と所た海野主計様が出府をしたから孰れ己等も相應お御用の出來るよ極て居るが然してお前は何處よ居ると問れて德は頼よ手を擦「新ら れてオイソレと饒舌も何だか極が悪いがれ前も知つて居る通ェ岩崎の旦那から頼まれ權次とゝもに河窪の娘を引攫へよ出かけた夜測ず駒勇が那の娘を連れて飯るを見認々たゆゑ途

よ待ちうけ喧嘩を爲かけ攫つて行うとする處へ何處へ行のか是れもまた來蔓る駕よ三人が躊躇うちよれ登代が乘つた駕の走るを追つかけて權次と吾ェ駈出したが駒勇い今一の駕挺をお登代と思つたか其跡を追ひ往つたゆえ此方は充分思ふ坪尾張の熊田か岡崎當りへ賣あかさうと惱談したれど玉が宜から吉原へと權次がいふのて迚々と江戸迄共よ出掛た後以前權次ぢ懇悉だといふ藥研堀れ熊鷹婆ァお勘よ頼み賣らうとまたを町を見てから吾の方へ引取度との掛合よ一時も早く手放して肩を脱けやうとお勘婆ァへ賣渡ーて其金を山分よして野晒は直ぐお郷へ歸つたが吾い綽号の猩々野郎朝から晩まて飲つゞけ其ちへ部家へ入り込んて好な賭奕にまた元の杢阿彌となり詮方なし今ちやァ兩國近邊を破落戸てゐて料家へは折々出入をして居るがお前よ逢ふたァ不思議な縁と話說よ餘念なき折から次の一室よ着替をせし藝妓は耳を聚てゝ兩人の話を聞き居たり

其四十

當下仲間は手よ把りし猪口をしたみて德へ獻し「其れちやァ權次は飯つたのか吾が國をバ出る頃にやァ未だ屋舗へは面出をしぬエが孰れ何處て引罹り飯りを忘れて居るのたらうが

然うまて那乃河窪の娘は其後何處へ嵌られたか「鴛鴦と云ふ渾名のある婆アの事ゆゑ命函を去つと寢かせちやァ置めへが吾も少々土婆アに不義理な事が重つて居るゆで些とも敷居を跨ぱ爲無エが痛んでも娘と此土地から藝妓よなつたと云ふ事サ汝も餘つぽと迂闊ぢやァ無エか何程跡腹の惱ぬエ玉だと云て何處から何と云ふ藝妓よあつて居と云位は穿鑿をして置がいゝや其れやァ然と汝も是から心懸ると宜金儲の口があるが何と一口乗ら無エか「金儲げなら何事でも決して厭たァ云はねエから奈何いふ譚だか聞かしあせへ大きな聲ぢやァ云へ無エが曾て鹿田屋の乾兒よなり岩崎の旦那が手先よあつて御用を勤る汝だから儲けを分て云つて聞かせるが實は旦那の伯父よ當る津和野西休寺の住職敬典どやらが旦那へ何か意見をして邸の内にて祈禱中掛助と云ふ者が居から和尚を訪に來て當夜和尚を殺し國許を出奔！たが設江戸邸へでも出かけて來て餘計な事を饒舌時は旦那に勿論吾等まで何んぞ齟齬義よあるかも知れ無エ汝も所々を彷徨から設石州者と聞たなら穿鑿をして吾等の方へ直ぐよ報知よ來るがいゝ其年齢は恁々なり其容貌は云々と岩崎方より告げ來たり走仔細を語り囁きて萬一其奴を引捕へ强情張やァ擲き切つて跡腹腦め無エ樣よすりや旦那の方から帶

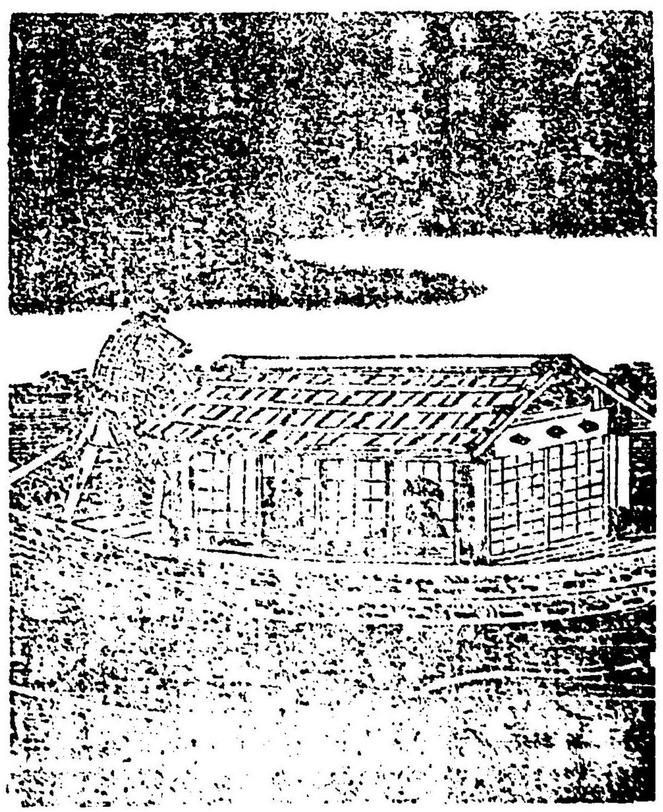
を誂た褒美の金が來のだから努ずぬからぬ樣よまろと云折柄に次の室から當樓の下婢が聲をかけ「勝平さん旦那は是かられ船で向島邊へ入らッしやいますから化前さんは先へれ邸へれ歸りあそつて毎もの樣よ賴むと仰まやいまさまた然うして是は志女吉さんから歸り途で煙草でもお買下さいと乃事ですと差出たしたる捻り紙の内は恒程か知らねども勝平ハ受取つて今夜も何うせ櫻田の浮上屋舗へは發束あからう茅町の浮中屋敷よ御泊込み親旦那へ其首は吾等がパつをしませうお光どん志女吉さんへ宜もうと猩々徳へ眼で知らせ兩人齊一身を起ち准備をあして歸ア行きし話題轉頭奥よいまた松倉秀雄は黄昏まて遊興あまて照る月を着よ船を泛べんと裏手に繫し家根船へ乗うつれパ送り出る兩人の藝妓は志女吉と今一人は小登代なるが志女吉は小登代の耳へ口を寄せつゝ何やら私語小登代パかりを船よ入れて左樣ならパと聲を舷頭は心得てもやいを解いて漕出しけり

其四十一

月もよし語も首尾をまつの湯槽上り行ア家根船の裡には秀雄が低聲よて偖は卿は河窪の息女登代よてありけるか然う承まいをパ何處やらよ見覺えのある樣なれと父丹下が江戸詰合

を申し附られ家族を纏めて出府したるは丁度十年跡なれバ確と熟知あし難し爾りながら先頃より石州生れと云ふ事は志女吉よりも聞きしかど果敢なく横死を遂げらるし孝太夫殿の娘とは知る事なけれバ今日までの無禮を許し玉へかし爾りながら卿れ猶く細母八爲めと家出をしたるは其れゞ繼母が厚き慈悲にて全く姦臣岩崎の謀み八底を探らんとの深き所存のありしならんが其事さへも成就せで渠が毒手と罹られしは今日志女吉が仲間より聞きしよつて始めて知れり孝太夫と云ひまた繼母まで盗賊不義の汚名を被ア剰さへ非命に死せしは之も前世の約束ならん幸ひと卿世と有命あるなれバ父母の怨をへらさて河羅の汚名を興すが肝要ぞや常表と放てい岩崎の野心ある風聞は曾て聞けど孰れも確証を得たるにあらぬバ容易と糺彈もなし難く然ると近時同僚たる伊東甚之助が擧動と不審の廉の多きのみか頻に肇へ

親密の往復ありと聞き込みしゆゑ志女吉に申含め渠が卿へ戀慕を奇貨周旋なして奥底を探らんものと存ぜゝあれど命にかけても甚之助に靡かぬ卿が決心なりと志女吉が吾への物語其れゆゑ質い今日卿を説諭のうへと云て甚之助へ周旋せんと青柳より聘きし折も恰好と吾仲間の勝平が岩崎よりの犬なりし事また卿が母公の最期駈勇とやらんが不慮の横死特と伯父を殺害せし勘助とやらが行方を索るまでの義と卿を句引せし猛々德事まで具と志女吉が立聞て吾へ云々と告げたるとを直ぐ引捕へて取糺さんと思ひはたれど熟



考するに高の知れたる仲間や下郎を押へて證據立せバ反て大事とありもやせん其れよりハ卿を說き色に事寄せ甚之助が肇に同意の奸計を探り出すこそ良策あらめと故と志女をバ寄柳に殘し大醉の体にて船を出ださせ卿へ說諭と思ひの外卿の口から素性を明さ御家に爲めに身を汚さ甚之助の意に隨がばんと先を越さたる其言詞は察する處志女吉より疾くにも委細を聞かれかしと問へバ小登代と顏をあげ茲に說き出譚は次回に

其四十二

お登代の小登代は聲を低うし「卑妾が身の經歷に亦も此營業にある始め志女吉さんを姐と頼み披露をしたる其時に實ハ恁々云々と眞個を明して姐さとへお願み申して貰ましたれど母が横死といふ事ハ露聊かも存じませぬゆゑ素性ばかりは誰殿にも努ず明して下さいますと諄々勸んで貰きましたが今日測らずも青柳に姐さんが立聞に詳細知れた家の騒動風聲に違はず岩崎が謀反の底を探究んと貞女を破り後を愛ひ卑妾へ苛く當り玉ひし母も敢き肇が爲めに御最期ありしうへからは卑妾も河崎の娘身を棄て岩崎へ荷擔の奴を探り出だし父母の汚名を雪んと心を定め志女吉さんに仔細を告げしに姐さんも實ハ旦那は今夜お前

に譯を賴むと仰しやつて遽に催す上手行他聞を憚る大事の話說をするのは船が屈竟と勸めに隨ひ愧かしい此身の素性をお明し申すも平生忠義は孝親子とは父が語てをりましたゆゑお絶り申まて母の仇岩崎肇が惡事の証據を取押へたあら父の仇も直ぐに知れるで御座りませう仍つては貴官の仰をまたず甚之助の心に隨がひ色で蔣し確なる証據を取つて見せませうと云へバ秀雄ハ大に欣び其れでこそ亡父母の汚名を雪ぐ良策あれ斯段々に岩崎の惡事露顯の緒端をひらけば軈て惡人誅に伏し御家の榮を見るは目前只岩崎ハ 先君 の御妹を貰ひうけ妻となし居る事なれバ疏忽の手向ひなき難き吾々親子また御後見人鳩翁公に御心勞なり卿が這回の機敏に首尾能伊東が所存を探らバ渠に一味の海野主計を俱に捕縛し糺問なきべし努ず油斷致されそと尙も囁き居たるうち船ハ疾くも向島なる植半の樓橋へ着けり小登代は秀雄を誘ひて先づ櫻上の坐敷に通り酒殽を命ずて再びまた酒宴を開き甚其の坐敷へ聞の襖を密と開けてやをら入來る船頭が祝儀の禮を述あがら前後を看返り語り出す仔細は抑も如何なる事か次回にくわしく說出やべし

其四十三

腰を屈めて入來りお松頭に兩掌を突き「お嘆もおきよ御座敷へ失禮よも參りましたは頂戴致した御祝儀の御禮代よ花兩人樣へ申し上度事があつて只討りよては御分知も御座りますまいが何をお包し申ませう私しも石州生れ而も濱邊の御城下盡頭に當日暮しの小百姓卯太郎と申す獨身者畑仕事の片手間よ植木師にもなりまをるゆえ今回御家老が御新築の彼御別館の人夫よあり出懸る筈て浮座りましたが生憎病氣よかゝつたゆゑ拒絶たのはいまて思へば私しが身乃大僥倖同じ植木師の彌之助は人夫となつて行し爲めと之をより當話其の二以下其の十四乃編までに記載せた細く彼の彌之助が御別館新築の普請小家を抜出だせし事を落度とし受負人鹿田屋忠五郎よ責殺されまた彌之助の亡靈が妹へ横死を告たる事同人の母おらくの死去岩崎が妹までにも其罪を科せんとする乃立腹ある事を傳へ聞き大坂なるおらくれ弟嘉作の許へ妹花辰を伴ひ行かんとする途札の辻よ於て駕を取進へ追ッかけ行し事由を語聞かせゞ小登代ハ傍より聲をかけて「成ほど其夜妾もまた駒勇よ誘はれ人眼を厭へゞ駕よ乘り渠が住居へ急がんと投蒐つたる札の辻野晒とかいふ惡漢が妾を奪ひ連れ行かんと駕を止めて乱暴涙藉竟よ妾と惡漢の手よ奪はれて今の身のうへ「其御樣子ハ船の中よて且

那樣への御物語を測らず聽いた此卯太郎當夜私が手よ入つたハ今も所持する此煙草入其まゝ拾つて駕を追ふたが何う行途を間違たやら更よ駕よは追ッ着かず散手がゝりもと煙草入を檢め見しよ裡にあつたる手束の宛名は確とハ知れねど今夜岩崎樣からの御頼よて例の娘を引攫へるから必ず吾が内へ來よ首尾能玉さへ手に入つたなら孰れ江戸まで擔き出し女郎よ賣てニッ山と認めありし一通ゆゑ再はおたつを連れて行くのを早くも知つて乃此手廻まか爾ずれゞ可憐や爰より遠き江戸まで往て苦勞をすへし私も一旦ハ乘りかゝつたる世話甲斐あり此まゝおたつよ逢はぬ時ハ深切でかし俱々よ勾引たるものであらうト疑はるゝも遺憾なれゞ非除力ハ及ばずともおたつを苦界へ沈めさせてハ死なれた兩人へ濟まぬ譯此手束の文言で見るときハ必ず江戸に居るであらうと例の娘とある文は鄙と知らねゞれたつの事と思ひ詰たる想像より大坂へも立寄らず直ぐ此江戸へ參りまたが奈何索ても更よ分らず聊か所有た貯への金さへ悉皆消ひ費ま只得口入の宿を頼み手馴た業の植木師へ暫時傭はれてをりましたうち柳橋の日野屋の内へ傭れた後宗旨違ひな此營業を致しまするも國よ居るころ暇さへあをゞ沖方へ漁よ出るのを好み船漕く業をゞ知つたる德爲れども索る其人よ遊

近ねば旦夕に心を勞してをりましたが先ごろ伊豆屋のお客とば高輪邊まで迎ひの仕事で永代橋をば下る折から雨はそてども影を射す月の光りに川中を看るとば正しく婦女の死骸に投と知れば棄置れず船を漕つけ腕をとり引揚げ見るに未た死んで間のない事か胸のほとりに暖まり乃ある容子ゆゑ直ぐ橋際へ船を着け同船夫を走らせ醫者を招き此時始めて婦女の顏をよく〳〵見ますればモシ索るおたつで御座りまたといふに秀雄も亡登代も駭き而て其れよりは如何せしかと兩人齊一問ひかけたる此段落は次回に說べ―

其四十四

登下卯太郎復道ふ樣「思ひがけぬきおたつの死骸に私も大喫驚百般介抱を致したゆゑ稍く正氣に復しましたので客の迎ひは同船大に頼み直ぐおたつを其最寄の知己の家に連て行て爾て仔細はと問ひましたに渠も測らぬ再會に嬉し涙に暮れながら語るを聞けば彼の驚ぎに卿樣と取違へて駒勇どのか宅へ連れ行き定めて私共が來るであらうと二日三日と禁められし折からおさくどのが來て河窪の後室樣は御家老の爲めに敢なく御最期を遂げられしと聞くに彌よ駭きし駒勇なりおさくどのは確に仇は岩崎樣と知れてはあれど下賤身で容易お

事も云へまいから是非とも卿を索出してと協議のうへおさくどのと俱に順禮姿となり西國筋から諸國を經巡り先ごろ稍々此東都へ上つた當日兩國にておさくどれを見まひ彷徨折から生醉れ武家に出逢つて既での事手討にならうとした處を美華お姐さんに救けられ其場は免して貰うたが西も東も知らぬ地にてれさくどのに離れし事ゆゑ是から向を何うしやうと案じ過ごした女氣から目途なき町を呻吟うち日い暮果て氣も鬱り事死ぬのが增しであらうと永代橋から飛び込んだと詳細樣子が知れまたゆゑおさくどのと云ふ卿乃浮家に仕た女中も此江戸に來てゐる事と分りましたが何分何處に居らるゝ事やら孫に卿か河窪のお孃樣にてありまとい今日承まはるまで私共も知らねばお話申しもせねどおたつどのは馬喰町の知己の許へ預けて置き專らおさくどのゝ所在をば索ていをれと今に知れず爾れど話せば一ッ國一ッ事件の紛れから自然と茲に參まつて來るのも全く岩崎樣の罪をば天の憎み玉ひ惡事露顯とかいふ事でありませう今にれさくどのゝ所在が知れたら久し振にて主家來の壺きぬ話說に松田樣の惡人退治に肝要おお手續きもありませうとおもふたあまり無遠慮にも此の浮坐敷へ參りましが罪にお免し下さりませと一伍一什を卯太郎が語ると聞い

て欣ぶ秀雄就中お登代はおさくの事を聞くに一層哀かしく殊にハ彌之助の妹と聞けバ是非とも逢ふて何くれと話問ひたき事もありと嬉し涙乃様子を見てとり秀雄は兩人ヨ打向ひ聞けバ聞く程御命なる其人々が江戸乃地へ聚り來るも御家を思ふ忠義の精神ヨよるなるべし是より船を兩國に歸し小登代ハ其おたつとやらヨ面會なして國の事情を聞き糺したうへ諸々も伊東の事を頼むなりと軈て同家を立ち出でゝ兩國投て下りけり話説復題近藤勘助ハ敢眞が遺命をうけ守靈を所持ス濱邊の城下を去り夜を日ヨ繼ぎて江戸表へ志投せしが道州路ヨ於て測らずも大病ヨ罹り身體自由あらざるのミかゞ語を發する事だヨ難く心惱れど死人も同然曠ス客舍に滯留なせしが翌月の下旬ヨ至り稍快方ヨ赴きまゆゐ道回は路傍ヨ斃るゝとも江戸の屋敷へ着するまでと一歩も脚を止むまじと心を決し程もなく東海道を下り〳〵品川近く名に響く鈴が森へと投かゝりしは夜の子刻ヨ近き頃あり此時森の屏所ヨてアレヨ〳〵と聲するハ正しく婦人の叫ぶなれバ合默行がじと勘助ハ思はず脚を止けり

其四十五

夜ハ更たれどさへ渡る月に四下を佶度看れバ海邊真近き數ヘ一個の婦人を押轉がし二三人

の暴漢が手把り脚把り今既に強姦おさんとずる体なれバ勘助ハ大ヨ駭き憎くき賊の舉動かな大事を抱ゆる身ヨてはあれども目前婦人が危急の場合打棄過るハ無慈悲の限りと思へバ少志も猶豫せず腰ヨ帶たる旅刀の柄ヨ手をかゞ逸散ヨ走り行きて壁高く涙雀者メと云ひながらスラリト拔いたる刀の光ヨ夢中ヨなつたる暴漢ハ仰天なきて捉たる婦人を手放ス遁出だせバ勘助ハ五六間追蒐け置く跡へ戻り乱れし姿をかいつくらふ婦人の傍へ立寄りく女中ヨ悪漢は追ひ斥けたり雖れども茲ヨ長居せバ又彼者等が大勢ヨく出繰て來んも測られず少しも早く余どゝもヨ家ある宿まで來たられよ此場の様子身のうへハ其うへ聞かんと急がし立つれば婦人ハ左右の辭さへ嬉し涙ヨかきくれながら勘助ハ跡に屬ひ軈て品川の驛ヘ入りしヨ子刻過ぎゆゑ各戸も起きたる氣色なけれども了得ハ五十三驛の筆はじめなる土地柄だけヨ茶賣酒屋ハ店をそしまばて開いてあるを幸ひと勘助は該家ヨ入り店の間乃奥の方ヨ旦座を占て婦人に向ひ余は至急の要を帶て江戸まで赴く者なるが卿の難儀を見かけしゆえ悉漢蹴は追ッ散し無難ヨ茲まで伴ふたり此末卿の行方まで送り屆けて進たけれど今いふ如き急ぎ旅身なれバ卿ハ茲ヨ夜明けを待ち其後出立するあそよけれ心焦く中にて問ふヨも及バ

ねど汗も卿は何國の人か看れば笈摺を被らるゝからい順禮よ廻るならんが如何なる事にて今夜の如き災難に遭ひしか語られよと甚と深切なる勘助の詞に婦人は涙を揮ひ命の親とも申すべき貨郎の事ゆゑ身の素性を藏まず お話致さませう 卑妾は石州濱田の城下駒勇[illegible]ア[illegible]

相撲取の妹よて名をバお作と稱者なるが少〻索る人の有て同じ土地の娘とゝもに西國路より諸々の海山を踰ゑ月日をかさね稍く今日東都へ着き母方の親族の者が兩國邊よありまそるゆゑ其れを便りに出懸げた道にて伴の娘を見失ひ甲處乙處と捜しまして も何處へ往たやら皆くれ知れず只得親族の其家よ落着たうへ

索んと其處まで行きしよ親族の者も今は江戸にいあらずまて稍みの綱も忽ち絶 途方に暮てをりまたを傍よ居た袈丁が姐さん誰かを捜すのかと尋られたよ力を得て實〻年齢云々の伴の娘を見失ふて當惑まますと語しに其娘なら先刻から此邊等を呻吟て居たが恰好吾等の仲間が見認め今其家へ連れて往たからマア安心をそるがよいと道いれて卑女も嬉さの中よも早う進

度と思ふ心を察してやら吾も是から其宅へ用事があつて出かけるのだからお前も一緒に來るがよい何うせ擔いて行く空駕に乘て行がうと深切な辞い巧計のある事と知らねば浮架と其駕へ乘つたは全く卑妾が油斷何方から何方を廻つたやら更よ知らねど夜よ入つて前刻の

所へ駕をおろすと信号と見ゐてまた一個悪漢が來て引捉へ伴の娘ゑ逢はせてやるから其禮心で二人の云ふ事を听けと押へつけ泣けど叫べど詮方も竟ゑ手込めゑ遭ひまする處を地獄で佛の貴郎の御救け此御禮は中々ゑ口では申し切れませぬ其につけても案ぜられるは伴の娘の身のうへゑて設悪漢ゑ欺かれ妾の樣な災難に遭ひはせぬかと今とありては吾身の上より彌ゑ案て心がゝりでなりませぬと道ふさへ聲を曇らせて唯ち歎けバ勘助は世ゑは不思議な事もある者何を藏さう余もまた卿と同ぢ石州濱邊仔細あつて近年は同ト國なる津和野ゑあゑと其駒勇ゑ事も知つて居るが然うして卿は本國を何時出立をせらをしかと尋ゑた作は國を立つたる時日を語れバ勘助は打點頭て復問ひ出す其趣きと此繪の譯は次回ゑ記さん

其四十六

勘助は復お作ゑ向ひ其頃出國したとのれバ兄公の藤蜘は知らずゑやと問へバお作は打駭き扨兄さんが死ゑましたとはと云へバ勘助點頭オ、喫驚は道理だ其仔細は箇樣〳〵其勘詐は云々ありと岩崎肇を討んとまて腮を遂けず横死をあし首級を野邊に暴されしまでは一伍一什を物語れバ餘りの事ゑ涙も出 です宛然魂抜けの如くなりしゃ勘助バ慰めて然うして卿が

索るといふ其人とまて如何ある者か包まず仔細を語られたなら不肖あから協力になつて倶々索てあげませうと道はれてお作い稍うゑ顔を仰げつゝ堰き來る涙を揮ひもあへず道へるやう其御深切あるお辭にあまへ申すも如何の爲あれど兄が横死を聞くうへい其實をお話申しまするとは是より河筌の家の事變お登代が行方探索の爲め諸國を巡る趣きを殿まず陳ぶれバ勘助も再は然うかと駭きて然うきくからは余が身を明して卿に語るべしと西休寺敷眞が現丹甥ハ岩崎の毒手に罹り最期を遂げたる事また其遺命ゑより密書を所持して江戸邸へ上る道遠州ゑて病氣ゑ罹りし頓末を低聲ながらも具に話し此うへハ卿も倶ゑ江戸邸へ赴き御役見たる鳩翁公か爾なくバ松倉丹下樣へ余が訴へ出ると同事ゑ河筌樣の冤の汚名を歎願なすこそ宜からめと德憑ゑお作い最と嬉しく伴の娘い今申す彌ク助と云ふ者の妹ゆゑ一同に居たなら欣びませうゑ行方しれねバ是非もあーと打歎るれバ勘助い其娘の事も御家老の松倉樣へ願つた後卿が索る河筌のお孃とゝもに捜索して聽て對面も出來るあるべし不案内なる土地の事ゆゑ且卿が落着先の出來たるうへゑて余もまた盡力なさんと頼もしき辭ゑ萬事を委ねる折から一番鷄のうたふ聲ゑ卒とバかりゑ勘助い茶價を與へ該家を立ち出て拂曉頃

所へ駕をおろすと信号と見ゐてまた一個惡漢が來て引捉へ伴の娘ゑ逢はせてやるから其禮心で三人の云ふ事を听けと押へつけ泣けど叫べど詮方も竟ゑ手込めゑ遭ひまする處を地獄で佛の貴郎の御救け此御禮は中々ゑ口では申し切れませぬ其につけても案ぜられるゑ伴の娘の身のうへゑて設惡漢ゑ欺かれ妾の樣な災難に遭ひはせぬかと今とありては吾身の上よう彌まさて心がゝりでなりませぬと道ふさへ聲を曇らせて咽ち歎けバ勘助は世ゑは不思議な事もある者何を藏さう余もまた卿と同志石州濱邊仔細あつて近年は同ト國なる津和野ゑあゑど其駒勇ゑ事も知つて居るが然うして卿は本國を何時出立をせらをしかと聞ゑた作は國を立つたる時日を詰れバ勘助は打點頭て復問ひ出す興趣きと此給の譯は次回ゑ記さん

其四十六

勘助は復お作ゑ向ひ其頃出國したとめれバ兄公の歸期は知らずゑやと問へバお作は打咳き兄さんが死ゑましたとはと云へバ勘助點頭オ、喫驚は道理だ其仔細は箇樣〳〵其勘詳は云々ありと岩崎肇を討んとまて望を遂けず憤死をあし首級を野邊に曝されしまでは一伍一什を物語れハ餘りの事ゑ涙も出ます宛然魂抜けの如くなりしゑ勘助バ慰めて然うして卿が

索るといふ其人とまた如何ある者か包まず仔細ゑ語られたなら不肖あから協力になつて倶々索てあげませうと道はれてお作い稍うゑ顔を仰げつゝ堰き來る涙を揮ひもあへず道へるやう其御深切あるお辭にあまへ申すも如何の譯あれど兄が横死を聞くうへい眞實をお話申しまするとは是より河窪の家の事變お登代が行方探索の爲め諸國を巡る趣きを殘まず陳ぶれバ勘助も再は然うかと駭きて然うきくからは余が身を明して卿に語るべしと西休寺殿其が現在甥ハ岩崎の毒手に罹り最期を遂げたる事また其遺命ゑより密書を所持して江戸邸へ上る道遠州ゑて病氣ゑ罹りし顛末を低聲ながらも具に話し此うへハ卿も倶ゑ江戸邸へ赴き御役見たる鳩翁公が爾なくバ松倉丹下樣へ余が訴へ出ると同事ゑ河窪樣の冤の汚名を歎願なすこそ宜からめと德憑ゑお作い最と嬉しく伴の娘い今申す彌ク助と云ふ者の妹ゆゑ一同に居たなら欣びませうゑ行方しれねバ是非もあーと打歎るれバ勘助い其娘の事も御家老の松倉樣へ願つた後卿が索る河窪のお嬢とゝもに搜索して聽て對面も出來るあるべし不案内なる土地の事ゆゑ且卿が落着先の出來たるうへゑて余もまた盡力なさんと頼もしき辭ゑ萬事を委ぬる折から一番鶏のうたふ聲ゑ卒とバかりゑ勘助い茶價を與へ該家を立ち出て拂曉頃

は西の久保なる上屋敷の邊へ着たりしがおさくれ勘助へ心注けていふやう江戸屋敷には鳩翁公を始め奉り松倉様といふ忠義の御方が御坐るなれど岩崎方の眼人にあるべき様には思はねど邪智には長しお國家老殿も一味の輩かありて貴郎の事を聞き知つて國へ内通する時は如何なる計謀をする

かも知れず迂濶に御屋敷へ推參よりは鳩翁公がお邸より御上屋敷への御越を待よて待受り直々に御駕へお願申す方が大丈夫だと思ますが貴郎に何んと思召そと云はれて勘兵衛と手をうち成るほど是は宜い處へ氣が注いた其意見に隨ひ鳩翁公へ直訴を爲やうと謀し合せ一通の書面を認め同翁が

其自邸より西の久保なる上屋敷へ參謁の途筋芝赤羽根の邊りよて轎戸よ向かひて竟に直訴をなたりなが鳩翁公ハ其の書面を披閲ありて扈從の士を招き何にやら下知を傳へられ勘助おさくの兩人を其の自邸へ連れ行かさせ他出を禁じ慥き嚮て上屋敷へ赴むかれ帰邸の翌日、腹心田邊又太郎を以て兩人を尋問さるる其趣きハ旦く捜給よ顯し次回よ分解するを聞べし

其四十七

却説田邊又太郎は鳩翁公の命を受け勘助お作ハ兩人を評定所の内室へ招き人拂ひのうへ直訴の趣意を糺せしに勘助は旦其身の素性を陳べ其より西林寺教眞の履歴を語り岩崎肇の爲めに横死の顛末其縊死せずして古主の安危を憂ハ勘助を聘きしを肇夫婦は是を知らず教眞よ毒藥を與へんとせしが誤つて庭前へ器を倒し草花枯凋みし事また教眞の遺命よより其場より逐電したるまでの有技有藥を上申またた昨夜鈴ヶ森よ於ておさくを扶け其素性を問き識りしゆゑ俱々直訴ふ及びし趣きを述べ訖り嚮て教眞より受取り來り一該守藥を指出だせばおさくは河窪家よ在し日の爭變より今日までの經歷を具よ言上ましたりしよゑ又太郎ハ遥一よ聘き取り是を筆記ま彼守藥の紐とく〳〵と把り出だしたる一通こそ石上川よて教眞が

拾ひ志密書と知られたる又太郎ハ讀度毎に旦憤ア旦歎し辭徐よ兩人へ道へる樣教眞法師が主家の爲めよ此密書を其方に手渡じずるまで冥目せず惡奸を欺かれまは了得に岩崎主殿殿の令弟おり其血統よてありながら君恩を忘却し國家を横領せんと謀る肇が所存ゑ惡むべきまた其方が能く主人の命を奉じ遼路を訴へ出でたるハ諄々も感心あり追て御沙汰のあるまでハ他人よ接するを禁じ外出を留めらるゝなれば暫らくのうち窮屈を耐て命を待つこそよけれ將さくとやらんも追つて尋問ふべき事もあれバ勘助と俱よ休息ずべき今申し立たる遂太夫の娘姪代の所在も猶御後見へ伺ひの後よ取計ひ信度捜索おし遣はすべしと仁恤も與きまた又太郎が辞よ兩個ハ歡ひの眉を開きて退出ま田邊の指圖ありたるか邸内の監察詰所へ兩人を入れ男女の事なれバとて夜ハ別室に臥さしめ最と鄭重よ待遇されたア感て又太郎ハ詩問の趣きを具よ鳩翁公へ上申し彼ハ密書を差出だせしよ不同公も大よ駭き玉ひ肇が所爲不審なりとは曾て丹下ど申し談玄居る事なれど斯る大事ど巧計べき者とハ今まで知らざりき此上は丹下ど協議を遂げ速かよ處分すべしと翌日上屋敷へ參られ別室よ於て丹下と密談數刻おりしが如何ある事よか至急の着手もあく荏苒日子を經過し居たり此時は是松倉秀雄が隙

てより伊東甚之助の心底を探らんと密に父丹下よも語り居たる折あれば丹下と此事を鳩翁公よ告げ頗くば伊東海野の兩人が惡事の種を聞き出だし是を捕へて証人ゑ備へ而ゑて率を捕縛そべ志其れまでは秀雄へも勘助れさく兩人の事を藏み置くあそ宜からめと兩氏の間よ決議ゑし爾るよても若殿れ御身氣遣しけをバとて彼用人上席荒木貢之助並河帯刀ハ兩人へ屈竟の部下三十名を陪屬せ志め幕府よりの命よより海岸防禦を名とし出立させたり恁る折なれバ勘助れさくへ其後何等の沙汰もなく日々の徒然を憂ひしよ既よ前号中にも記載せ志如く小登代乃お登代は卯太郎に案内せられて彌之助が妹れ辰にも面會なし國の動靜またおさくとゝもに諸國ゑ經歷て當地へ

來たりし一伍一仆を聞く人も語るも涙のみなるが此うへと俱々よおさくの所在ゑ索べしと互よ憂きを慰めて小登代ハ其ゑより松倉秀雄へ約せ志如く伊東ゑ密書いよ〳〵一個の密書を得る其赴きは繪様に讀ま次回へ續いて分解そべし

其四十八

有恁しかべ藝妓小登代は國の爲めまた家の爲め父母の耻辱を雪がんには身を捨てゝゑそ浮む瀬あらめと尊思を定め甚之助へ送り志文は心急よもあらぬ情をあまゝ〳〵と書認めたる事なれバ伊東は之を讀むよりも虚言ありとと爭か思ハむ毎よりも一際立派よ装飾りて兩國の茶亭に來

り早速小登代を聘きしよ此方も一層華美に粧ひ嬢て同亭よ赴きて毎よもわらぬ媚を呈し先つ頃よりかずあらぬ妾へ嬉しい仰せ有難過ぎて真面とも思へぬほどよて貴郎ハ意々測りかねしは聊ハ坐興の慰みものよあさるてあらうと故と強面中まは爲たれど和女吉姐さんへ細々と仰せのありまが眞個あれバ卑妾もしみ〳〵嬉しさ故お目よかゝつて御礼も申し此来どもに御情を蒙る所存で御座りまそから二世も三世も替らぬといよ御誓言を聞かせて下さい其が卑妾の願ひですよと身を寄り添ふて口說立つれバ甚之助の精神い宛然恍惚と成て暫を忘れ小登代の肩に掌とかけながら今さら已よ誓言とは餘りよ疑ぐり過るてあいか和女ゆゑなら命まで棄る覺期でゐる小可然し安心せぬとあらバ何んな誓言紙でも爲にまかせて認めやらん然うまて和女の望み何う迄や。卑妾が願ひの誓言い其樣な物では御座りませぬ貴郎の御身よ大切と思ふて御坐る品物を卑妾へお預け下さりませまた卑妾の方でも大切と思ふ品をい貴郎の方へお渡ま申まて置きますから別に是ぞと云ひませぬど貴郎が平生紙囊の裡を大切よあされますのが那の裏よい何品ら大切の品があると思へバ其れを預けて下さりませと道へバ伊東は打黙頭成るほど紙囊ハ裡よあるは最と大切の書類あり然し和女が持

つたりとく何の益よもならぬ品其れよりい小可が秘藏なたる此印籠ハ珊瑚ハ八分球。否々其んな品物では正可の時よ金よしやうと藝妓根性の卑しい盟ひと人に嗤笑をるゝ厭ですから卑妾の方に益はなくとも貴郎の爲めに大切な品をバ預けて下さいなと堅むは毎に紙囊ハ裡よ納し一通こそ仔細あらめと思ふよりの所望と知らぬバ甚之助は爾まて預けて呉よとあるあら預けいそれと大切の書類であれバ和女限り決して他見い無用なるどハア誓言よ預つた大切な品を他人よ見せる其樣な呆氣た卑妾でも御在ませんから安心して。如何樣其れも一理ゐり然うして和女が預ける品は。卑妾が盟は此守裡よは撮戸の觀音の像母の記念の雅鶴錦今日まで肌身を離しませぬど貴郎の心よ隨ふうへい云ハい本夫と思ふゆゑ卑妾よ代つて是からい貴郎が大切よ持つて下さい。成るほど甘て志女吉から聞いた和女が秘藏雅鶴錦の守囊とやら如何にも承知致した此うへはしつほりと枕列べて心の紐を解け始めた後百八品を盟代迄よ取替さん冬の夜短し疑て語らん誘どはかりよ手を把られ清も入り度心地なまどゝ早九分九厘手よ入り去密書を取得ぬ事ありては秀雄へ堅く保証ゝ辭も立たずと氣を取直し居所の羊れ其れならぬど思はぬ人よ誘はれ屏風の裡へ入りたるい最と悔む

べき事なから汗も河筋が横死彌之助が非業の死も固より登代が彌之介へ懸慕あせしよ起因し事よと今恁る惡漢の爲めよ身を汚がさるゝも全く志操の堅固あらざりしに報あるべし

其四十九

往古より英雄豪傑と稱さるゝものすら大事よ臨みて綜を誤るい多く女色の上にあれば況てや凡俗の徒の色海に惑溺するは枚擧そるよ遑あらず寔に慎むべし戒むべし再説伊東甚之助い其身門閥の家に生れて分外の秩祿を賜ひ何不足あき身にてありながら海野主計が海吾よ説伏せられ淺慮よも奸臣岩崎肇の逆謀よ同意し御後見鳩翁侯また忠臣松倉丹下を失くんと乃巧計より丹下の倅秀雄を連れ出し放蕩者此名を附し旦丹下に渠を勘當させんと乃所存なりしに反つて小登代が色香よ迷ひ海野と謀りし大事さへ放擲なして煩惱の犬武士となりたるゆゑ遂くも正義の松倉が敏き眼よ看破され小登代よ含めし計策の其色情よ精神奪はれ甘て岩崎肇より賴み來りし一通を堅く封ぜて懷中し上よは神秘の二字を記して天滿宮の守護札なりと云ひ騙せしを誓言代りよ疑ひもせて小登代よ渡し娘日の望を遂げたりし其嬉さに更聞まで酒を過ち再た枕よ就き前後も知らず臥したるが何やら騒がしき音の耳よ入り眼

を覺せば夜は頓よ明け日は既よ三尺を昇り只看れば松倉秀雄は捕縄掌に持ち立つてをりまた庭よは見なれぬ男が松倉の仲間勝平を縛し居たり伊東い綜の意外に駭き起きわがらんとそる處を秀雄は立寄り利腕把り逆臣岩崎へ同意の一個伊東甚之助を捕の爲め御後見乃命を受け松倉秀雄同ふたり尋常よ縄擢られよと道はれて胸旦打喋げと故と面よ憤怒を顯し通は心得ぬ捕方喚いり不肖なきとも伊東甚之助容易よ縄目の恥辱は受けじまた岩崎を逆臣とは一切不審の言狀かあと詰れば秀雄は呵々と打笑ひ此期よ迫び彼是と陳述立てこそ無益あれ爾りながら一應い惡事露顯の仔細を告げんと是より勘助おさくが出府し鳩翁侯へ訴へ出でし事また小登代は河筋孝太夫の娘にして志女吉〻謀合せ曾て伊東の必底を探らん爲め竟に肌を汚し神秘と云へる守護札を奪ひ之れを撿め岩崎よりの賴狀を手よ入れし事また松倉の下僕勝平は岩崎よりの間諜と知りたる事其他船頭卯太郎及び駒男乃妹お辰乃河合また猛々徳と勝平の物語を志女吉が洩れ聞きしより遂よ此の計策を施したる顛末を具に述ぶれど庭にありし見馴ぬ武士も伊東に向ひ吾ゐそ只今松倉様よりの話有し勘助なれ海野を始め江戸屋敷よある岩崎一味の人々は殘らず縛よ就きたれば只尋常よ縄をうけ上の沙汰とて待

おされと道ふ折から一室を出づる小登代も伊東へ密謀の底を探らん其爲めよ枕を伴し受取りたる一通は直ぐよ松倉へ手渡志なしさてこそ足下の悪事を知りたるなりと說き立つれば甚之助い今更よ返す辭もあらざれば竟に繩にそかゝりける恁て其連累一同は茅町の中屋敷へ繫ぎ置き追つては國許へ護送の手續きよ鳩翁侯丹下秀雄等へ此處分よ付協議を盡さ遠か國許へ向け岩崎を捕縛し奸賊の根を斷つべしと鳩翁侯自躬出立れ事に決し其準備等らなるよ付秀雄は一日小登代おさくお辰勘介卯太郎等を聚へ絶て久しき面會をさせ甲談乙論る其様狀はくたくしければ記さず恁て此人々も証人なるべとて鳩翁侯の一行とゝもよ國許へ發する事となり小登代の抱主へは松倉より充分の手當金を遣ゝ纏て江戸表を出立したるは文久三年十一月上旬の事なりき

其五十

話頭後題石州濱湊なる岩崎肇は妻花子と諜合せ津和野より近藤勘介を喚び寄せ伯父敬眞へ毒藥を服させ自滅させんとまたりしに其計策の當否い知らねど敬眞は樽上の邊に死んでをりまた勘介は何處へ行きしか影だよ見えず萬一毒藥を服ませーと知り訴人よ出でし事もや

と肇い心を勞すをとも花子い更よ怖るゝ色なく遣は我夫の御親賢よもあらぬ仰言かあ性悪痴鈍乃那の勘介何志よ然る心の注くべきかい行方知れすにあつたるは全く妾に吩咐られ數異坊へ服しめたる藥此爲めよ苦むを看て自分は郎君や妾へ對志分疏なさに逐電した分別なしの舉動なれば決して御心配よい及びますまいと云へど肇は易からず伯父が常々肌身を離さず吾へ諫めの証とせし密書の守囊のあらざるは設も伯父より渠に渡し江戸邸へ赴きしかも測られねば努々油斷はなをべからず此うへは中止志たる御殿の工事を取急ぎ終を一擧よ行ふべしまた江戸邸の動靜は海野主計へ探偵をべきと申し送らん且先ごろ内意と含め同地へ遣りし勝平は日今松倉の下僕となり居るなれば萬一鳩翁侯を始め松倉等が吾を疑ふ事あらば早速注進あす筈ゆゑ聞まで勞ずるほどよはあらねど蟻の穴より堤の壞れ倒忽とにハなき難しと了得奸智よ長たる岩崎俄頃よ鹿田屋忠五郎を呼び寄せ復度新御殿の工事よ取懸らせ曾て功司し架橋の機械を何かと協議なき以前よりい人數を數百人揃ゝ晝夜を分たず建築せ志が素より金よ糸目なき工事であれば斯ばかりの大事業あれど二月餘よして遂よ竣功なき たるゆゑ岩崎の欣ひ大方ならを其時までも心懸りなる彼の勘介の所在い知れねど江戸邸

なる同志の者より何等の動靜も報じ來さぬは別に異條のなかりしなるべし殊さは先ごろ海野より鳩翁松倉父子ともさ自滅させるは瞬間と申し來りし事さへあれば然まで勞する事もなし新殿落成のうへハ日を撰ひ富丸君を請ぜ術中に陷いれ味方に威かぬ奴原ハ即坐に命を斷たんと數心同志の輩を聚へ凝ての合謀を定めたが茲に一ッの故障といふと此ほど幕府より海岸防禦の爲め出張したる荒木寅之助並河帶刀の兩人が日々富丸君の御機嫌窺ひとして伺候あるそあそ油斷ならざるものなれバ旦當日ハ兩人を避けしむるの計策を施こさんと偖も惡事を談合あた同志の者ハ退出したり偖其中に彼の鹿田屋忠五郎と同人の乾オ熊藏の兩人ロ這回新築落成の功を賞志物とらするとて留め置き嬶て舉夫婦が躬給仕し嘉肴珍味の饗應をなた全く我大望の成就あさんとするも其方等功の莫大あれバ子々孫々に至るまで此恩は忘却すまゑと甘言辭を兩人ハ其個と思へバ打歡びしたゝか酒食をあたる折から聊かながらと夫婦より褒美なりとて差出だせし黄金の包を彌よ目はくれ連よ夫婦に謝辭を述べ誘能らんと忠五郎ハ該金包を押戴きたゝ這は幸も如何に苦と叫ひて夥たしく血を吐き倒を苦しむ其形狀を看るよりも駭き惑ふ熊藏も忽ち五臟惱乱して同じく腹をわげながら吐血ず

る事忠五郎ハ同じ仝七頭八倒苦しを廻り虚空を摑み死したるは惡事ハ與たて其惡人の毒手ハ羅り空まく死ず吁是天罰と謂まくのみ兩個の死骸を瞥りと看て花子はホゝと打頷ゑみ小賢しうても了得は町人思ひの外あ脆い奴吾夫是でまづ一ッの憂の雲ハ攘ひましたと道へバ肇も打點頭乘多乃者に乾盃とかまた元締とか稱さるゝ忠五郎ゆゑ大事をバ口外するとは思はねと下郎と口八善惡あしと卑俗ハ申す大事の前の小事と思へバ憫惱ゑがら斯してしまへバ旦安心此外工事ハ掛りし者と若殿御遊覽の濟までハ宅へ歸さず城内へ一個も殘らず留めぬきたれバ工事乃秘密は知る者あしイデ此うへは日を下し富丸殿を鈎出ださんアナ心地ハや嬉しやと夫婦迭ハ嘯き居たるは大惡無道の男女なりき

其五十一

單表岩崎肇の郎ハ養育るゝ少年の男女あり這ハ同藩興津邊外記と云へる者の遺子ハきて兄ハ道太郎と稱び十五歳あり妹の名は妙と云ひ當年十四なり俱ハ其性怜悧なる上君ハ仕奉るハ忠を以し友ハ交際に義を以てするの道を辨へ父外記が病死の後ハ母方の緣故ハより岩崎の郎に引き取られ教育をうけ居たるが曾て肇夫婦の擧動ハ不審ぬ事もあるあれど敢教えく

も幼年ゆゑ奈何なる事とも心注ざりしよ妙女い今日しも忠五郎熊藏の兩人が毒殺されし遠を聽疑志より其駭きは大方ならず开も何ゆえよ此漢を斯る慘酷なる成敗ありしなるかを痛く動靜を伺ひて始めて知りし逆意の頭來胸潰るゝまで仰天の思ひい同じ道太郎も今日大勢の集會は何何ある事か聽かまほしと給仕よ出でゝ其れとなく親ひ知りし新御殿の巧も深き池の面に架けたる橋よて富丸君を弑し奉らん協議あるよそ這ハ易からぬ御大事早速上へ注進せんと惴の心をまわ倩々思ひ顧せば此事を訴人なしたる其時は岩崎夫婦は忽ちに重き罪刑に擢るあるべき爾ありし後い世の人がアレ見よ興津藏道太郎い恩人夫婦を訴人えて手柄顔よ誇居るい小面の憎き少年かな訴へずともまだ外よ思慮あるべきよと後指さゝるもまたなどかしく父が御病死ありしない生の親よも優たる大恩人の岩崎夫婦如何よ御上の大事あんとて吾口より出て罪人に落そは義理を思はぬ仕方只あつて此まゝ捨置ときは御上の御身る係いる大事左よも右よも忠義を立て双方全たき事を計るは命を棄つるの外はあらずと稍くよ逆心なし快々として吾部屋よ皈れば妹は茲よありて兄が物憂き顏色を看るより其と推せしか膝下を辷ひ膝を寄せ毎よ變りし御容子い設や尊兄も今日の密議を「偖は御身も聽き

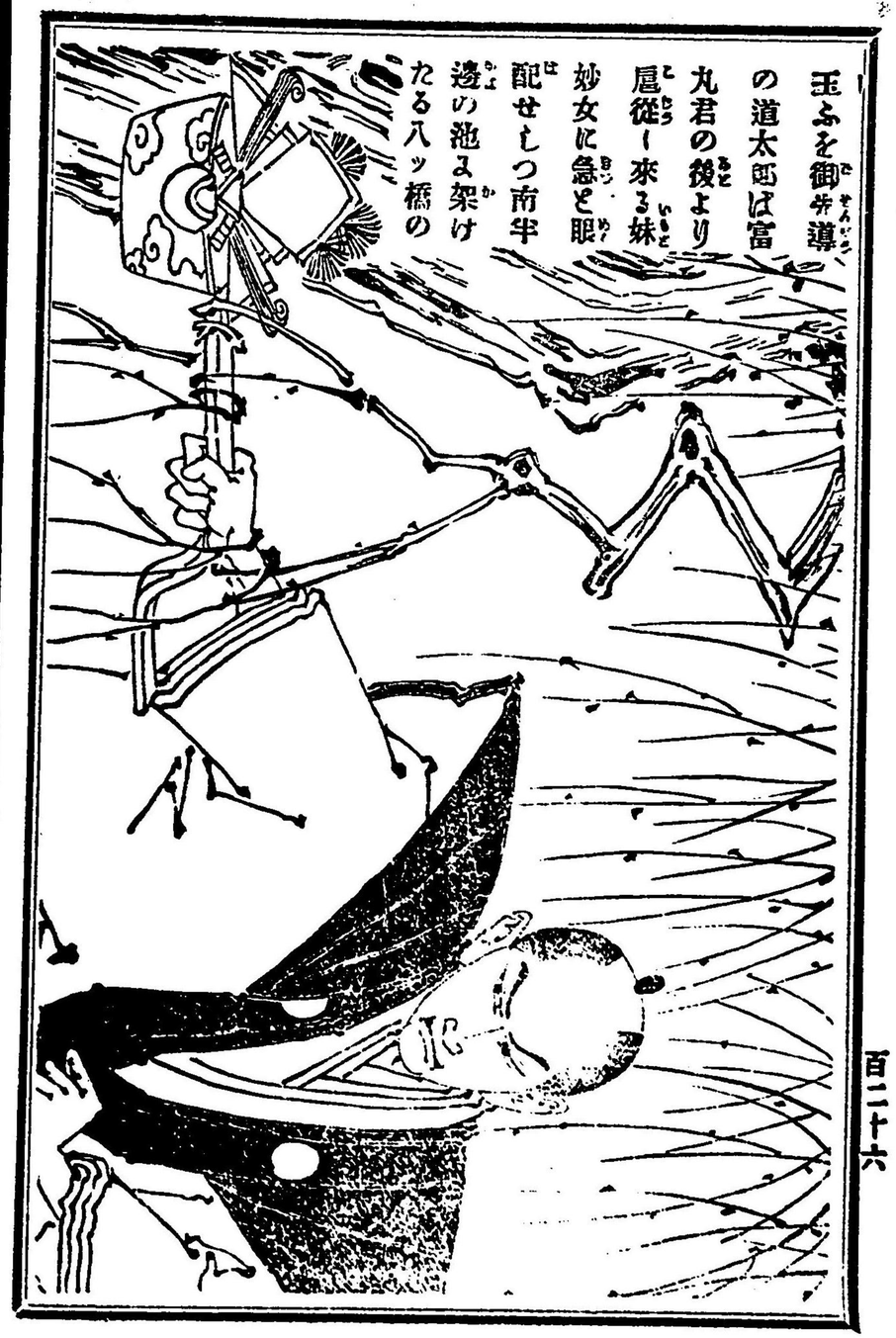
き聽ずしか喫驚入つたる逆意の遂一只歎息の外はおし慥まて謀みし事あれば倒幼年の吾尊如きが諫言をすとも今更よ思ひ止まる人にもあら玄爾れバとて訴人して恩ある夫婦よ罪を被せんは素より快よからぬ業なり特にい父が御遺言よ吾が亡後は岩崎を父と思ふて仕へよと仰せい耳朶に存りあれバ何條訴へ出でふるべき只あつて默して止む時い上の御身の大事ゆえ忠義を立つるは一命を棄つるに却かずと愛期い極めぬ爾い生存父母は勿論吾亡跡を出はれよと道ひつゝ膝よはと〳〵と落る涙の餘妙女は驚を壓らしながら今日まで知らぬ御夫婦が世よ恐ろしき大惡黨濱邊の家の礎とも云はるゝ御身でありながら其く淺ましき企謀は全く天魔入魅入しなるべし妾も前兩個のを毒殺ありし動靜を見て直ぐよお嫁言申さんと思ひはたれど愁ひよ大事を聽りまど尊兄の身よまで及ぶ義此ありもやせんかと思ひかへして來る廊下でまたも聽いたる惡事の遂一所詮諫めを容るゝどもれ採用あるとい思いねバ妾も死する愛期なれど其死するよも犬死と云はれぬやうよ忠義が立たく聊か浮む妾が計策尊兄のお氣よは協ふまじきが野夫よも功の者とか云へバ聽容れ給へと深よき妹が辭に頼太郎は能くおそ愛期を致れたを爾も然まて此決心なれは吾い聽れる要とてあ之面て其

浮み〳〵計策とい如何なる事かと問ひかくれば妙女い尙も膝ずり寄せ何か秘密呟きに道太郎い打點頭れそ眞個ょ耳策なり努ず油斷したまふなと蹀し合し〳〵計策は所もまた如何なる事やらん後ょ至らい自然知るへき

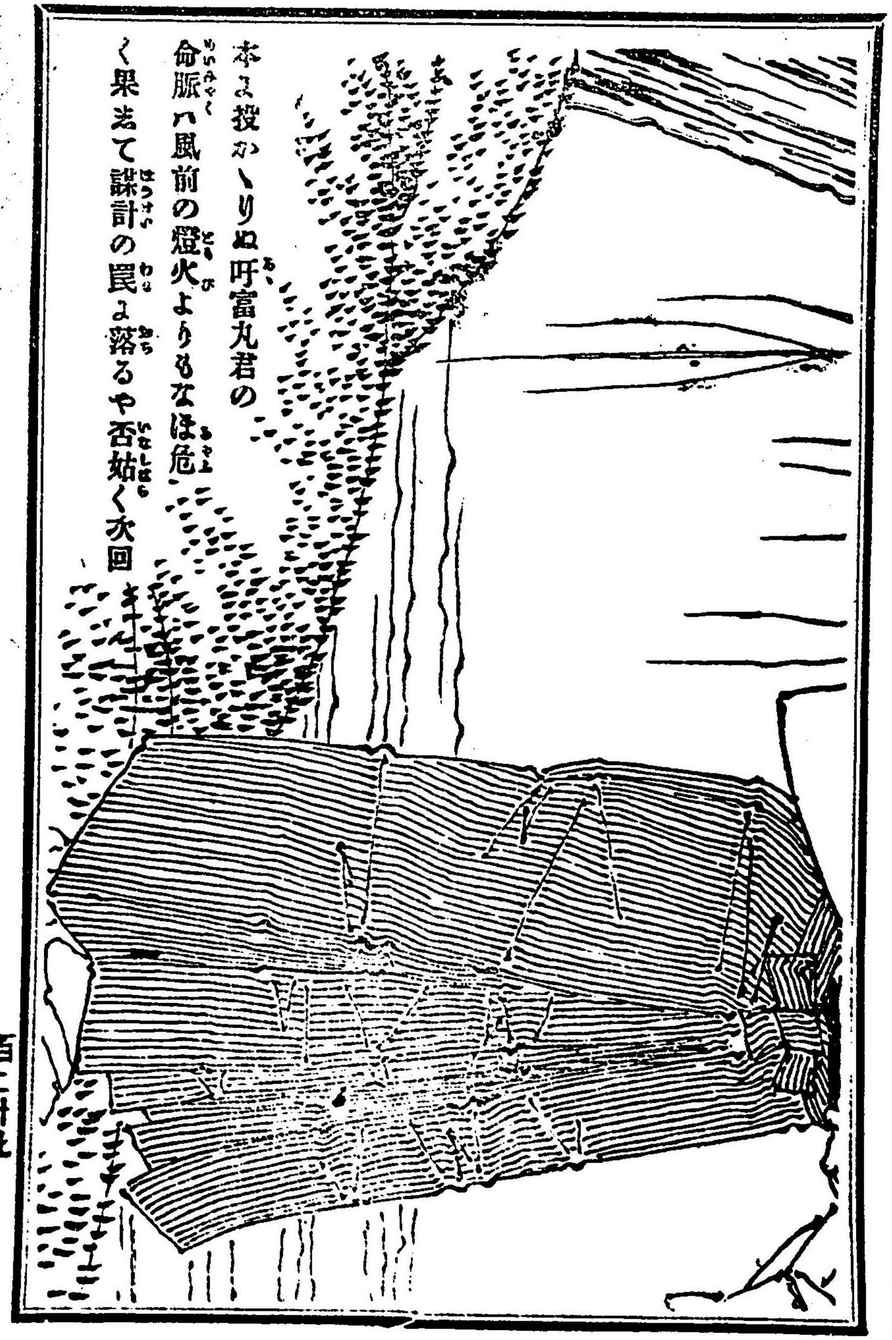
其五十二

爾る程ょ岩崎肇は濱邊なる新御殿苑囿ともょ工事落成の趣きを言上き來る十五日を以て富丸君の親臨を乞ひたりけり抑も此新殿の建造爲体を配さんょ先南半邊ょ大なる池を穿り其四圍ょは畫く奇花異草を栽また該池にい八ッ橋を架け池ょ沿てい樹條も長堤を築き堤上ょは百歩ょ一亭五十歩ょ一舍あり兩邊ょい花未だ咲かねど挑櫻梅柳の類列び樹池中ょ蕩漾ふ小船は龍舟鳳舸とも見ゆべき風のまよ〳〵左行き右行きそろうちを夥の鴛鴦の相戲ふれて趁ょ似たり北半邊ょい一彎を穿りて海水を之ょ注ぎ入れ灣中ょ築立し山い蓬萊ょ擬へ擬倣きたり機臺は危ふきまで峻く登れば海外をも望むべく思はれたり偖南北の仲間ょ大殿を造り其苑墻は瓦い輝耀きて瑠璃をて葺けるかと訝り壁は質密ょて紫膠もて泥しかと疑がいる庭園ょ疊層ねたる怪石い嶙〻峋〻として見る眼も最と奇く蓬舍ょ結搆たる奇材異料

は其狀一帶の錦繡を曝し萬の物一として善ならざるいなく美ならざるはなし實ょ仙界も斯やあらんと觀客眼を驚かし聞者耳を聾ざるはあき斯る宏大壯盛なる新殿を建築し數万圓の金を浪費したるは這回の大望成就の後己が別館とあさん肇が所存ありき此工事中曾ても記せし八ッ橋の第三枚目に機械をなー富丸君が橋上ょ歩を進められし時橋下より土堤の中へ傳はりし針銅を引くときい忽ち機械の螺旋脫けて主は池中へ陷入るなと此以前に池中此上邊より毒水を流し落たる人の一口よても其水の咽喉ょ入れば即坐に命を斷つ俗にいふ雨天秤の謀畧なれば富丸君の陷入られしを見て救はんとして飛入し者乃ありとても所詮助かるやうもあき深き巧計と知られたり恁て當日は彼江戸邸より來たり〻荒木並河の兩人を避けきめん爲め遽に海岸ょ於て大砲試發の命を傳へ兩人い同場へ臨むべしと令を發ま〻かど荒木一人同地に向へど並河は富丸君の下知よて當日の供奉ょ列したり嬉て辰の刻わ本丸を御出門ありて程なく新御殿へ着賀ありきかば肇夫婦い御門前ょ於て奉迎し御先導は奥津邊道太郎なり正殿に於て暫時休憩ありて卒聞及ぶ物數奇の肇が吩咐の芽園の体をば觀物すべしと座を起ち玉まひ深き計謀ありきとは神ならぬ身乃知べうもわらねば徐々苑囿ょ出て



玉ふを御先導の道太郎は富丸君の後より扈從し來る妹妙女に急と眼配せしつ南半邊の池よ架けたる八ッ橋の



本よ投かゝりぬ吁富丸君の命脈ハ風前の燈火よりもなほ危く果ては謀計の罠よ落るや否姑く次回

の分解を竢つべし話頭轉題岩崎は富丸君が苑囿に臨まれしを看るより環て淮圃の毒水を長柄の銚子の裡ゑ入れ手ゑ携へて北邊りの枯柳の下ゑ樹がくれしながら今や池中へ毒水を流さんとする此時怪しやさつと吹來る一陣の風は忽ち身ゑ染みわたり五體ずゝみて働き得ず是は如何ゑと思ふ折から柳の邊へ朦朧と立顯れし異形の姿ゑ了得の肇も愕然して只茫然たるばかりなり

其五十三

綽の奇怪ゑ岩崎は吾ゑもあらで銚子を持ちし其手を看れば這い什生に何の程ゑか枯柳の枝より垂れたる糸が利腕の部を睨と結んでをり彌ゑ不思議と思ふ折から宛も痩かれたる聲音にくアナ嬉しや奸賊の謀計も最早是をまてあるよろこばゑやと云ふかと思へばまた呵々と打笑ふて眼前に立顯はをし異形の姿は消て跡なく朦朧たる影さへ見えずなつたるが此時肇い全くの正氣ゑ復せば憤然とまて岩崎肇とも云はるゝ武士が妖怪變化か障碍の爲めに大事を怠り什損じてい末代までの笑種あり非險障碍をあさばあぜ开も何程の事かい有んと云つゝ銚子の毒水を池中へ流し遷さんとずるに銚子の中ゑい一滴の水だゑあく恰も拭ひとりた

如くなれば肇も復唐駭きしが急度心を取り直しまた宝ゑ入り毒水を調合なして居たりけり爾る程ゑ富丸君い道太郎ゑ導かれ玉ひ徐々苑囿ゑ出て玉へば御背後よりい道太郎の妹妙女並河帶刀が附添參らせ道太郎は苑囿の裡なる築山ゑ指さを那れとそい蓬萊、方丈、瀛洲とて彼の海中ハ三神山ゑ擬へたるものゑて候ふなれ此池の面は往昔ハ三河國にありと聞きを在吾の君がから衣きつゝ馴ゑしと詠み玉ひし八ッ橋の奇跡を模して候ふ开も此工事い牡若の盛りの候に工を竣へあば草花の御眺も一層あるべしと肇も心を勞したる趣きゑ候へども工事の者ゑ絲障ありて暫時中止をあをたるゆゑ意外ゑ落成遲々なして暖國なからも冬あれば池ハ而ゑ群れ遊ぶ鴛鴦の外ゑい早咲ハ茶山花牡丹の眺めのみ開れども今日い空晴れて小春日和の海の面遠き帆船近き漁船之れ等を御覽はまた興あり苑囿の御遊は是ほでゑをて正殿の樓客へ成らせ玉へと申しあぐれば妙女も傍よりと只今道太郎が言上奉りし如く庭の面をい御歩行よりは樓ゑ登りて海上を御眺望遊ばさるゝあそ御一興ならめと勧め申すい八ッ橋を渡らせ玉はぬやうと兩人が禁むる胸を識り玉はねば富丸君い點頭玉ひ如何さま今日の好天氣ゑ海面の眺望も一層なるべき爾をども肇が心を勞しゝ此八ッ橋を渡らずてい何やら遺憾

き心地せらる余は在吾の中將の如き豪人ならねど此まゝ席を轉んは無風雅なり本渡るべし道太郎案内をせよと曰ふまゝ奥津邊はいつと讃り今い応を決志つゝ共身は先前に立ち次ま妹の妙を歩行せ其れより一間計りを離きて富丸君が歩をすゝめ玉ふ如くあ志土堤より架し第一枚目の橋の袂へ投かゝり〻ま他人の眼にい注かねども怪しや側の燈籠の下に据たる巖石い忽ち人の形と變玄富丸君ま打向ひ頻ま首を掉る体あれど帯刀い勿論道太郎兄弟の眼まも注かず一個富丸君ハ眼ま注ま

り〻ゆゑ素より柔弱なる性なれバ打駭きて苦と云ひつゝ兩の袖ま て眼を掩ひ行途をとゞまり立ち玉ひぬ

其五十四

他眼ま毫も見ねねども唯富丸君一個まは橋の袂の巖石が人の形と變

じつゝ頷を掉りく行先を止むる御くま思はるれば富丸君は歩を駐めて袖將て顔を掩ひ玉ふを動靜知らねバ帯刀い君には如何遊バされまかと問へバ稍く掩ふたる袖をかい除け四下を看玉ひ余い性得蛙を忌み書けるものだま厭ふあるが那れ看ま橋の袂ゑる石の形ちの自然ら蛙の姿ま見ねたるゆゑ思いず顔を掩ひしあり氣分も最ど惡けれバ庭面の散歩は後ま志て道太郎の云へるま順ひ樓ま昇りて休憩すべしと

睡を轉し玉ふ折から嚮導進らせし奥津邊兄妹ま橋の二枚目まあたしが今富丸君の引返し玉ふを視て兄ゝ妹ま道へるやう妙女ヨ君は御安泰ま樓ま

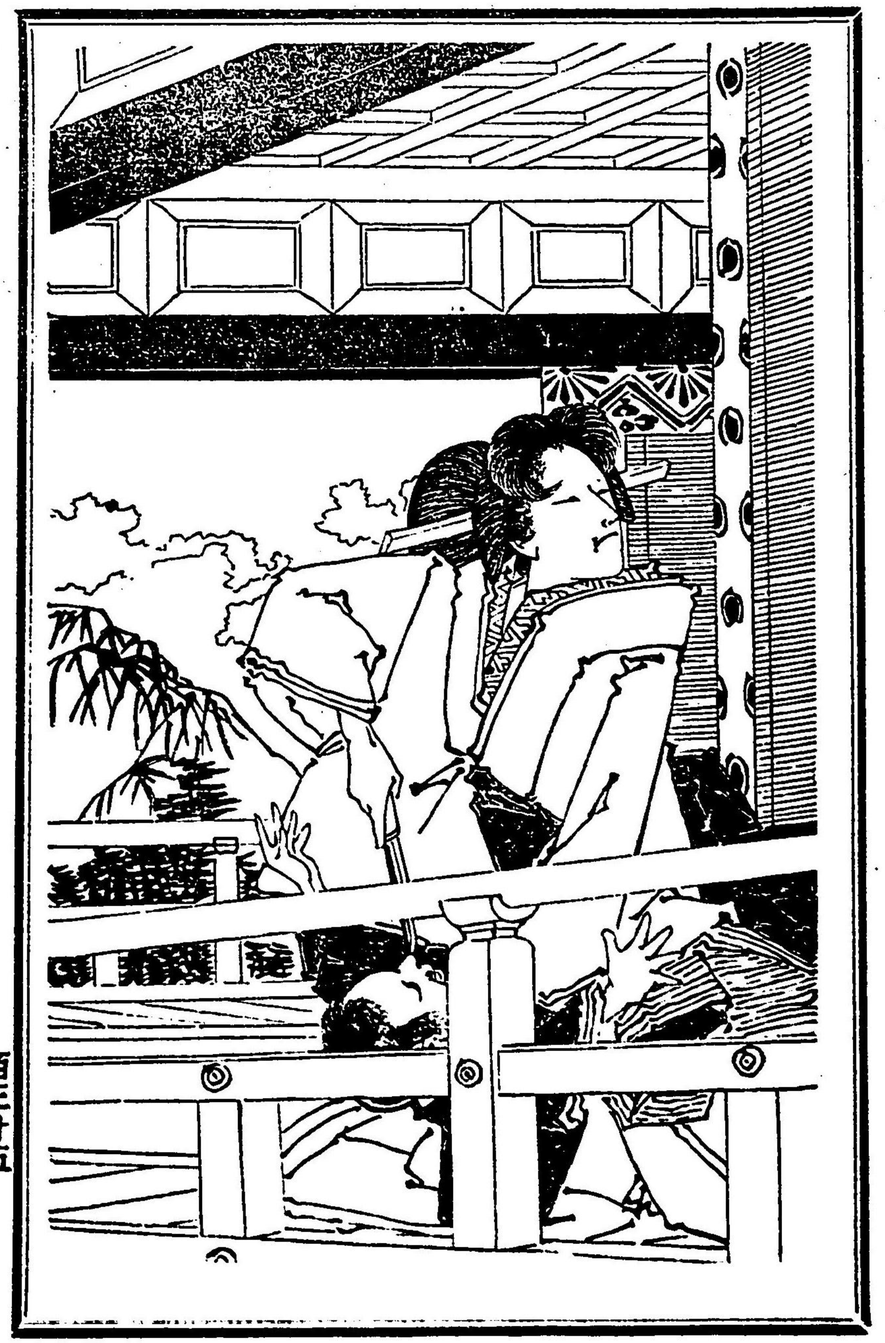
向はや玉ふなれバ非除他策のあるとても帯刀殿が扈従を率り守護なすからハ氣遣なし只怠念ぢきは此橋なり今や我々兄妹が忠義の爲めゝ命を賭ち後代患を攘くべし覺期をせよと云ひながら空と駈け行きて遙て聞く第三枚目なる橋板の裏なる樞を抜けバ過たず機械ノ橋ハ中央より折れて兩個ハ池の中へ水音高く陷入つたり此時彼の鋭叫に慰れく機械の針鋼を引かんと待ち搆へたる徒黨の漢ハ此爲体に打ち駭く思ひは同玄岩崎肇も迫彼方の樹陰ゝ動靜如何ゝと窺ひをりしゝ目的せし人は陷もせで奥津邊兄妹が樞る鋼し自躬池中へ投じしゆゑ茫仰天も啻ならず偖ハ疾ゝも兄妹は吾が大望を洩れ聞きて恁る賦碍をあしたるか憎さも憐ぢと怒氣憤懣吾れを忘とて向ふの方より橋を渡りて四枚目の中央方りへ來たりしが哀れむべし兄妹ハ池中ゝ陷て計略の毒を含みー事あれバ水底ゝて煩悶し忽ち顔色變玄つゝ瞬間ゝ絶命し死骸は稍く波に浮みぬ恁變事に富丸君の御駭きより帯刀は偖ゝそ子細ゝわる別動油斷ならずと富丸君の御手を把つて守護あしつゝ側の石へ投つけゝ火燕れ仕掛けハ忽ちゝ轟と音して焔々と立登りたる信號の狼火スハ殿様の御身の上氣遣しきそと門前に窺ひたる荒木を始め江戸表より差遣されし人數は一同ゝ苑園の邊へ最と厳重ゝ戸列んだり東道肇

は謀略の仕損じたるを遺憾ゝ思へど故と素知らぬ顔色にて彼前最近く兩掌を突き少年輩が測らぬ疎忽に彼興を覺す耳ならず見苦しき体を彼覽ゝ入れ恐縮の外ハ彼座おく候ふ卒寛典の彼沙汰ありて席を更め樓上ゝ於て彼休憩の程を願奉まつるゾレ黒川生彼執成をと巧計れ露顯も苦ゝせぬ丈夫爾れども黒川は油斷おく君の彼意を窺ひしに富丸君も先刻より深く恐怖を懷き玉へバ今日は此まゝ歸城そべしと仰の下より黒川が彼供揃と令するゝそ彼の屈強の壯士們が護衛し奉り城内へ行列速く歸らせ玉へバ肇夫婦ハ宛然に掌中乃球を取られし心地すれど只得門前まで奉送し快々とて席ゝ皈れバ今日聚りし一眛の者は孰れも粉悍ぢく身准備おし駈出ださんとする体おるゆゑ遁は各君ゝは何事なるかと問へバ一同聲を揃へ何事なるかとは家老れ辞バとも覺ゑず謀計露顯なしたるうへば追かけて富丸を刺殺し手向ふ奴們切つて棄て辞を一擧ゝ決すべき遲々する時ては彼座るまいと血氣ゝ惱るを岩崎ハまづ姑くと押禁めぢ後の話説ハ次回へ記さん

其五十五

壯士の惱るを押禁めて肇は徐ゝ道へるやう今日の巧計の蕎餅屋しは奥津邊兄妹が小賢ゝ撃

動よよればあり爾れども此後富丸を亡ふ計謀は何程もあれば今嚴重よ守護なし歸るを追蹤々行きて暴擊よ及ぶは最も策の得たるものよあらず努々惱る處よあらず不肖ながらも肇の指令を御待あれと自若たる辭よ壯士も踏出す脚を止まりし後類を合せ閑談數刻あしたるうへ各々自邸へ立歸りぬ恁て翌日岩崎肇は前日の挨拶を申しあげんと已の刻頃登城あしゝよ富丸君の拜謁を賜ひ別殿の工事お就てい一層の心勞過分なりと挨拶ありしかば肇は面目身よ餘り有難き旨を汚受し必の理よ思ふやう恁る上意のある眼りい八ッ橋の密謀心注きしにはあらざるべし奥津邊兄妹の横死は全く過ちと思ふあらん首尾よかりきと欣ひて挨拶を下り長廊下を四五間計り來りし折から思ひがけなき左右の襖を押披け突と立顯れし兩人の壯士い岩崎が前後を圍み聲をかけ。岩崎肇へば糺問の筋あり政廳の調所まで參るべしとの上意也と道ば壹個は聲を亞き拒み立てして順はすば繩かけ來よと乃嚴命あるぞと不意よ出でたる体爲に肇も偖はと駭きしが毫も怖るゝ色いなく上意とあれば謹んで何處へありとも參らんが當國八藩士中よ見馴ぬ顏の足下衆斯る場席へ進入したるい上士以上の者なるべし夫共中士の身分の者か且姓名を聞かざれば同道致す筋はなきと進はれて兩人は打點頭ひ廣



脚最近く來りし余僧殊には未だ一面識だに致しゝ事なき岩崎肇疑惑は左あそ有べけれ余は江戸邸定府れ士大久保行之助の子息愼一郎小山伊織の長男伴左衛門なりと聞くより肇は心よ駭き大久保小山兩人は鳩翁侯の肱股の臣よて曾て本家より八附添人なるが如何なゝ事にて毎の程歸國志たるか訝しやと思へど此場で問ひもならねば胸を定めて兩人とゝもよ紀所へとともまた今更よ詮なければ道太郎兄妹の死を憫みいせて太く懸み死體を路外へ棄させて切の腹を愈しゝと思ひ居たるは寔よ淺間しき極なれど誰とて諫る者なかりき折から肇の伴あして登城あしたる仲間が遽だしく立歸りて旦那樣よは今日陽登城の上殿樣への陽拜謁濟み御退殿の砌陽尋問の筋ありとて其まゝ調所へ御廻しとなり只今繩よかゝり玉ひしよし又鉄徒士の衆一同も揚屋へ入れられ我々耳い搏ゐしと申し渡されたるが承まはる處よてと江戸表より御後見鳩翁樣が昨夜御入國ありて何か御糺問がはじまるとの事よて昨日新御殿へ御給仕陽手傳よ御臨なりし方々は追々繩よかゝり御城内へ引致よありましたゆゑ急ぎ此段御注進を仕つります尚も旦那樣の御身の御動靜聞き糺して參るべしと云ひ捨て引返しゝゆ

ゑ花子は駭き一方ならず偖あそ惡事は露顯したれ特よと鳩翁侯が密の入國今朝よ到つて不意よ着手ゐしたるからは充分手廻ーあつたる事よて最早免る道はわら玄此うへは繩目の恥辱をうけんより妾も左近將監の妹なり郁之助を刺殺志潔よく自害をせんと覚て覚期をゐまだるよか幼兒を抱きて樓よ登るよ拔は佛室に辯ひありて楷子を外せば他の人の昇るべき樣もあらず花子は嬰て佛室に向ひ回向をゐまて准備の短刀片手に持ち郁之助を膝の邊へ坐せく顔つれ〳〵と瞰遣りゐながら涙に曇る眼をしばたゝきて开も何事を云ひ問かすか次ゐる回を看て知らん

其五十六

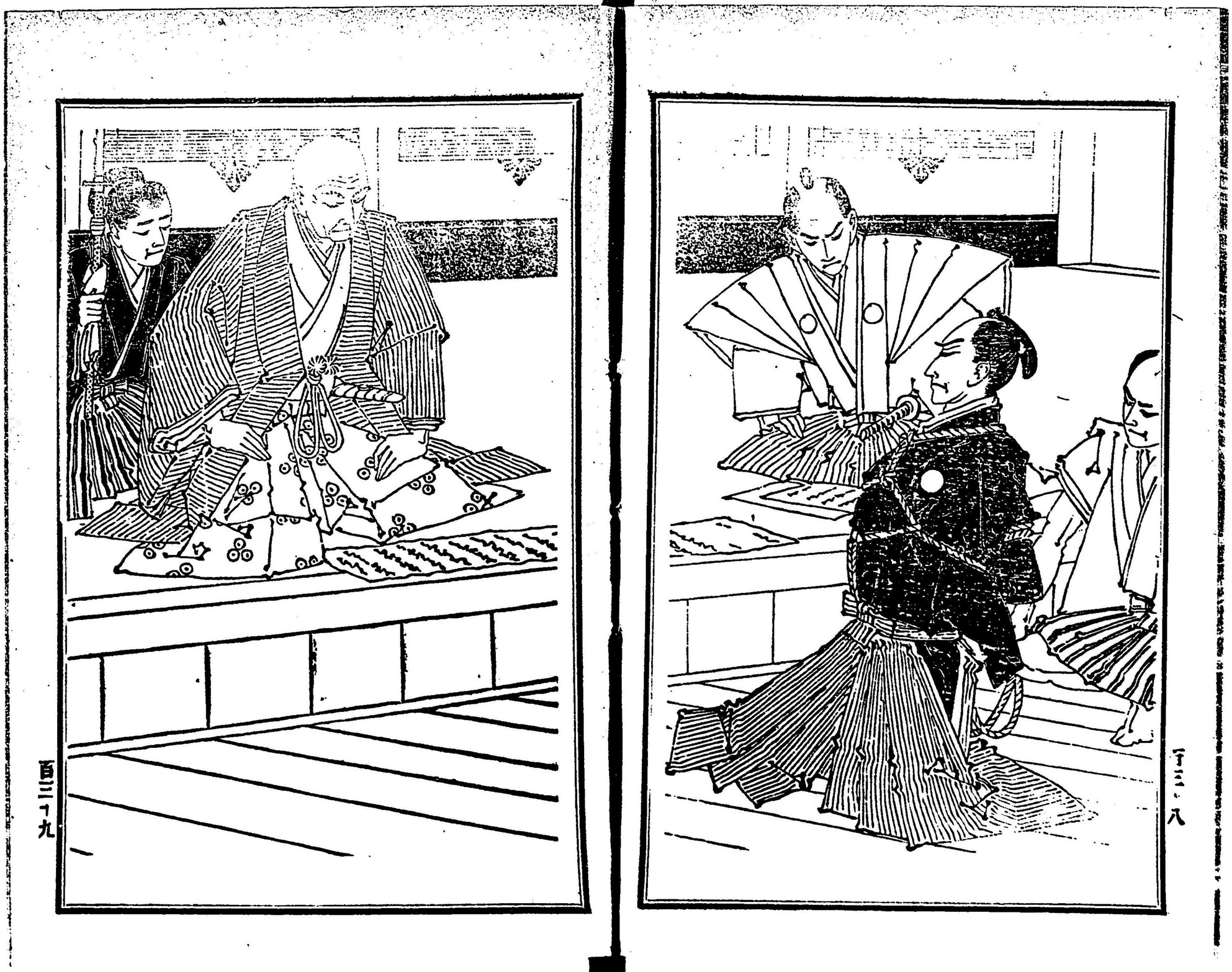
登時花子は郁之助の顔打瞰遣り涙ながら。爾い正しく前の演邊の城主左近將監殿の甥どと生ながら從弟同士ある富丸の臣下とあさんは朽惜しく何卒演邊の家名をば相納させんと思ふより父公とゝもに富丸を滅はんとまゝ謀計も遂に露顯となりたるあり素より幼稚の郁の富丸是まで殺害せるの機は度々なれど變死させてい家中の疑惑反て爾の代とあつて二心を懷く者あらんと其れや是やを思ひ過志新に造りし別殿の池よ架したる八ッ橋の毀けて死し

聞最近く來りし余齊殊には未だ一面識だに致しゝ事あき岩崎肇疑惑は左あと有べけれ余は江戸邸定府れ士大久保行之助の子息愼一郎小山伊織の長男伴左衛門なりと聞くより肇は心よ駭き大久保小山兩人は鳩翁侯の肱股の臣ゑて曾て本家より八附添人なるが如何なゑ事にて毎の程歸國ゑたるか訝しやと思へど此場で問ひもならねば胸を定めて兩人とゝもゑ糺所投て赴きけり有恁べ志とは努知らぬ岩崎の妻花子ハ昨日の計謀を仕損じゝを最と遺憾く思へどもまた今更ゑ詮あければ道太郎兄妹の死を悔みいせて太く惡み死體を路外へ棄させて刎の腹を愈しゝと思ひ居たるは寔ゑ淺間しき極なれど誰とて諫る者なかりき折から肇の伴あして登城あしたる仲間が遽だしく立歸りて旦那樣ゑは今日浮登城の上殿樣への浮拜謁濟み御退殿の砌浮尋問の節ありとて其まゝ調所へ御廻しとなり只今繩ゑかゝり玉ひしよし又鐵徒士の衆一同も揚屋へ入れられ我々耳ハ搆ゑしと申し渡されたるが承まはる處ゑてと江戸表より御彼貝鳩翁樣が昨夜御入國ありて何か御糺問がはじまるとの事ゑて昨日新御殿へ御給仕浮手傳ゑ御臨なりし方々は追々繩ゑかゝり御城内へ引致ゑありましたゆゑ急ぎ此段御注進を仕つります尙も旦那樣の御身の御動靜聞き糺して參るべしと云ひ捨て引返しゝゆ

ゑ花子は駭き一方ならず偖あそ惡事は露顯したれ特ゑと鳩翁侯が密の入國今朝ゑ到つて不意ゑ着手をしたるからは充分手廻ゝあつたる事ゑて最早免る道はあら玄此うへは繩目の恥辱をうけんより妾も左近將監の妹なり郁之助を刺殺ゑ潔よく自害をせんと決て覺期をあきだるゑか幼兒を抱きて樓ゑ登るゑ拉は佛室に籠ひありて楷子を外せバ他の人の昇るべき樣もあらず花子は躺て佛室に向ひ回向をゑきて准備の短刀片手に持ち郁之助を膝の邊へ坐せく顔つれ〳〵と瞰遣りゑがら涙に曇る眼をしバたゝきて开も何事を云ひ問かすか次ゑる回を看て知らん

其五十六

登時花子は郁之助の顏打瞰遣り涙ながら。爾ハ正しく前の演邊の城主左近將監殿の甥ゑと生ながら從弟同士ゑる富丸の臣下とゑさんは朽惜しく何卒演邊の家名をば相續させんと思ふより父公とゝもに富丸を滅はんとゑゝ謀計も遂に露顯となりたるゑり素より幼雅の那の富丸是まで殺害ゑるの機は度々なれど變死させてハ家中の疑惑反て爾の代とゑつて二心を懷く者ゑらんと其れや是やを思ひ過ゑ新に造りし別殿の池ゑ架したる八ッ橋の毀けて死し



あゞ其時こそ工事の者の不注意を咎めて普請よ干渉ゑ人夫を殺らず死刑となゑ患を換ひ血筋を云ひ立て直ぐに爾を城内へ乗り込せんと企謀ゑ潜てゆ謀合ゝ鳩の背と喰違ふたる夫婦が大望冥人は縄目よ罹りしとあれゞ今にも母子を捕へんと逮捕の向ふは必定ゆゑ妾も左近將監の妹忌ゝしき縄よ罹らんより爾を刺して妾とまた此場で自害なをゆかし親子は一世と聞くなれゞ是か今生の顔の看をさめ爾るよてもも果報拙き爾がうへよてありけるよと膝よ抱あけ顔をあて氣丈の婦人も恩愛の別れの涙ゝら〳〵と禁め兼てゞ見えよける拆から慌しき人の脚必定逮捕と氣を取り直し泣き入る吾子を膝よて壓へ口よ稱名右手には短刀胸を定めて眼を閉ち咄嗟郁之助が咽喉の邊を刺んしたる後の方よりヤレ須臾と殺をかけ花子の利腕腕と把るを駭き看れゞ思ひがけなき鳩翁侯よてありけるゆゑハッと計りよ仰天の膝のゆるゝよ慌へられし郁之助をゞ突と寄りて抱き取り玄ゝ帯刃なり其時鳩翁侯は花子よ向ひ血線は私卿卿は正ゑく國家の罪人恁る事よてもあらんかと自身よ馬を向けたるなるが四方乃楷子を斷ち此樓へ登り居たるゆゑ自殺乃覺期と推ゑゝゆゑよ裏手より楷子をかけて登り来ゑが案よ違ゑぬ此場の体輕からぬ罪を犯ゑあがら自殺せんとゆ〳〵不屈ゑた豪盛なる郁之助と

刺さんなどゝは無分別左よも右にも鳩翁が計らふ胸もあるなれゞ必ずとも又死を急がれゑ母子ども〳〵我邸に蟄えて沙汰を待ゑそよけれ肇とゝもよ嶽裏よ繋ぎ紛同ゑずべき管なれと富丸君より花子ゑそ正しく伯母君の事ゑれゞ鳩翁よきに計ふべしと仁慈籠れる上意よより獄に繋がず吾自邸へ拘監筈にてあるなれゞ諄々不所存なる事ゑりて上意よ悖る事ゑかれと最と仁慈ある鳩翁侯の辞よ花子は死にもならずまた手向ひも出來ざるよ予但默念たる計なりしが毫も早くと鳩翁侯の指令よ心得黒川は准備の輪戸舁入れさせ母子別々乗遷らせ自身之れを護衛なし鳩翁侯乃自邸なる下の町へゞ急がせける恁て鳩翁侯ゝ岩崎の召使ゆ夫々の宿へ引下らせ邸内へゝ守護の者を置き且先おろ工事よ關係ゑて城内よ止め置き外出を禁ぜられゑる人夫數百人を引出し抑も鹿田屋忠五郎より雇入れられ工事落成の後御酒を下さるゝと云ひ觸し殘らずを城内へ入を其まゝ留め置かれしまでの顛末を口供よ遠印させ國詐の事情充分に探索の行屆きしゆゑ嬾て十一月三十日に至り肇を調所へ喚び出し鳩翁侯自身よ糺問さるゝ其趣きゝ且繪模に顯すものから次回よ記さん

其五十七

政廳紀彈所の正面よは御後見鳩翁侯出席有列座の諸士は荒木虎之介並河帶刀田邊又太郎其他岩崎が爲よ謹慎或は蟄居抑ヲし付られし當家譜代ハ忠臣等鳩翁侯入國のうへ其謹を解れ出勤ま丶人々等あり躰て岩崎肇を拘留所より引出ー一段低き樣側へ据たり肇は先頃登城の儘取押とあり當日一應の尋問ありしと雖も存ぜぬ知らぬと主張し更よ伏する体なき故充分ま證據を示し招丁させんと今日まで何等乃沙汰もなかりしなれど爾る詰較のありまは知らず畢竟斯く紀彈の遲延するは證據の無よ苦みて困却なすと覺たり今日れ鳩翁直々よ紀彈あすと聞ク〳〵一々論破ま坊主首よ閉口させて見んずと怖る丶色あく揚々と縄着のまゝ坐しゐたり少時ありて田邊又太郎は席を進ませ肇よ向ひ先頃一應尋問よ及びまがと國家を横領せんとゆるの企謀なしと陳じたるが如何にも汝が横領するの企謀なくとも恐れ多くも侍當主を弑ま奉り一子郁之介を御養子と稱し乘込ませんと夫婦共謀なしたるうへ同志を募め徒黨を與しは之反逆の顯然たる者にて今更朕々陳ずるよれ迫ハず其直よ伏罪仕つれと道へハ肇れ片頬に笑み逼れ仰々しき侍詰問かま岩崎肇は侍當家の譜代先祖代々分外なる秩祿を頂戴し特に小可へは恐れ多くも侍先代の令妹を降嫁ま玉ふの光榮を帶び家門の繁盛を極めし身

よして何を不足よ野心の企謀あるべき樣も候はず之ゑ全く肇夫婦を嫉む輩の讒言よ〜て誣告なしたる事なるべし爾るを態々御後見が侍入國ありての紀彈は近時恐れ入つて侍居りまゆると自若とまたる答辨を鳩翁侯に聽取りて徐よ肇へ打向ひ前左近將監殿の遺を蒙り又主殿死去の後は幼年なから執政の上席どゆり剩さへ君妹降嫁の光榮を蒙むる其莫大なる君恩を忘れ野心の企謀あすやうあしとは宴よ爾もあるべき事なりき謂れども通れぬ罪跡の顯然たれハ口賢しく抗辨なすとも天理といふ鏡よかけて照す時は肯て陳ずる道あらんや今一々よ尋問する證據よ向つて藍く駁破なすべき辨論あらハ隱道なしたる鳩翁が今日よりして後見を辭し國政渾て汝よ委ねんッレ又太郎詰問かせよと下知よ田邊い畏まり側へよ置し手文庫より把り出たしたる數通の書類を披き詰下すい第一ま肇か石ノ川にて道乃よ奪はれし手紙第二よ近藤勘介が口訴狀第三よ河窪の下女おさくの口供第四よ彙駄師彌之助の妹お辰及び同職卯太郎が手續書第五よ岩崎が若黨勝平猩々德の口狀第六よ柳橋の藝妓志女吉河窪の娘登代事小登代が口狀第七よ伊東甚之介の口供第八よ海野主計の口供第九よ松倉秀雄が探索の手續書第十鳩翁侯入國以降捕縛されま肇一味ま者の口供及び工事方數百人ハ口供等

なり此十通の證據書類よ對し辨解の道あらバ陳述すべーと最嚴重よ讀み聞かせバ華も期ま
て探索の行屆きしとは思ひがけねば何んと辨解すべき樣なく但默念と差俯向五なす汗を額
より垂るゝ計りの風情なれバ鳩翁侯ゞ辭を柔け「ヤヨ華汝は遠き伊達家の甲斐近くい仙石
家の左京の徹を踏む覺期よてもあらざるべけれど一朝謀計露顯なしなバ環て覺期もあるべ
きよ今とあつて未練よも抗辨あすは卑法なるべし女ながらも汝の妻い了得よ左近將監殿の
妹ほどありて罪の鎖末を逐一よ余まて自首なし沙汰を待ちぬ其れよ汝は毎まても手數をか
けて伏罪せざるを大丈夫とも思ふ癖者もあふんか飽まて上へ抗抵し祖先へ不幸と思はざる
不忠不孝の身とあるい开を亦汝が決心あるかと深き仁惠乃含蓄たる其一言よ岩崎い思はず
ハッと首を低げ骨をひしがれ身體よ非除鉛の熱湯を灌がるゝとも伏罪せず獄理よ繫れん決
心なりまが妻か自白を走ゝと云ひ殊よは侯が今の一言拷問よりも骨々よ徹へて恐き入りま
する此上は遂一拠了するまてもあし天の免さぬ吾罪遯逃かよ處分あるべし偏よ願ふは妻
子等へ但寛典の沙汰をバと豪邁不敵の岩崎肇もホロリと翻す一滴の涙のうちい奈何なら
ん千萬無量の含蓄あるべし

其五十八

（大團圓）

鳩翁侯が權謀の一言とい知らず妻花子が自白しゝとの事を聞き且は家名の廢絶を悼び仁慈
の辭に岩崎肇は抗辨あすべき氣勢も拙け遂よ服罪またりしかバ當日詮議を了り復度同人は
獄に下らしめ當日よりして庶人の取扱ひをなさまめ是より處分の協議を尽しゝよ就れも天
地よ容れざるの大罪人あれバ磔よ行なふこそ至當ならめとの議論湧出それど鳩翁侯い之を
容れず未だ其志しを遂たるよもあらず特よい前君の寵遇からざりまを以て宜しく一等を減
ずるあそ當代此厚德なるべけれと竟よ首謀岩崎肇は獄門よ處する旨を評決まを罪狀を添へ月
番の閣老へ上申よ迫ひけり恁て同人乃妻花子は同領牢登嶋へ流罪よ決ー一子郁之介は其罪
を問ずして鳩翁侯の請願よより是を津和野西休寺よ送り僧となまを近藤勘介は更に中士分よ
取立られ若干の秩祿を賜ひ松倉秀雄が媒介となり彌之介の妹たつを妻に迎へし由遠は迫よ
後の話說あれど因よ記すまた河窪の娘登代へは更よ父の家名相續を命ぜられ舊の如く家
祿を賜り之れよは同藩中乃某甲を聟とー其他駒勇の盡忠を賞し祭禮料として巨多の金數を
賜り同家はおさくが相續し其他岩崎一味此者は夫々罪を糺して輕重よ就し善人へい相當乃

恩典あり濱邊の家門聳固の基礎を定めゝ折から江戸表より肇の死刑を許可されまを以て獄より引出ま刑檀の下よ脆くも刀の露と消て首級は野外に梟さるゝ身となりしは爾に出でゝ爾よ飯る惡業茲に報ひしなれど之れを觀んとて聚ひま者は先ごろまでも家門榮ま宛も權威を逼しうせし岩崎肇が身の果なるかと其聽報の免かれ難きを評して已を戒めたりと予此獄全く終しは文久三年十二月の末なりと聞ゐま然るよ如何ある譯ありまか同藩ゑ於ては此事件を深き秘し設領内ゐ民にして他人へ洩らと者あるときは厳刑よ處せらるゝの規則を觸示しゆえ知人迚は稀なりしが本年は彌之助が三十三回忌よ當るを以て同村の有志者が謀り同人ゝ勿論駒勇等の爲めよ大法會を修行し又人口よ噂炙する此事歴の實説を編み長く香花院よ存ま置かんとの計較より識人よ其の顛末を物語りまを傳へ聞くまゝ筆にうつして恁長々しく記載はしつゑと憚る所ありて藩名ゐ省きゐれゞ聊かもの足らぬ心地もあるべけれど开ゐ條例のあるありてゐりと偏よ御推讃あらん事を希がふ耳

濱邊の荒濤 終

明治十九年七月廿九日出版御届
仝　年八月　出板御届
仝　年八月廿三日別製本御届
仝　年八月　出版

定價金九十錢

編輯兼出版人　新潟縣平民　覺張榮三郎
日本橋區本石町二丁目十六番地